

新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義

－キジル・ニヤ・タンダンウイリク－

小島康誉

はじめに

筆者は1982年以来、中国新疆ウイグル自治区(以下、時に新疆と略す)を130回以上訪問し、文部科学省・中国国家文物局・新疆ウイグル自治区人民政府(以下、新疆政府と略す)・新疆ウイグル自治区文化庁(以下、新疆文化庁と略す)・新疆ウイグル自治区文物局(以下、新疆文物局と略す)・新疆文物考古研究所(以下、新疆考古研と略す)・佛教大学(以下、佛大と略す)をはじめ多くの方々のご指導ご協力をえて、新疆にのこる世界的文化遺産の調査・保護・研究とその関連事業を実践してきた。関係者諸氏に心からの感謝を表したい。

活動の一例を示せば、キジル千仏洞修復・ニヤ遺跡調査・タンダンウイリク遺跡調査・新疆文化文物優秀賞提供・中国歴史文化遺産保護網運営・歴史档案史料刊行・新疆大学奨学金提供・希望小学校建設・各種代表団派遣・招聘などである。

2010年3月19日づけ国家文物局(文化庁相当)機関紙「中国文物報」は一頁特集をくみ、ニヤ・タンダンウイリク両遺跡の調査保護研究事業を「中国外国間共同事業と学問交流の模範例」、「多領域学問で西域考古の合作研究と保護を行った」、「中国外国学者の共同努力の傑出事業」などと最大級の評価で報道した。心血を注いできた一人として喜びにたえない。同報は同年6月16日にも「小島康誉：新疆に全人生を投入する感動的日本人」と一頁ちかい大型記事、光栄なことである。

日中双方専門家がチームを組み、調査研究保護を展開し、成果を陸續出版した報告書や佛大・ウルムチ(烏魯木齊)・北京大学で開催したシンポジ

ウムで公開し、研究保護した遺物の一部が東京・京都・大阪・神戸・岡山やウルムチ・北京・上海・杭州・香港・台北をはじめとしてイタリア（ローマ）・アメリカ（ボワーズ・ヒューストン）・韓国（ソウル）での文物展へ出陳されるほどの水準であった、ことなどへの評価であろう。

筆者は、これまでも「世界的文化遺産の保護研究を使命として－キジルからニヤ、ダンダンウイリクへ－」（『佛大アジア宗教文化情報研究所研究紀要』第3号・河北印刷2007）などで発表してきたが、紙幅の関係などから充分ではないので、その後を含めてその全容を整理し、国際協力の意義とともにまとめてみたい⁽¹⁾。なお各活動を記録として残すために、尽力者名は煩をいとわず記載し、新聞報道などに関しても本文カッコ内に記載した。

1. 新疆ウイグル自治区と西域仏教

1. 新疆ウイグル自治区について

本論のサブタイトルを読まれて、そのイメージのわく方は、研究者か、よほどのシルクロード通であろう。いずれも「新疆ウイグル（維吾尔）自治区」の地名である。意味の異なる「疆」が使用されたり、ウイグルとはまったく別の国名ウルグアイと混同したり、新疆省と古い名で呼んだり、新疆ウイグル族自治区と間違えたりと、日本人には馴染みのうすい一帯である。いや中国でさえ新疆ウイグル族自治区と表記している例を見聞きすることも度々である。そこで最初に、新疆ウイグル自治区を紹介したい。これは新疆政府顧問としての筆者の役目でもある。

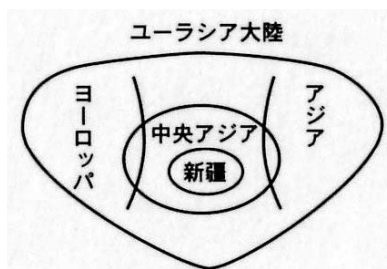


図1 中国新疆の地理的概念図
(中央アジアの範囲はユネスコによる)



図2 ▲＝キジル千仏洞
■＝ニヤ・ダンダンウイリク両遺跡

新疆ウイグル自治区は1955年10月1日に成立した。東西南北の文明文化が行きかったいわゆる「シルクロード」の中央に位置し、モンゴル・ロシア・カザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・アフガニスタン・パキスタン・インドと国境を接し、国境線は約5,600kmにおよぶ。地政学的に古来より重要な一帯であり、古には東西交通の要衝の地であり、19世紀から20世紀にかけては欧米で「グレートゲーム」と称された領土争奪を目的とした諜報戦が展開された⁽²⁾。現代では「上海協力機構」の中国側接点の一部として大きな政治的意味をも持っている⁽³⁾。

面積は約166万km²、中国の約六分の一、日本の約4.4倍。アルタイ・天山・崑崙の三大山脈がジュンガル盆地とタクラマカン沙漠をはさむかのように聳えている。5～7,000m級の峰々は万年雪や氷河におおわれ、バインブルクなどの草原には高山植物が咲き乱れ、羊・牛・馬・山羊などが放牧されている。

新疆を理解するキーワードは、シルクロード・多民族・資源・中央アジア経済圏センターの4点であろう。多くの文明文化が行きかい、楼蘭・キジル・ニヤに代表される世界的文化遺産が各地に点在している。文明文化を運んだのは人々であり、ウイグル・漢・カザフ・回・モンゴル・キルギス・シボ・タジク・満州・タタール・ウズベク・ダフール・ロシア各族を中心に47民族、約2,158万人(2009年末)が協力しあって生活している。往時の交流がしのばれる民族の多さである。石油・天然ガス・石炭・レアメタル・水などが大量に埋蔵されていて、開発が始まっている。タクラマカン沙漠はかつて「死亡の海」と言われていたが、いまでは「希望の海」に変わった。中心都市ウルムチには高層ビルが林立し、近隣諸国との経済活動は活況を呈している。日本企業の進出も始まっている。

新疆が広く日本で知られるようになったのは1980～81年放送された、NHKと中国中央テレビ共同取材番組「シルクロード」によって、神秘の扉が開かれたことによる。喜多郎のテーマ曲と石坂浩二の語りとともに、社会現象ともなり、以来「シルクロード症候群」といわれるほどの熱烈的なファンをつくりだした。2005年には「新シルクロード」が放送され再び注目された⁽⁴⁾。改革開放30年をへて中国の経済発展は目覚しく、新疆でも

投資と観光ブームで各地からのビジネス関係者や観光客があふれている⁽⁵⁾。日本人も最多時には年間約5万人が訪れたという。

2009年7月、ウルムチでウイグル族の騒乱が発生し、9月には漢族の大規模デモが行われ、これらの大量報道により世界から注目を集めた⁽⁶⁾。2010年4月、新疆トップの王楽泉中国共産党中央政治局委員(以下、中央政治局委員と略す)で中国共産党新疆ウイグル自治区委員会(以下、中共新疆委員会と略す)書記(現中央政法委員会副書記)後任の張春賢書記就任に合わせ、中国政府による大規模な全面的支援策が開始されたことなどにより、歴史的な大発展期を迎えている⁽⁷⁾。騒乱で激減していた投資や観光客なども戻りつつある。新疆をふくめ中国は改革開放で大きく変わった。今後さらに歴史的变化をとげることであろう。

さて、このような新疆であるが、本稿で取り上げる文化遺産はいずれも仏教遺跡である。次節でこの一帯の仏教について略記しておこう。

2. 西域仏教について

釈尊(BC.463~383・異説あり)による現インド東北部・サルナートでの初転法輪をもって始まった仏教が、現新疆一帯に伝来した時期については前1世紀前後と推定されている。西のカシュ(喀什・旧喀什噶尔・紀元前後は疏勒)に伝わり、東のオアシス都市へ伝播していった。最盛期は5~7世紀頃と思われる。

玄奘三蔵の取經の旅を弟子弁機がまとめた『大唐西域記』にはクチャ(庫車・西域北道の古都龜茲)の様子が「伽藍は百余ヶ所、僧徒は五千余人で、小乗教の説一切有部を学習している。教義の基本を印度にとり、その読みならうものは印度文である。…きよらかにたのしみつとめ、人々は功德を積むことを競っている。…秋分の数十日間は、国中の僧徒はみなここへ集まってくる。上は君主より下は兵士・庶民に至るまで、俗務をとりやめ、斉戒をまもり、經を受け説法を聴き、日を尽くしてもなお疲れを忘れるほどである。」と往時の様子が記されている⁽⁸⁾。このような隆盛を誇った西域仏教も10世紀のカシュを皮切りに、ホータン、クチャ、トルファン、ハミと西から東へしだいに滅びてゆき、15世紀末までには全滅したと考えられ

ている。

この間、新疆およびその周辺をふくめた西域仏教の果たした歴史的意義の最大のもの、鳩摩羅什・康僧鎧・竺法護など多くの訳経僧を生み、彼らが幾多の經典を中国語に翻訳・布教し中国仏教の基礎を築いたことであろう。その代表格が鳩摩羅什三蔵で『阿弥陀經』や『法華經』など約300巻を訳出し中国仏教ひいては日本仏教に多大な貢献をした。日本で広く読誦されている玄奘三蔵訳『般若心經』も鳩摩羅什三蔵訳を殆ど踏襲しているほどである。

滅亡の原因は、イスラーム教の進攻(各地で激しい聖戦、ホータンなどにその跡と伝承されている遺跡もある)を主因として、政治的影響(仏教を擁護する勢力の後退)、民族の交代(仏教を長く信仰してきた古代亀茲人などから9世紀中葉移住してきた後に仏教を信仰したウイグル族へ)、成熟度差(両宗教には約千年の差)、教義差(自らを仏とすることを目指す仏教と自宗教世界建設を目指すイスラーム)、厳しい自然(イスラームのほうが合う)、民衆からの支持(一帯の風俗から受け入れやすいイスラーム)などが考えられる⁽⁹⁾。

いったん滅びた西域仏教(ラオパルンタイなどでのチベット仏教は継続していた)は、新疆ウイグル自治区成立後、入植した漢族により再興されつつあり、昨今の経済急成長と各種改革開放のなか、信者も増加している。ウルムチには「清泉寺」も建立された。それらを管理する機関としてチベット仏教を含めて、新疆仏教協会があり、夏立宛活仏(モンゴル族)が会長を務めている。

2. 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会とその概要

1. トルファン参観で知った熱い心

各活動を以下、年代記のようにまとめてみたい。

筆者が新疆を初めて訪れたのは1982年6月のこと。日中国交回復の1972年以来、広州交易会などで宝石を買い付け、日本で販売していた。あるとき友好商社から「新疆に良い宝石がある。」との情報をもたらされた⁽¹⁰⁾。

鉱物である宝石の産地は世界的にはほぼ明らかになっていて、新疆で産出するのは、価値の低いものと承知していたが、度々の連絡とダイヤモンド・ルビーなど宝石名が記載され中国工芸品総公司新疆分公司の公印が赤々と押された書類を見せられ、シルクロードの交易で東西南北からの品が残留しているかもと、出かけた。当時はまだウルムチは特別の入境許可証を必要とする都市であり、外国人は専用紙幣(通称：兌換券)の使用が義務づけられていた時代であった。

軍の警備する新疆迎賓館の会議室での商談初日、「お疲れでしょう。」と宝石は出てこない。翌日「早く見せて欲しい。」と要求しても「宝石は大変珍しく、少ない鉱物です。」の繰り返し。午後やっと机ほどの木箱が運び込まれた。「やはり良い宝石はない。」と直感した。なぜなら良質の宝石は希少でそんな大きな箱にはっていないし、専門家なら当然知っている希少性を強調するからだ。出されたものは低品質のベリルなどの原石だった。「この書類に書いてある宝石は！」と迫ると、「宝石は大変貴重なもので、我が分公司は出来たばかりで、これらは取り扱い予定品目です。」と。返す言葉もなかった。

先方は気がひけたのであろう、トルファンへ案内してくれた。交河故城やバゼクリク千仏洞などを参観しての帰り、突然の大雨で通行止め。現在では一日10便もある北京便は当時は週2便しかなく、どうしてもその日のうちにウルムチへ帰らねばならない。しかし道路は通行止め。案内してくれた工芸品会社の龔課長が「夜中12時頃に貨物列車が通るはずだ、それを停めて乗ろう。」と。

約30年前の辺境の地で、外国人が軍事施設でもある列車に乗るとするのは至難の事。塩湖貨物駅での交渉は約2時間に及んだ。彼はまず老駅員を説得し、次には「手回し電話」でウルムチの鉄道本部を説得しつづけた。最後に彼の身元を証明するため工芸品会社の責任者から鉄道本部へ電話。待つこと約20分、解放軍から駅員へ電話。「こちらは人民解放軍の〇〇だ。そこに工芸品会社の龔と日本人4人はいるか?」、「います。」「その人たちを貨物列車に乗せて、ウルムチまで送ることを許可する。」この直後に列車の鳴らす警笛が聞こえた。降りしきる雨の中、我々は駅舎からホームに

走り老駅員がランプをかざし列車を停め、最後尾車両に乗せてくれた。解放軍兵士が乗っていた。

ウルムチ駅へ着いたのは午前5時。迎賓館で仮眠する間もなく空港へ急いだ。この客中心で対応する暖かい心、熱い心に打たれ、豊富な文化遺産に惹かれ、その後も数度、宝石やノベルティーの買い付けに出かけた。

2. 二つの感動と案内人の冗談

1986年5月、敦煌・雲崗・龍門と並ぶ中国四大石窟のひとつ、天山山脈南麓クチャ西方約70kmのキジル(克孜尔・赤を意味するウイグル語)千仏洞を初めて訪れた時の感動は忘れることができない⁽¹¹⁾。キジルは、北緯41度47分・東経82度31分一帯に位置し、海拔は1,110m前後である。当時のクチャは対外開放されておらず、「外国人旅行証」を取得したうえの参観であった。

ラピスラズリの青で描かれた釈尊の前世の物語には圧倒された。日が暮れて道に迷う旅人に自らの手を燃やす釈尊。飢えた虎の親子にわが身を差し出す釈尊……。236の石窟の大半に、のべ1万㎡もの膨大な壁画が残っている、早いものは3世紀に造営され最盛期は6～7世紀という説明であった⁽¹²⁾。



図3 登るのさへ危険な状態



図4 剥ぎ取られ痛々しい姿(第38窟)

石窟造営を発願した人たち、膨大な資金を提供した人たち、英知を絞り穿ち描いた人たち、仏の道を説いた人たち、そこで修行した人たち、その生活を支えた人たち……。陽はのほり、陽はしずみ、風雪にたえ、異宗教にたえ、盗掘にたえ、百年、五百年、千数百年。今なお色鮮やかに残る人々の願い。世界的文化遺産であると直感した。

そして、自らの生活も十分に賄えない環境の中で、それらの国宝級遺跡（全国重点文物保護単位・1961年指定）を保存しようと汗水を流す現地の人たち。ふた昔以上前の中国の辺境の辺境。掘って立て小屋に住み、つぎはぎだらけの服、食べるものさえ事欠く中での細々とした保存活動……。

帰り道、案内してくれた新疆工芸品公司の王世田職員がこう言った。「小島さんが10万元を出してくれたら、専用の修行窟（筆者得度は翌87年）をつくってあげましょう。」当時の10万元は約450万円。彼は、まったくの冗談のつもりであった。しかし、二つの感動から筆者は即座に「分かりました、出ししましょう。」と答えた。一、二度会っただけの外国人のこの答えに彼は驚いた。私たちが大金のことを「1億円!」と表現するのと同じ感覚で、10万元と言ったのだ。当時の新疆での10万元はそんな金額だった。

筆者は重ねて言った。「修行窟はいりません。修復に役立ててください。」彼は「冗談です。忘れてください。」と言い、何度も筆者の真意を疑った。それはそうであろう。思いもよらぬ大金を、何の見返りも要求せずに出すというのだから。ウルムチへの帰途、2日間二人の会話は「冗談です。忘れてください。」「冗談は分かっている。しかし保護に使って。」の繰り返しであった。確認を重ねた彼は、ついにこちらの文化財保護の気持ちを理解した。「よく分かりました。しかし自分は修復資金を受け取れません。盛さんが政府機関を紹介しましょう。」

その頃、盛春寿処員（2001年から新疆文物局局長）は新疆大学を卒業して、新疆文化庁文物処に勤務したばかりで、案内というよりキジルを参観する外国人の見張りといった雰囲気、会話を聞いているだけであった。遺跡参観はもとより新疆を訪れる外国人は殆ど皆無の時代であった。

紹介されたのは、新疆文化庁文物処の韓翔処長だったが、彼も考えてもいなかった申し出に、何度も「なぜ？ 本当？ 真の目的は？」を繰り返した。簡単なメモにサインをして帰国、翌月に筆者と韓翔・新疆工芸品公司責任者の三者が協議書にサインした（「筆者と新疆文化庁の協議書」1986.7.16）。しかし、振込先がなかなか来ない。保護寄付金を振り込んだのは10月31日のことだった（「新疆文化庁領収書」1986.10.31）。新疆での外国人からの文化経済などあらゆる方面での初の寄付申し出で、半信半疑、

別の目的があるのではと、許可がなかなか得られなかったからだ。当地の最高実力者である王恩茂全国政治協商會議副主席(1985年まで中共新疆委員會書記)がようやく承認したと後日聞いた⁽¹³⁾。

しばらくして再び新疆を訪問すると、外国人も重視するほどであればと、中国政府がキジル千仏洞へ2,000万元を投じて本格的修復を行うことになったという。従来も細々と保存活動は行われていたが、学術調査をするのさえ危険な状態で、そのまま放置すれば崩壊は加速度的に進み、人類の貴重な文化遺産は歴史の中へ消えてしまう。これをなんとかくい止め、一般の人も参観できるようにしようと、修復保存工事が検討されているなかでの外国人からの寄付は本格的修復のきっかけとなったようである。

筆者は、それなら10万元では足りないから、日本で浄財を募り1億円を寄付しようと申し出た。当時の現地の物価などを考えると、現在の1億円(約13億円)にも匹敵する巨費である。新疆文化庁の庁長はじめ皆がまた驚いた。「エーッ!」と声をあげたほどである。筆者は、キジルをはじめとする西域の文化遺産の荒廃には、日本の大谷探検隊も関わったことに思いを馳せていた⁽¹⁴⁾。日本のほかにもドイツ・ロシア・フランス・イギリスなどの探検隊による壁画などの持ち出し、往時の現地人による金箔剥がし、異教徒による破壊、そして長年の自然崩壊が荒廃の主な原因である⁽¹⁵⁾。

キジル千仏洞はシルクロードに咲いた仏教芸術の名花であり、考古学・民族学・東西文化交流史・美術史・仏教学・言語学・保存科学など多方面からの本格的研究が待たれる貴重な文化遺産である。

当時、この雄大な石窟群で、番号がつけられ保存されているのは236窟、その内、窟として残存が比較的良好なのが104窟、壁画がよく残っているのが74窟あり、研究者に開放されているのは20窟、一般開放は6窟だった。開放窟が少ないのは行くことさえ困難なところにあったり、危険であったりするためである。ほかの中国四大石窟はすでに基本的修復が終わっていた。キジル千仏洞はその規模、質からいって中国だけでなく人類共通の文化遺産であり、次世代に引き渡す責任があると考え、寄付を申し出たのである。

承認を得るまでには、この時もまた時間を要した。1987年5月20日、新

疆迎賓館での調印式には、王恩茂副主席も出席。王副主席は、募金パンフレット用中国語挨拶文案を一字一句読み、遺産の前に「文化」の二文字を挿入した。その実直な姿にうたれた。氏はその後、筆者の良き理解者として、なにかと支持していただいた。協議書は筆者と王成文新疆文化庁副庁長がサインした⁽¹⁶⁾。



図5 当時はキジルや天池も特別許可を必要とした



図6 王恩茂副主席列席のもと協議書調印

3. 壁画の特徴

中国四大石窟のなかで最も西に位置し、最も古いキジル千仏洞は、天山山脈より流れ出てタクラマカン沙漠に消えるウイガン(渭干)河(別称・ムザルト河)の北岸約3kmにわたって、穿たれている。3世紀から13世紀(韓翔処長説)という長い年月にわたって、古代亀茲人やウイグル人などにより造営された。比較的軟らかい断崖(河岸壁)を穿ち窟として、その内側に土をこねた漆喰状のものを塗り、その上に御仏や動物などが描かれた。大きな窟は完成までに数年かかったことであろう。

石窟の形式は中心柱窟・大像窟・方形窟・僧房にわけられる。中心柱窟は前室・主室・後室の三部分で構成されていたが、ほとんどの窟で前室は崩壊している。釈尊の偉大さを称えて創り出された本生物語が石窟内の菱形格子模様の中に大量に描かれているのがキジル壁画の特徴といえる。ラピスラズリの群青色が強烈な印象を与える。

第8窟は谷西区に分類されている中心柱窟で、主室前壁入口上部には供养天が描かれ、ガーランドや鮮花をもち、五弦琵琶を奏でている。主室窟頂中軸部には太陽・立仏・双頭金翅鳥・風神・月が描かれ、その左右には

5段の菱形に因縁図などが描かれている。なお「五弦琵琶」は世界で唯一、正倉院に遺存されていることからか参観に訪れる日本人には最も人気のある窟である。

第100窟は谷内区に分類されている中心柱窟であり、一般非公開である。主室左右壁には装飾文様で区切られて上下3段に仏伝図が描かれている。袈裟をまとい鉢をもつ仏が台座に坐している。その左右には鉢をもつ比丘が2人ずつ描かれている。聴聞しあるいは供養する姿である。

第179窟は谷東区に分類されている中心柱窟であり、一般非公開である。日本人窟とも称される。大谷探検隊が本窟で作業したことからドイツ隊がそのように呼称したという。主室門道左壁には三珠寶冠をいただき上半身をあらわにしてネックレスをつけた護法龍王が、その後方には4匹の蛇頭が描かれている。

第224窟は後山区に分類されている中心柱窟であり、一般非公開である。主室右壁には上下2段に因縁・仏伝図が描かれている。探検隊により切り取られた壁画の間に説法する仏と聴聞する鹿を見出す時、合掌せずにはおられない。

これらの壁画は長い年月にどれほど多くの人々の心を癒したことだろう。

4. 修復保存計画の概要(当時の計画書より)

工事主管＝新疆文化庁。工事期間＝1986年より5年間。準備工程＝進入路の整備、電気・水道・宿舍工事などを86年に開始し87年中に終了するとともに87年前半に測量、修復保存工法の実験、強度試験などを行い工法決定。工事の進行にあたっては、北京や蘭州などの専門家を交えて、試験しながら進める。

第一工程＝谷西区は長年にわたって崩壊した土砂約300万 m^3 を取り除き下部を平らにする。この過程で今まで埋もれていた石窟が発見できる可能性がある。更に下部に埋もれているかも知れない窟については費用と工法の関係上、将来改めて検討する。この部分に埋もれている可能性はかなり高いと予測される。この工程を88年4月より開始する。谷東区は谷西区に準じ、谷内区については土砂の取り除きはしない。後山区は山上のため階

段・回廊が主となるが難工事が予想される。

第二工程＝山肌(断崖)、石窟の周囲などを固める工事で、崩れやすい山肌を固めるために鉄筋の網をかぶせ、それ全体にコンクリートを吹き付ける。石窟内部および周囲を固める工法は、特殊液剤を浸み込ませる。石窟内も整備する。この工程を90年までに終了させる。

第三工程＝石窟内の壁画の修復工事で、剥落していた壁画残片をひとつひとつ嵌めもどす。長期間が必要であり、一部については90年に完了し、一部は引き続き行う。なお工事中も参観を中止せず、工事をしていない窟を開放する。工事完了後は危険箇所をのぞき、なるべく多くの窟を開放する。予算＝2,000万元(1987年10月時点の単純レート換算では約8億円。)

5. 困難を乗り越えた協力会の募金活動

1987年11月、筆者は塩川正十郎文部大臣の示唆を受けつつ「日中友好キジル千仏洞修復保存協力会」を設立し、事務局は株式会社ツルカメコーポレーション(現As.meエステール)に置かせていただいた。名誉顧問に元総務長官・沖縄開発庁長官の中山太郎衆議院議員、会長に上村晃史上村工業社長、副会長には水谷幸正佛大学長(後に本学校法人理事長)はじめ、宗教界・経済界・学界のお歴々に就任をお願いし、筆者が専務理事を担当した⁽¹⁷⁾。

12月、募金パンフレットや宣伝ハガキ・テレホンカードなどを作成し募金活動を開始したが、敦煌と違ってほとんどの方がキジル千仏洞をご存知ない⁽¹⁸⁾。『『ジキルとハイド』のジキルじゃないのか?』といわれる始末であった。新聞・テレビ・ラジオに報道を要請し、当時は社長であったこともあり取引先などに無理なお願いもした(「中日新聞」1987.12.11、「日本経済新聞」1987.12.14、「毎日新聞」1988.2.16、「中部読売新聞」1988.2.28、「朝日新聞」1988.3.5、「読売新聞」1988.4.30)。また上村会長には表面処理技術講習会も開いていただき、その収益を寄贈いただくなど協力会役員にも尽力たまわり、事務局企業丸山朝・市川洋平・小島聡子・松尾利勝・青山巽・関口靖雄・加藤賢二・上岡長作・北野博之らの役員・社員諸氏には各段の努力をしていただいた。



図7 募金パンフレット(部分)



図8 大量の広報活動を展開(部分)

1988年4月28日、新疆人民会堂にて黄宝璋新疆副主席列席のもと、第一次贈呈式を行ない、トラック等8台2,701万円相当と現金3,500万円の計6,201万円を贈呈した、黄副主席からは「1,700年の歴史あるキジル千仏洞への修復資金贈呈は、日本人の世界人類共通の貴重な歴史文化遺産への関心を表し、中日両国人民の友誼を表している。我々新疆各族人民は今回のような友誼を格別重視する。」との挨拶があった⁽¹⁹⁾。「新疆日報」・「ウルムチ晩報」1988.4.30、「日本経済新聞」1988.5.15、「中国新聞」・「日刊工業新聞」1988.5.20、「中外日報」1988.6.21、1988.7.1、1989.6.16、「中日新聞」1989.4.11)。贈呈式には協力会副会長の松原哲明臨済宗龍源寺住職と筆者が40名からなる代表团とともに参加した。その後キジル千仏洞など多くの遺跡を参観した。読売新聞が同行取材し「西域二千キロ」と題して8回シリーズで報道された(「読売新聞」1988.6.6～17までの8日間)。

1989年6月には天安門事件が起こり、活動も影響を受けたが、8月30日に新疆人民会堂で王恩茂副主席列席のもと、第二次贈呈式を行ない、現金4,343万円を贈呈した⁽²⁰⁾。「新疆日報」1989.8.31)。松原師や筆者など22名が参加し、その後キジル千仏洞などを参観した。二次にわたり3,000をこえる個人や企業からの浄財1億544万円を新疆政府に寄贈することができた⁽²¹⁾。「新疆日報」1990.10.23)。王副主席からは「貴方は中日人民の友誼と文化交流の使者として、キジル千仏洞を修復し貴重な歴史文化遺産を保護するために、3年近く苦勞を厭わず1億円という巨額を贈呈し、たいへん大きな貢献をした、中国新疆の各族人民は忘れることはできない。名誉顧問の中山太郎先生が外務大臣となられたことを熱烈にお祝いし、新疆を訪問さ

れることを歓迎する。』(中国語・拙訳)などとした手紙をいただいた⁽²²⁾。

寄付いただいた多くの企業や個人の方々、尽力たまわった協力会の役員諸氏、さらには事務局として努力いただいた諸氏に心からの感謝を申し上げます。



図9・10 基盤工事から開始



図11 北京・蘭州の専門家による断崖補強材料実験



図12 断崖・回廊工事



図13 壁画保護工事(第8窟)

この寄付と中国政府や関係者の努力とがあいまって、キジル千仏洞は見事によみがえり、現在では日本人を含む多くの観光客が訪れている⁽²³⁾。日本からの寄付で修復が行われた旨の王恩茂副主席揮毫の記念碑も建てられ、浄財を寄せてくださった方々の芳名が刻まれている⁽²⁴⁾。後日、クチャゆかりの鳩摩羅什三蔵の像も建てられた。

1991年3月、キジルを舞台とした東海テレビ制作の「新シルクロード考・砂漠に降った飛天たち」がフジテレビ系列で全国放送された。筆者が撮影許可取得に協力したものである。

1992年9月、筆者は鉄木ル・達瓦買提新疆主席(後に全国人民代表大会副委員長)にキジル千仏洞修復進展ぶりを報告し、鉄木ル主席より新疆政府

文化顧問に任命された。宋漢良中共新疆委員会書記の同意もえたと聞いた。

1993年6月、王恩茂副主席や鉄木尔主席らにキジル千仏洞修復完了の謝意を伝えるとともに、中澤忠義伊藤忠商事副社長や松本孝作同社取締役らを紹介、伊藤忠と新疆政府は総合友好協定を調印した(「新疆日報」1993.6.15～19、『伊藤忠金属月報』1994.1月号)。

1994年9月、文化参観団とともにキジル千仏洞で開催された「鳩摩羅什生誕1650周年記念国際シンポジウム」に参加し、別途参加された鎌田茂雄東京大学名誉教授や王中俊新疆文化庁書記(副庁長)らとテープカットや挨拶を行った。落合俊典華頂短期大学教授(現国際仏教学大学院大学教授)・中川原育子名古屋大学現助教ほか日本各地や中国・韓国・フランス・ドイツなどから約140名が参加し盛会であった(「新疆日報」1994.9.19、「中外日報」1994.9.27)。

1996年12月、王恩茂副主席の支持への感謝をふくめて中国側と共同出版した『王恩茂日記』(日本語版・孫宗明・皮細庚訳・秀文社)の発行式が中共新疆委員会で、党・軍・政の首脳多数が参加し盛大に開かれ、入院中の王副主席は書面でキジルへの貢献などへの感謝を述べ、王樂泉中共新疆委員会書記が本書の意義を強調し、筆者は王副主席との縁を紹介した(「新疆日報」・「新疆経済報」1996.12.12)。

この一帯にはキジルのほかにもクムトラ・シムセム・タイタイル・キジルガハ・マザバフ・スバシ・ウンバシ・トクラクアーケンなど多くの石窟寺院がのこり、新疆文物局下の文化財管理機関である新疆龜茲研究院(1953年、キジル千仏洞文物保管所として発足しその後の名称変更を経て2009年6月より本名称)が管理している。

これら石窟壁画の学際的研究が待たれている。宿白・馬世長両北京大学教授らをはじめとした中国人研究者が総括的研究を行い、邦人では宮地昭名古屋大学教授・中川原育子らが長年にわたって仏教美術面で研究を続けている。模写では張愛紅新疆芸術学院美術師・宮本道夫京都市立芸術大学教授らが活動し、絵画材料・技法研究面は佐藤一郎東京芸術大学教授らが研究院側と共同で行っている。

2007年8月、筆者と新疆文物局の全面支援により、安藤佳香佛大教授が共同研究を開始し、2008年9月にも第2次研究を予定していたが、新疆や北

京での事件により外務省「海外安全情報」が一段階あがり中止となった。以降も中断しているようである。

新疆亀茲研究院は2010年に成立25周年を迎え、8月15日、記念式典がキジル千仏洞で開催され、合わせて「漢唐文明下の亀茲文化シンポジウム」がクチャ国際ホテルで開催された。「新疆亀茲研究院成立25周年記念大会」は盛春寿新疆文物局局長司会のもと張国領研究院第一副院長(院長不在)・韓子勇新疆文化庁書記らの挨拶につづき筆者が記念講演「キジル1986・わが出発点－中国文化遺産保護研究を使命として－」をおこなった。北京大学・上海師範大学教授ら約100人は修復前の石窟や修復工事・募金活動の写真初めて見て、大きな感動が会場にあふれた。その後、盛局長より「新疆の力が十分でなかった時代は小島氏の資金が重要であった、経済的実力の出来た現在は『人に尽くす小島精神』こそ重要である。小島氏より25周年を記念して職員通勤用バスが寄贈される。」と発表があり大きな拍手にまつまれた⁽²⁵⁾(「新疆日報」2010.8.18、2010.9.6、「中国新聞網」・「佛教在線」・「新民網」・「搜狐」2010.8.26)。張副院長から感謝として壁画模写を頂戴した。日本人教授などから「ふた昔も前に保護の重要性に着目し実行した先見力に敬服する。」などの発言があった。



図14 修復後のキジル千仏洞と鳩摩羅什三蔵像



図15 新疆亀茲研究院成立25周年記念大会

3. 日中共同ニヤ遺跡学術調査とその概要

1. 調査の経緯

ニヤ(尼雅・古代ホータン語文献にある「niña」)にもとづくとも、古代

ウイグル語で「はるかな所」を意味するとの説もあるが、明確ではない) 遺跡は、タクラマカン沙漠南縁の小都市であるミンフン(民豊・旧名尼雅から1947年改称)から約100km北上した一帯に残る前1世紀頃から紀元5世紀頃まで栄えた古代都市の遺跡であり、『漢書』などに記載の「精絶国」に比定されている⁽²⁶⁾。

その規模は東西約7km・南北約25km(周辺を含む)という広大な範囲にわたり、北緯37度58分34秒・東経82度43分15秒に位置する仏塔を中心に、寺院・住居・生産工房・墓地・果樹園・貯水池・家畜小屋・橋状遺構・建築部材散布地・垣根・城壁・並木など約220ヶ所の遺構と数10ヶ所の遺物散布地、さらには河床・大量の枯樹林などが残っている⁽²⁷⁾。

「西域36国」のなかでは中規模の都市国家であったが、ほかの都市はそのうえに新しい都市が建設されたりして殆ど消滅し、残存するなかではいまや最大の都市国家遺跡であり、古代西域研究に欠くことのできない重要な位置をしめている。ニヤ遺跡はこのような世界的文化遺産ともいえる規模と価値を有し、「シルクロードのボンベイ」・「幻の古代都市」とも称されている。一帯の海拔は1,200m前後である。

キジル千仏洞の修復活動の過程で、韓処長が言った。「新疆には3つの有名な遺跡がある。楼蘭・キジル・ニヤだ。楼蘭は基本調査がおわり、キジルは日本からの資金協力で修復中、規模の大きいニヤ遺跡は本格的調査が行われていない。」

この話を聞いた筆者は、即座に共同調査を提案した。キジルといい本件といい、よほどの「おっちょこちょい」である。中学生の頃、シュリーマンなどの伝記を読み、ニヤ遺跡の名は脳裏に刻まれていたからでもある。彼はすぐに同意したものの、この時もまた正式許可をえるまでには長い時間を要した。過去の西域一帯における日本人を含む外国人による文化財持ち出しや遺跡が未開放地区に属していることなどの理由からである。新中国建設に邁進中であり、またスタイン最後の探検から50年余しか経過しておらず、外国との共同調査への拒否反応は、今では想像できないほど強烈であった。新疆政府と解放軍に対して、新疆文化庁あげての説得が続けられた。国内では、水谷幸正学長へ研究保護活動を提案し、基本的同意をえた。

1988年7月、わが国の文化遺産保護姿勢を理解してもらうために韓翔新疆文化庁処長一行を招聘し、同月19日、ニヤ遺跡やダンダンウイリク遺跡などをふくむ西域南道の遺跡群調査に関する覚書を筆者と韓翔が交わした⁽²⁸⁾。キジル千仏洞の修復への貢献などが評価され、「参観」名目での共同調査許可であった。

西はローマ、イスタンブールから東は長安(現西安)までを結ぶいわゆるシルクロードは、幾多の文明文化が行き交った道であり、極めて重要な意義を有している。その東の終着点は日本の奈良であったともいえる。日本に伝わった多くの文明文化は、このシルクロードと密接な関わりをもっている。シルクロードのほぼ中央に位置する西域(現新疆一帯)には古代都市を結んで、天山北路・西域北道・西域南道と呼ばれた古代交易路が通っていた。本調査はその西域南道に所在したと仮説のあるニヤ遺跡を対象とするものである⁽²⁹⁾。

ニヤ遺跡を発見し、この遺跡を「ニヤ遺跡」と命名したのは、イギリスに帰化したハンガリー生まれの探検家で考古学者のオーレル・スタイン、1901年1月のことであり、大規模な発掘をおこなった⁽³⁰⁾。彼は06・13・31年にも調査をおこない、700余点のカローシュティー文書、50余点の漢文文書など大量の文物を持ち出し、当時としては卓越した研究をおこない、詳細な報告書などで発表した⁽³¹⁾。第二次大谷探検隊の橘瑞超も1909年に進入を試みたが、途中のイスラームの聖人サデックを祀る墓「イマーム・サデック・マザール」までは至っているが、ニヤ遺跡には暑さのためか、あるいは日程上か到達していないようである⁽³²⁾。その後、1959年には新疆博物館の李遇春らが調査をおこない、遺跡北部で男女合葬墓などの発掘をおこなった⁽³³⁾。これ以外にも参観程度の調査や取材がおこなわれている⁽³⁴⁾。

これらの調査研究により、ニヤが3～4世紀頃クロライナ(扞泥城)を中心とする楼蘭(鄯善)王国の西端のオアシスとして、納税・契約・駅伝制度などの整った中央集権国家の一部であったことが判明した⁽³⁵⁾。二千年を経て今日まで住居の柱などがそのまま残存するタクラマカン沙漠で最大かつ重要な遺跡として注目を集め、一躍有名になったが、大沙漠の奥深くに位置するなどの理由から体系的に調査されることはなく、本格的調査が待た

れていたのである。

2. 調査の開始

1988年10月29日、日本隊3名が日本を出発し「日中共同ニヤ遺跡学術調査」(佛大ニヤ遺跡学術研究機構・新疆文物局〈97年3月までは新疆文化庁文物処〉主催、文部科学省助成、国家文物局批准)が開始された(「毎日新聞」1996.1.20)。



図16 道なき道を切り開き、90kmに12時間



図17 カパクアスカンから沙漠へ

第一次予備調査は、沙漠車やGPS (グローバル・ポジショニング・システム、汎地球測位システム)といった近代装備を持たない、まさに「探検」であった。ミンフンからカパクアスカン(卡巴克阿斯坎)と称される小オアシスまでの約90km (走行距離)に12時間余を要した。道らしい道もなく車輪が砂にとられてたびたびスタックするためであった。カパクアスカンで牛や羊の糞の浮いた水を錆びついたタンクに汲んでいるので、ラクダ用の水かと聞くと、人間用だとの答え。これには啞然とするばかりだった。ラクダに装備を積み、その上に乗って遺跡を目指した。

頼りとしたのは、スタインの報告書記載の簡単な地図と1980年に日中共同取材班を案内した伊弟利斯・阿不都熱蘇勒新疆考古研究員(後に所長・現名誉所長)やラクダ使いコルバンの記憶だけだった。筆者はスタインの概念図により沙漠地帯を北上することを提案したが、中国側リードによりタマリックス堆地帯ルートとなった。安全のために政府から派遣された無線士の定期交信は「現在地不明なれど全員無事」であった。モールス信号用のアンテナを立てる度に小一時間を要した(後年には「衛星電話」を導

入)。タマリックス堆の間を「右だ、左だ」とラクダで3日かけてようやく仏塔にたどりついた。11月6日早朝のことである。ここに画期的調査の幕が開いた。この時の感激は今でも忘れられない。

わずか2日の滞在であったが、遺跡中心部を観察してまわり、概要を把握するとともに、地表散布遺物の収集を開始し、日中双方とも調査の必要性を確認、同月14日には以降調査の覚書を筆者と买买提祖農・买买提艾力新疆文化庁庁長が交わした⁽³⁶⁾。

各年次の調査日程などを記しておく。

1988年調査(第1次調査・予備調査)

日 程：10月29日～11月16日

参加者：(日本側3名) 小島康誉 堀尾宝 北野博之

(中国側5名) 韓翔 王経奎 伊弟利斯・阿不都熱蘇勒 熱傑布・玉素甫 盛春寿

サポート隊(ラクダ使い・運転手・無線士) 6名、総計14名。

行 程：10月29日～11月2日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴。日中双方ウルムチ、ホータンで打合せ、諸準備。ミンフウン着。3日＝カパクアスカンまでの約90kmをトラックと四輪駆動車計3台で12時間余。4日＝ニヤ仏塔までの約30 kmをラクダ20頭でタクラマカン沙漠へ進入。3日がかかりようやく仏塔到達。6～7日＝仏塔・スタイン編号遺構(以下同様) N1・N2・N3・N4・N9などを踏査。地表散布遺物を収集。7日＝帰路に着く。9日＝ホータン着。14日＝ウルムチにて次回調査の覚書調印、日本側答礼宴など。16日＝日本隊帰国。

調 査：ルート図作成。遺跡概要把握。地表散布遺物採集。

当初、本調査には東京国立博物館の2名の研究員が参加する予定であったが、出発直前に中止となったことを付記しておく。調査終了後、中国側許可をえて借用してきた遺物数点を水谷幸正・高橋弘次佛大事務局長(後に学長・現金戒光明寺法主)へ示すと、「仏教遺跡である、共同研究を是

非やろう。」との方針が示され、真田康道佛大教授も興味があるとのこと、また遺物にカローシュティー文書が含まれているので、その方面の第一人者である井ノ口泰淳龍谷大学名誉教授に参加を要請した。

1990・91年と予備調査を継続し、世界でも例をみない大沙漠での調査方法を検討した。90年度調査から住居址模式図の作成を開始するとともにトラックによるルート開発をおこなった。90年11月11日には以降調査の覚書に筆者と買買提祖農・買買提艾力が調印した。91年度調査からはGPSを用いた遺跡位置の登録による分布調査を開始し、沙漠車を実験的に導入した。遺跡管理人を増員するなど保護強化も開始した。



図18 遺跡中心に位置する仏塔



図19 点在する遺構(92B9)

1990年調査(第2次調査・予備調査)

日程：10月27日～11月17日

参加者：(日本側5名) 小島康誉 井ノ口泰淳 真田康道 堀尾宝 窪田憲龍

(中国側5名) 韓翔 王経奎 伊弟利斯・阿不都熱蘇勒 李肖 劉文鎖

サポート隊(ラクダ使い・運転手) 6名、総計16名。

行程：10月27日＝中国先発隊出発。29～11月2日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴。日中双方ウルムチ、ホータンで打合せ、諸準備。ミンフゥン経由カパクアスカン到着。3日＝ラクダ22頭で出発。5日＝2日半を要して仏塔到達。ベースキャンプ(以下BC)設営。砂嵐に遭遇。この間、カパクアスカン残留運転手がトラックで

約10 kmルート開発を行う。6日＝仏塔・N1・N2・N3・N4・N9・N11・N12などを踏査。7日＝帰路に着きカパクアスカン着。8～10日＝ホータン着。近郊の仏教遺跡参観。ウルムチへ。11日＝次回調査の覚書調印、日本側答礼宴など。12～13日＝日本隊上海経由帰国。17日＝中国車両隊ウルムチ帰着。

調 査：住居址模式図作成。分布調査開始。カローシュティー木簡など地表散布遺物採集。

1991年調査(第3次調査・予備調査)

日 程：10月12日～11月6日

参加者：(日本側7名) 井ノ口泰淳 長澤和俊 真田康道 高橋照彦 青木淳 緒方正親 猪沢良秀
(中国側6名) 王炳華 于志勇 阿合買提・熱西提 張鉄男 盛春寿 劉文鎖
サポート隊(ラクダ使い・運転手)・取材班8名、総計21名。

行 程：10月12日＝中国先発隊出発。14～19日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴。日中双方ウルムチ、ホータンで打合せ、諸準備。ミンフウン着。20日＝ラクダ隊準備するも使用せず、沙漠車2台で進入。車15トンと大きすぎ、ルート開発に全員体力消耗。23日＝仏塔よりはるか南にBC設営。24～27日＝徒歩で仏塔および遺跡南部地域を中心に踏査。28～30日＝帰路につきミンフウン経由ホータン着。31～11月2日＝滞在。周辺の遺跡参観。ウルムチへ。3日＝打合せ、日本側答礼宴など。4～5日＝日本隊北京経由帰国。6日＝中国車両隊ウルムチ帰着。

調 査：GPS導入による分布調査。遺跡中心に位置する仏塔の位置を測定、以後の進入が容易になるとともに安全性確保に大きな意味を持った。住居址模式図作成。カローシュティー木簡など地表散布遺物採集。調査とは別に、中国石油報・東海テレビが同行取材。

3. 調査の本格化

これら三次にわたる予備調査の実績が評価され、1992年4月14日、国家文物局より正式許可を取得した⁽³⁷⁾。日中双方は4月28日、克尤木・巴吾東新疆副主席列席のもと、ニヤ遺跡の総合調査を目的とした協議書(92・93年分)に筆者と買買提祖農・買買提艾力が調印した(「ウルムチ晩報」1992.5.2、「新疆日報」1992.5.3)。名称は「日中共同ニヤ遺跡学術調査・中日共同尼雅遺址学術考察」と定めた。92年度調査では分布調査・住居址模式図作成を継続し、建築学調査も開始した⁽³⁸⁾(「朝日新聞」・「産経新聞」・「京都新聞」1992.6.4、「毎日新聞」1992.7.20、「中日新聞」1992.10.4、1992.11.21、1992.12.18、「日本経済新聞」1993.5.4)。

現地調査以外にニヤ遺跡出土遺物調査を新疆博物館などで行った。有難いことに関係者の尽力もあって、日本政府の評価をいただき、文部省(現文部科学省)の科学研究費助成(研究代表：真田康道)が開始された⁽³⁹⁾。

1992年調査(第4次調査)

日 程：10月13日～11月11日

参加者：(日本側8名) 小島康誉 真田康道 高橋照彦 窪田憲龍 孫躍新 緒方正親 蓮池利隆 猪沢良秀
(中国側8名) 王炳華 沙比提・阿合買提 王経奎 于志勇 阿合買提・熱西提 張鉄男 劉玉生 盛春寿
サポート隊(ラクダ使い・運転手)・取材班11名、総計27名。

行 程：10月13日＝中国先発隊出発。15～19日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴。日中双方ウルムチで打合せ、諸準備。ホータン空港工事で閉鎖のため、カシュ経由ミンフン着。20日＝沙漠車2台、トラック2台で出発。21日＝仏塔着。BC設営。途中、病人発生のためBCを南方へ移動。22～26日＝分布調査を主体に、遺跡よりさらに西方の水系踏査。27～28日＝帰路につきミンフン経由ホータン着。29～30日＝ラワック遺跡など参観。31日＝遺物撮影、図面作成。日本隊一部カシュへ。11月2日＝本隊アクス経由ウルムチ帰着。日本隊一部、新疆政府および国家文物局

へ報告、答礼宴を行い帰国。3～5日＝日本側答礼宴など。6～7日＝日本隊北京経由帰国。遺物研究班は本隊帰国後も残り、遺物撮影などを行う。11日＝日本隊遺物研究班帰国。

調査：住居址模式図作成。分布調査。ニヤ遺跡西方水系調査。建築学的調査開始。カローシュティ木簡など地表散布遺物採集。調査とは別に、中国石油報・東海テレビが同行取材。



図20 パウダー状の砂に沙漠車も度々スタック



図21 大沙漠での調査は困難そして過酷

1993年度調査からは調査の本格化にともない、サポート隊を含めて約60人と規模を拡大し、現地調査期間も約3週間と長期化させた。分布調査・住居址模式図作成を継続、大型住居址92B4（N2）測量や地質学調査も開始し、遺跡北方の探査もおこなった。中国側の許可をえて分析試料を日本へ持ち帰り研究を開始した。この年より沙漠車の本格導入で遺跡へ比較的小スムーズに到着できるようになったが、遺跡保護のため現地到着後はラクダを併用した⁽⁴⁰⁾。

新疆政府からは当初より全面的支持と協力をえていたが、この年より鉄木ル・達瓦買提新疆主席が調査の名誉主席（名誉副主席：吾甫尔・阿不都拉新疆副主席・顧問：季羨林北京大学教授ら）に就任いただいた。また全国人民代表大会（以下、全人代と略す）環境資源保護委員会が地球環境保護の立場より新華社・中央テレビ・中国石油報からなる取材班を派遣し、これ以降ニヤ調査は中国内外で大きく報道されるようになった（「文匯報」1993.10.19、1993.11.18、「新疆日報」1993.10.20、「人民日報」海外版・「新華毎日電訊」・「大公報」1993.11.18、「読売新聞」・「日本経済新聞」1993.11.19、「毎日新聞」1993.11.20、「CHINA DAILY」1993.11.23、1994.5.18、

「中国社会報」1993.11.30、『人民中国』1994.2月号、「朝日新聞」1994.5.23、「産経新聞」1995.10.1、「The Washington Post」二頁半1995.10.11、「THE JAPAN TIMES」1996.1.7)。東海テレビも91・92年につづいて取材した。

1993年調査(第5次調査)

日 程：10月8日～11月27日

参加者：(日本側15名) 小島康誉 井ノ口泰淳 真田康道 高橋照彦 孫
躍新 米田文孝 古川雅英 貝殻徹 蓮池利隆 猪沢良秀 有
馬嗣郎 林真理子 上杉彰紀 亀元佳苗 大谷宏治
(中国側15名) 韓翔 王炳華 劉宇生 沙比提・阿合買提 王經
奎 于志勇 阿合買提・熱西提 張鉄男 景愛 劉樹人 陳芸
王博 肖小勇 伊力 佟文康
サポート隊(ラクダ使い・運転手)・取材班26名、総計56名。

行 程：10月8日＝中国先発隊出発。16～21日＝日本隊出発。ウルムチ
の新疆人民会堂で鉄木尔・達瓦買提主席、日中共同ニヤ遺跡学
術調査隊名誉主席就任の記者発表。新疆政府歓迎宴。日中双方
ウルムチ、ホータンで打合せ、諸準備。ミンフン着。22日＝
沙漠車など4台で出発。途中、カパクアスカンへ衣服や学用品
を贈呈(次年以降もボランティア活動継続)。1日で仏塔着。23
～11月11日＝測量調査班、分布調査班、地理地質調査班、発掘
準備班に分かれて調査活動を行う。本年よりディーゼル発電機
を導入し、生活面を改善するとともに、夜間も資料整理が行え
るようになった。遺跡保護、環境保護の一環として、炊事に枯
樹使用をやめ石炭、プロパンガスを本格導入。トイレも設置。(25
日、中国隊第2陣到着。30日、日本隊一部帰国の途につく。11
月3日、新疆政府へ報告、答礼宴。4日、国家文物局へ報告、答
礼宴。5日帰国。) 12～17日＝本隊帰路につき、ミンフン・
ホータン經由ウルムチ帰着。新疆考古研、新疆博物館などで研
究。日本側答礼宴など。18～20日＝日本隊上海經由帰国。遺物
研究班は本隊帰国後も残る。27日＝日本隊遺物研究班帰国。

調査：住居址模式図作成。分布調査。92B4 (N2)測量。基準点設定。推積岩層調査。仏教寺院遺構確認。北方遺跡探査。露出墓地保護清理。建築学的調査。カローシュティー木簡など地表散布遺物採集。調査とは別に、新華社・中央テレビ・中国石油報・東海テレビが同行取材。

1994年1月29日、中国と外国との共同調査として最大規模のニヤ調査を全面的支持してきた国家文物局は張徳勤局長名で、上述のような実績を評価し、関係部門の批准をへて発掘許可を発出した⁽⁴¹⁾(「朝日新聞」1994.5.23、「京都新聞」1994.9.27、「新疆日報」1994.10.7)。国家文物局令による外国隊への発掘許可第1号と聞かされた。



図22 国家文物局発掘許可証



図23 各遺構からの出土遺物、壺・木簡・珊瑚・壁画

日中双方にとって待望の許可であり、李東輝新疆副主席列席のもと、同日、3ヶ年分の協議書(94~96年)に筆者と解耀華新疆文化庁書記(日本語版は韓翔)が調印した。調査の本格化・長期化に対応すべく、日本側は同年4月、海部俊樹元首相・張徳勤国家文物局長を名誉会長、塩川正十郎衆議院議員らを顧問、水谷幸正学長(のちに中井真孝、福原隆善両学長へ順次交代)と筆者を代表として、佛大に「中国新疆ニヤ遺跡学術研究機構」(略称：佛大ニヤ遺跡学術研究機構・以下、佛大ニヤ機構と略す)を設立した(「中外日報」1994.8.30)。同年5月、全人代環境資源保護委員会により北京図書館でニヤ調査写真展「ニヤ：沙漠に消えた古代王国」が開催され、筆者・孫躍新佛大非常勤講師(後に京都大学共同研究員)や93年調査を取材した李希

光新華社主任記者(後に清華大学国際伝播研究中心主任)が曲格平全人代環境資源保護委員会主任やノーベル賞受賞の李政道などにニヤ調査を説明した(「人民日報」1994.5.23、1994.8.3、「新疆日報」1994.6.9)。6月には中央テレビがニヤ調査の30分番組を全国放送した。

このように関心が高まる中、7月に張徳勤局長・宿白教授一行が国際交流基金の招きで来日し、海部俊樹名誉会長・土井たか子衆議院議長と会見し、佛大を訪問しニヤ調査充実について意見を交換した。9月1日には筆者と王炳華新疆考古研究所長が94年度調査発掘詳細協議書を調印した。94年度調査からは考古学方面を強化すべく学士院賞も受賞されている田辺昭三京都造形芸術大学教授などの参加をえて発掘や木質調査・関連都市住居調査も開始した。



図24 住居址測量(92B4)



図25 槽からの撮影



図26 大型GPSでの測位

1994年調査(第6次調査)

日 程：9月25日～11月5日

参加者：(日本側15名) 小島康誉 井ノ口泰淳 田辺昭三 真田康道 伊東隆夫 高橋照彦 孫躍新 浅岡俊夫 吉崎伸 高妻洋成 蓮池利隆 小野田豪介 市川良文 米川仁一 後藤雅彦
(中国側16名) 韓翔 王炳華 李季 楊林 沙比提・阿合買提 王経奎 于志勇 阿合買提・熱西提 張鉄男 楊逸畴 王守春 王邦維 劉玉生 佟文康 李文瑛 王宗磊
サポート隊(ラクダ使い・運転手) 25名、総計56名。

行 程：9月25～30日＝日本先発隊出発。カシュなど関連都市住居調査。

27～10月1日＝日本隊出発。ウルムチにて日中双方打合せ、諸準備。新疆政府歓迎宴。ホータン経由ミンフン着。2日＝沙漠車4台で出発。車両火災などで進入難航。仏塔着、BC設営。全体ミーティング。ラクダ隊合流。5～20日＝考古調査班、分布調査班、木質調査班、地質調査班に分かれて調査活動を行う。国家文物局の李季・楊林に遺跡概要と共同調査の協調体制を説明。(8日、日中双方一部帰路につく。9日、カラドン遺跡調査のフランス隊と情報交換。11日、鉄木尔・達瓦買提新疆主席へ報告(「新疆日報」1994.10.12)。答礼宴。13日、国家文物局へ報告、答礼宴。14日、帰国。中国隊一部帰路につく。) 21日＝本隊帰路につく。ミンフン経由ホータン着。各遺跡を参観。24日＝ウルムチ帰着。新疆文化庁へ報告。答礼宴など。26～27日＝日本隊上海経由帰国。遺物研究班は本隊帰国後も残る。11月5日＝日本隊遺物研究班帰国。

調査：分布調査および地理地質調査継続。92B4(N2)測量補足・精査・発掘。93A27(N37)発掘。ブドウ畑測量。木質科学調査開始。関連都市住居調査開始。仏教寺院遺構93A35(N5)確認。地表散布遺物採集。調査とは別にウルムチ・ホータン・ミンフンの福祉施設へ衣服などを贈呈。

4. 王墓発掘

1995年4月には鉄木尔・達瓦買提新疆主席・金雲輝新疆生産建設兵団司令員一行が伊藤忠商事と筆者の招きで訪日し、伊藤忠と新疆兵団は総合協定を調印、平山郁夫日中友好協会会長と会見し、奈良などで日本文化への理解促進をはかった(「日本経済新聞」1995.4.24、「奈良新聞」1995.4.26、『外国友人中国情』2001)。5月、東海テレビが91～93年調査を取材した「風砂の蜃気楼－日中共同ニヤ遺跡調査」がフジテレビ系列で全国放送された(「中日新聞」1995.5.5)。同月、ニヤ遺跡写真集『夢幻尼雅』が出版され、人民大会堂で王丙乾全人代副委員長と会見しニヤ調査の報告を行い、日本国公使や張徳勤局長らも出席し、全人代環境資源保護委員会榮譽賞が授与

された⁽⁴²⁾ (「読売新聞」・「毎日新聞」・「人民日報」・「CHINA DAILY」・「光明日報」1995.5.23、「北京晩報」1995.5.30、「中日新聞」1995.6.11、「新疆日報」1995.12.22)。本年より現地調査時以外に新疆考古研で収集済み遺物の研究を日本側も開始した。本年はカローシュティール木簡などの研究と写真撮影を行った。

日 程：7月17日～22日 参加者：井ノ口泰淳 高橋照彦 蓮池利隆
佐藤右文

8月18日には筆者と买买提祖農・买买提艾力が95年度調査発掘詳細協議書に調印した。9月には人民大会堂で田紀雲全人代副委員長と会見し調査報告を行った。

地道な調査では何か大きな成果がないと継続は難しく、もうそろそろと期待して第7次調査を開始した(「産経新聞」1995.10.1)。その大発見が95年度調査であった。遺跡北西部へ向かっていた中国側隊員が露出している木棺の一部を発見した。これまでもいくつもの墓地は登録していたが、それらとは明らかに異なっていた。中国側学術隊長の王炳華新疆考古研所長の指揮のもと中国側が主となって測量と発掘をおこなった。そして、いよいよ開棺の日が来た。わずかに開いた隙間から覗き込んだ于志勇新疆考古研研究員(現副所長)が叫んだ。「わあすごい、王 侯 合 昏 千 秋 萬 歳・・・まだある」と文字を読み上げた。居合わせた日中双方全員が「万歳！」と拳を突き上げた。

その夜のベースキャンプは異常な興奮に包まれた。中国側隊長の岳峰新疆文化庁文物処処長につづいて乾杯を促された筆者は、「1988年、日中共同ニヤ調査を開始して以来、今日が最良の日だ、日中双方全員の共同努力のおかげだ、乾杯しよう！」と普段は飲まない白酒を何杯も一気飲みした。調査期間中に新疆ウイグル自治区成立40周年記念式典に出席し、ホータン地区貧困脱出工程資金・ホータン博物館建設資金を贈呈した(「筆者と新疆政府間の贈呈協議書」1995.10.2、「新疆日報」・「新疆都市報」1995.10.3、「和田報」1995.10.12)。

1995年調査(第7次調査)

日 程：9月28日～11月5日

参加者：(日本側16名) 小島康誉 田辺昭三 真田康道 高橋照彦 孫
躍新 浅岡俊夫 吉崎伸 高妻洋成 蓮池利隆 中島皆夫 小
野田豪介 市川良文 米川仁一 大山幹成 小林利春 杉本和
樹

(中国側18名) 岳峰 王炳華 任式楠 孟凡人 齊東方 楊晶
沙比提・阿合買提 王經奎 于志勇 阿合買提・熱西提 張鉄男
劉玉生 伊力 王宗磊 呂恩国 吳勇 阮秋榮 李軍

サポート隊(ラクダ使い・運転手)・取材班22名、総計56名。

行 程：9月28日＝中国先発隊出発。10月3日＝開通直前の沙漠公路を
走破しミンフン着。8日＝仏塔着、BC設営。日本先発隊出発、
国家文物局および新疆文化庁と打合せ、新疆ウイグル自治区成
立40周年記念式典出席。歓迎宴。建築調査班はホータン、カ
パクアスカンの住居調査を16日まで実施。5～8日＝日本隊出
発。ウルムチで日中双方打合せ。ホータン地区行署歓迎宴。ミ
ンフン着。9日＝遺跡より中国先発隊沙漠車もどらず日中双
方一部隊員がカパクアスカンへ先行。10日＝沙漠車にて全員が
遺跡に到達。全体ミーティング。ラクダ隊合流。11～28日＝考
古調査班、分布調査班、木質調査班に分かれて調査活動をおこ
なう。(12日、王族墓地を発見し、14日、開棺し重要遺物を検出。
15日、日中双方一部隊員が帰路につく。17日、ホータン博物館
建設予定地を視察。20日、新疆政府へ報告、日本側答礼宴。21日、
国家文物局へ報告、答礼宴。22日帰国。) 29～11月3日＝帰路に
つき、ミンフン・コルラ経由ウルムチ帰着。答礼宴。4～5日
＝日本隊北京経由帰国。開棺調査のため一部隊員残留。

調 査：より高精度のGPSを導入し分布調査精度の向上をはかった。
92B4 (N2)精査発掘。93A35 (N5)測量発掘。王侯貴族の墓地
(95MN1号墓)を発見し保護のため発掘、6棺を取り上げた。木
質科学調査や住居址模式図作成を継続。カパクアスカン村測量。

地表散布遺物採集。小学校へ学用品などを贈呈。新疆日報が同行取材(「新疆日報」1995.11.22、『新疆新聞界』1996.1月号)。

11月6日から12日、現地調査に引き続き、日中双方は本年調査で収集した6棺の開棺調査を新疆考古研にて国家文物局派遣の王軍・王亜蓉とともにに行い、男女合葬ミイラをはじめ、「王侯合昏千秋萬歲宜子孫」、「五星出東方利中国」の文字入り錦など貴重遺物多数を検出した。

参加者：岳峰 王軍 王炳華 王亜蓉 沙比提・阿合買提 于志勇 張鉄男 劉玉生 伊力 王宗磊 呂恩国 吳勇 阮秋榮 李軍
小島 田辺昭三 吉崎伸 孫躍新 杉本和樹 佐藤右文

閻振堂国家文物局副局長・宿白・嚴文明北京大学教授・徐莘芳中国社会科学院研究員らも視察に訪れた。後にこれらの一部は一級文物(国宝に相当)に指定された。



図27 男女合葬棺の開棺調査



図28 国宝中の国宝に指定された「五星出東方利中国」錦

12月、北京において95年調査でえた王侯貴族墓地の発見・発掘に関する記者発表が国家文物局と新疆文化庁の主催で行われ、張徳勤局長・吾甫尔・阿不都拉新疆副主席・宿白・嚴文明・王中俊新疆文化庁書記・岳峰・王炳華・筆者・田辺昭三・真田康道・孫躍新らが参加した。この発見は内外で大きく報道された(「新疆日報」1995.12.22、1995.12.25、1996.1.2、1996.1.30、1996.12.18、「毎日新聞」・「日本経済新聞」・「東京新聞」1995.12.23、「人民日報」1995.12.25、「中国文物報」1996.1.14、「新疆経済報」1996.1.29、「中日新聞」1996.9.30、「南方周末」1996.12.6、「人民日報」海外版1996.12.16、「人民日報」電子版2009.9.9)。

5. 成果の公開

1996年2月、ニヤ調査は国家文物局・中国文物報により「1995年中国十大考古新発見」に選ばれた(「中国文物報」1996.2.18)。4月、新疆政府は貴重文物の発見が報じられたことによる無許可の「考古」・「探検」・「踏査」が発生したことを受け、ニヤ・楼蘭などの古代遺跡への無許可進入厳禁を重ねて通知した、但し国家文物局が許可した筆者らが行っている中日共同調査隊は進入しても良いと報道された(「文匯報」・「明報」・「成報」1996.5.23、「CHINA DAILY」1996.5.24)。5月、日中双方は88～93年度調査の成果を井ノ口泰淳・真田康道・長澤和俊・米田文孝・伊東隆夫・浅岡俊夫・孫躍新・周培彦・鄭虹・古川雅英・貝柄徹・高橋照彦・高妻洋成・蓮池利隆・斎藤努・韓翔・岳峰・盛春寿・王炳華・沙比提・阿合買提・于志勇・阿合買提・熱西提・張鉄男・劉文鎖らの尽力と文部省科学研究費補助研究成果公開促進費(71005・申請者：井ノ口泰淳)をえて『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻・日中両文)として刊行した⁽⁴³⁾(「読売新聞」1996.5.27、1996.6.18、「人民日報」海外版1996.6.12、「中日新聞」1996.10.19)。

6月、筆者は興した企業の創業30周年を機に社長を退任した、その3年前に株式上場も果たし、役員社員諸氏の努力により経営は順調であったが、時代の激変期には従来の発想では更なる発展はできないと考えたからである、結果的に新疆での活動により多くの時間をとれるようになった、それまでは休暇をためて出かけていた(「日本経済新聞」・「読売新聞」・「朝日新聞」・「毎日新聞」・「中日新聞」・「中部経済新聞」1996.4.27＝退任発表時、「読売新聞」1996.6.18)。

8月には海部俊樹名誉会長・水谷幸正代表・中井真孝佛大事務局長(後に学長)・筆者・孫躍新らがウルムチ・北京で、王楽泉中共新疆委員会書記・阿不来提・阿不都熱西提新疆主席・張柏国家文物局副局長らに共同調査への一層の支援と97年佛大で開催予定のシンポジウム・文物展への協力を要請し、同意をえた(「新疆日報」1996.8.20、1996.8.21)。同月、96年度調査の詳細協議書に王中俊と筆者が調印した。

本年の遺物研究と写真撮影は前年採集の王族の木棺および織物中心に

行った。

日程：8月19日～25日 参加者：伊東隆夫 高橋照彦 高妻洋成 杉本
和樹 坂本和子

9月、筆者はウルムチ訪問中の李鉄映國務委員と呉邦国副総理にニヤ調査を紹介した。李鉄映國務委員から日本語で「中国人民の古い友人、ありがとう。」と言われて驚いた。96年調査ではGPS専門技師の参加と大型GPSの導入により、地形図作成を開始した。住居址や周辺生産工房址の測量も開始し、仏教寺院の発掘をおこない、壁画を検出した。ニヤ遺跡北方約40km地帯におよそ3,000年前のものと推測される遺構・遺物を発見した(「人民日報」1996.12.14)。また遺跡南端地区にサークル状土塁を発見し、地表散布遺物も採集した。現地調査とは別に95年検出の木棺の木質調査・毛絹織物の調査をおこなった。また筆者らは楼蘭遺跡を参観し、過去の探検隊などのゴミ約100kgを回収した(「新疆文物局と筆者の協議書」1994.1.29、「新疆日報」1996.11.27)。



図29 砂が舞う中での発掘(93A35)



図30 成果を報告書・シンポジウムで公開

1996年調査(第8次調査)

日程：10月2日～11月6日

参加者：(日本側17名) 小島康誉 田辺昭三 真田康道 吉田恵二 田
中清美 吉崎伸 近藤知子 米川仁一 中島皆夫 杉本和樹
内田賢二 小野田豪介 市川良文 加藤里美 古手川博一 吉
川和孝 稲益晃一
(中国側18名) 岳峰 王炳華 沙比提・阿合買提 王経奎 于志

勇 伊斯拉斐尔・玉蘇甫 阿合買提・熱西提 張鉄男 劉玉生
伊力 王宗磊 呂恩国 吳勇 阮秋榮 趙靜 邢開鼎 張樹春
阿迪力・馬木提

サポート隊(ラクダ使い・運転手) 23名、総計58名。

行程：10月2～8日＝中国先発隊出発。(4日、ミンフン着。8日、93A35近くにBC設営。) 3～4日＝日本先発隊出発。中井真孝らと共に国家文物局とシンポジウム・文物展の打合せ。新疆政府・新疆文化庁と同様打合せ。新疆政府歓迎宴。4～8日＝日本隊出発。ウルムチで日中双方打合せ。ルンタイ経由ミンフン着。9日＝遺跡より沙漠車もどらず待機。10日＝沙漠車で遺跡到達。全体ミーティング。ラクダ隊合流。11～28日＝考古調査班、分布調査班、地形図作成調査班に分かれて調査活動を行う。(13日、北方分布調査で遺構発見。帰路ラクダが暴れ人身事故発生。15日、沙漠車にてコルラの病院へ。17日、日中双方一部隊員が楼蘭へ向う。20日、コルラ経由ウルムチ着。新疆政府へ報告。24日、楼蘭へ出発。29日、楼蘭に到達。11月2日、ウルムチ帰着。ニヤ隊と合流。) 29～11月3日＝日中本隊が帰路につきミンフン・ルンタイ経由ウルムチ帰着。新疆考古研で研究。日本側答礼宴など。11月4～5日＝日本隊北京経由帰国。5～6日＝日本側隊長、国家文物局へ報告、答礼宴。帰国。

調査：分布調査と住居址模式図作成を継続。大型GPSを導入し地形図作成を開始。住居址93A10 (N13)・93A9 (N14)および周辺生産工房址の測量を開始。仏教寺院93A35 (N5)・93A36 (N6)の発掘、壁画検出。北方調査で遺構・遺物発見。遺跡南端地区にサークル状土塁を発見。地表散布遺物採集。

11月、北京で海部名誉会長と筆者が張文彬国家文物局局长と会談し、共同保護研究事業の一層の強化とシンポジウム・文物展開催で合意した(「新華毎日電訊」1996.11.15、「中国文物報」1996.12.1)。同月、国务院によりニヤ遺跡全体が「全国重点文物保护单位」に格上げ指定された(「中国文

物報」1996.12.29)。12月、佛大ニヤ機構はこれまでの調査成果を記者発表、日本側学術隊長の田辺昭三は「五星」錦について「埋葬された男女が結婚したとき、中国王朝から贈られたものでは。」とコメントした(「読売新聞」・「朝日新聞」・「日本経済新聞」・「産経新聞」・「中日新聞」・「京都新聞」1996.12.6、『NEWSWEEK』1997.1.1日号)。同月、王楽泉中共新疆委員会書記にニヤ遺跡の格上げ指定を報告した(「新疆日報」1996.12.10)。

1997年3月、新疆政府の決定により新疆文化庁より文物処が分離され、文物行政管理全般を掌握する新疆ウイグル自治区文物事業管理局(略称：新疆ウイグル自治区文物局・新疆文物局)が成立したのにもない、これ以降は新疆文物局が中国側窓口となった。同月、中井真孝・筆者と艾尔肯・米吉提新疆文物局副局长が下記文物展協議書に調印した(「佛大・佛大ニヤ機構と新疆文物局との協議書」1997.3.18)。同月22日、克尤木・巴吾東中共新疆委員会副書記、米吉提・納斯尔新疆副主席列席のもと、筆者と岳峰が97年以降の詳細協議書に調印した(5月27日・9月1日修正)(「新疆日報」1997.3.23)。

本年度の遺物研究と写真撮影は下記のとおりである。

日程：8月3日～11日 参加者：田辺昭三 吉田恵二 吉崎伸 高橋照彦
杉本和樹 近藤知子 市川良文 加藤里美 古手川博一

9月6日～11日 参加者：真田康道 井上正

9月、佛大にて新図書館開館記念「日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム・出土文物展」(佛大・新疆文物局・佛大ニヤ機構主催)が開催され、海部俊樹名誉会長・張宝智中国大使館文化参事官・水谷幸正・高橋弘次・中井真孝・杉本憲司佛大教授・買買提祖農・買買提艾力、宋新潮国家文物局考古管理处处长(後に副司長・現副局长)・徐萃芳・孟凡人中国社会科学院研究員・林梅村北京大学助教授(現教授)・樋口康隆橿原考古学研究所所長・赤松明彦九州大学教授ほか日中双方隊員の筆者・長澤和俊・田辺昭三・井上正・真田康道・伊東隆夫・孫躍新・蓮池利隆・岳峰・王炳華・沙比提・阿合買提・于志勇・張鉄男らが挨拶や発表を行い、のべ約500人が参加した⁽⁴⁴⁾(「京都新聞」1997.9.10、1997.9.18、1997.9.23、「毎日新聞」1997.9.12、1997.9.23、「産経新聞」1997.9.17、「名古屋タイムズ」1997.9.22、

「読売新聞」1997.9.23、『佛大学内報』第285号1997.11.1）。中国側代表团らは海部俊樹名誉会長、伊藤宗一郎衆議院議長らと会見した。

9月から12月まで、中国歴史博物館で「全国近年考古新発見精品展」が開催され、日中隊検出の「五星出東方利中国」錦や「王侯合昏千秋萬歲宜子孫」錦なども出陳された⁽⁴⁵⁾（「中国文物報」1997.10.3）。



図31 佛大新図書館開館記念シンポジウム



図32 佛大新図書館開館記念文物展

97年度調査は遺跡北端部に墓地を発見し、95年発見の墓地と合わせて清理発掘した。南部土塁も調査するとともに、地質調査もおこなった。

1997年調査(第9次調査)

日 程：10月2日～11月5日

参加者：（日本側17名）小島康誉 田辺昭三 真田康道 石田志朗 孫躍新 吉崎伸 蓮池利隆 近藤知子 米川仁一 杉本和樹 内田賢二 小野田豪介 市川良文 加藤里美 古手川博一 稲益晃一 栗田一生

（中国側14名）岳峰 于志勇 張玉忠 阿合買提・熱西提 羊毅勇 張鉄男 呉勇 劉玉生 伊力 王宗磊 阮秋榮 尼加提・肉孜 龔国強 柳洪亮

サポート隊（ラクダ使い・運転手）14名、総計45名。

行 程：10月2～8日＝中国先発隊出発。（4日、ミンフウン着。7日、仏塔着、BC設営。）3日＝日本先発隊出発。国家文物局と打合せ。4～8日＝日本隊出発。北京で先発隊と合流。ウルムチで日中双方打合せ、歓迎宴。ルンタイ経由ミンフウン着。ミンフウン県長歓

迎宴。9日＝沙漠車で遺跡到達。全体ミーティング。ラクダ隊合流。10～28日＝考古調査班、分布調査班、地形図作成調査班、地質調査班に分かれて調査活動をおこなう。(17日、日中双方一部隊員帰路へ。21日、帰国。17日、日中双方隊長が隊員およびニヤ遺跡参観班出迎えのためミンフンへ。19日、遺跡へもどる。22日、日中双方隊長と参観班帰路へ。中国側隊長は楼蘭などの南疆各遺跡の視察へ。日本側はルンタイをへて24日、ウルムチ帰着。新疆政府へ報告、答礼宴。27日、国家文物局へ報告と98年以降計画など打合せ。歓送宴。28日、帰国。28日、日中双方一部隊員が民豊へ先行。) 29～11月3日＝帰路につき、ミンフン経由トルファンで各遺跡参観。新疆考古研で機材整理と遺物研究。フランス隊と情報交換、カラドン遺跡出土遺物も参観。新疆文物局へ報告、答礼宴。4～5日＝日本隊北京で「全国考古新発見精品展」を参観して帰国。

調査：分布調査および地形図作成を継続。遺跡北端部に墓地を発見し、95年発見の墓地(95MN1号墓)と合わせて清理発掘。93A10(N13)・93A9(N14)周辺生産工房と93A35(N5)・93A36(N6)周辺の測量継続。南部土塁調査。地質調査。地表遺物採集。調査を佛大ニヤ機構顧問安田暎胤夫人と清田伶子が参観した。

1997年以降の協議書も調印済みであったが、国家文物局を交えての数度の打合せの結果、現地調査に一区切りつけ、研究や報告書出版などを継続することで日中双方は合意し、日本側は本年調査終了時に測量機器など全装備を中国側へ贈呈した。

1998年4月から10月まで、上海博物館で「シルクロード考古珍品展」が開催され、本調査隊収集の文物多数が展示され、大きな反響を呼んだ⁽⁴⁶⁾(「中国文物報」1998.2.8、1999.1.27)。買買提明・扎克尔新疆副主席や日中双方隊員が開会式に出席した。6月には日中友好協会と筆者の招きで阿不来提・阿不都熱西提新疆主席一行が訪日し、海部俊樹名誉会長・小渕恵三外務大臣・平山郁夫・水谷幸正らと会見し、日本と新疆の文化・経済交流

の一層の推進で一致した(『外国友人中国情』2001)。12月には努尔・白克力ウルムチ市市長(現新疆主席)と会見し、「児童育英金」創設について相談した(「ウルムチ晩報」1998.12.24)。これについては後述する。

1999年7月、阿不来提・阿不都熱西提新疆主席と会見し、第二次報告書準備状況などを報告した(「新疆日報」1999.7.4)。11月には日中双方は佛大四条センターで、筆者・真田康道・孫躍新・徐華田新疆文化庁書記・劉曉慶新疆政府外事弁公室処長・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇など約100人が参加し、調査報告会を開催した。12月には楊剛ウルムチ市書記(現新疆常務副主席)に富士山を例に「ボゴダ峰周辺観光開発計画」への参考意見を提出した(「ウルムチ晩報」1999.12.23)。同月、王樂泉中共新疆委員会書記と阿不来提・阿不都熱西提新疆主席と個別に会見し、ニヤ調査などへの高い評価をえた(「新疆日報」1999.12.24)。

2000年1月には日中双方は97年度調査までの成果を水谷幸正・田辺昭三・真田康道・浅岡俊夫・吉崎伸・伊東隆夫・米延仁志・高橋照彦・市川良文・小野田豪介・近藤知子・稲益晃一・坂本和子・蓮池利隆・杉本和樹・佐藤右文・孫躍新・周培彦・大北裕生・岳峰・王炳華・沙比提・阿合買提・于志勇・張鉄男・劉玉生・阮秋榮・王宗磊・呉勇・羊毅勇・龔国强・林梅村・王守春・孟凡人・楊逸畴らの尽力をえて『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二巻・日中両文)として刊行した⁽⁴⁷⁾(「中国文物報」2000.4.9)。

2月、新疆考古研で下記シンポジウムの打合せを行った。阿不来提・阿不都熱西提新疆主席に協力を要請するとともに新疆の主要キーワードであるシルクロードを活用して国際化を推進するために「21世紀シルクロード都市国際会議」(仮称)開催を提案した⁽⁴⁸⁾(「新疆日報」2000.2.23)。

3月、ウルムチの環球ホテルで「中日共同ニヤ遺跡学術調査シンポジウム・報告書(第二巻)発行式」(新疆文化庁・新疆政府外事弁公室・新疆文物局・佛大ニヤ機構・新疆考古研主催)を開催、買買提明・扎克尔新疆副主席・祖農・庫提魯克新疆文化庁庁長・筆者・田辺昭三・真田康道・吉崎伸・伊東隆夫・孫躍新・周培彦・井上正・切畑健・小野田豪介・市川良文・蓮池利隆・橘堂晃一・徐華田・尼相・依不拉音新疆政府外事弁公室主

任・韓翔・岳峰・王炳華・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇・張玉忠・楊林・孟凡人・林梅村や1959年にニヤ遺跡を調査した新疆博物館の李遇春・中国考古学界第一人者の龔偉超中国歴史博物館館長・楊志軍国家文物局司長・趙豊中国絲綢博物館副館長ら日中双方約150人が参加し、同時に新疆博物館で「新疆考古成就展」を開催した⁽⁴⁹⁾（「新疆日報」・「晨報」2000.3.21、「人民日報」・「ウルムチ晩報」2000.3.23、「新疆經濟報」2000.3.24、「中国文物報」2000.4.9）。

10月には杭州の中国絲綢博物館でニヤ調査隊検出の文物展「絲綢之路沙漠王子遺宝展」とシンポジウムが開催され筆者も参加しニヤ調査概要を発表した⁽⁵⁰⁾。12月、阿不来提・阿不都熱西提新疆主席と会見し人材育成などについて打ち合わせた（「新疆日報」2000.12.19）。同月、文化財保護意識啓蒙を目的とした「中国歴史文化遺産保護網」の開設式を鉄木ル・達瓦買提全人代副委員長列席のもと、人民大会堂で行った。

2001年2月、北京サイドの求めに応じて、水谷幸正と筆者は台湾を訪問し、呉伯雄国民党副主席（後に主席）・星雲大師と会見、ニヤ文物展開催など兩岸文化交流について協議し、協力するとの回答をえた⁽⁵¹⁾。

3月、ニヤ調査は国家文物局・『考古』雑誌社より「中国20世紀考古大発見100」に選ばれた⁽⁵²⁾（「中国文物報」2001.4.4）。4月、林梅村の招聘申請（申請者：真田康道）が関係者の尽力で認められ「日本学術振興会外国人招聘研究者」として、翌年1月まで佛大でカローシュティエ文書関係の研究を行った。同月、王樂泉中共新疆委員会書記と会見し、活動への更なる支持と期待が表明された（「新疆日報」2001.4.7）。5月、水谷幸正・稲岡誓純佛大助教授らとともに釣魚台国賓館で北京サイドに台湾側協力表明を伝えた。後述するように、この数年後に台湾でシルクロード文物展が開催されたが、我々の事前活動が活かされたかは聞いていない。

6月には長年の新疆への貢献が評価され、阿不来提・阿不都熱西提新疆主席の提案により「日本友人小島康誉氏新疆訪問20周年記念大会」がウルムチの人民劇場で阿不来提主席や杉本信行日本国公使・司馬義・鉄ル瓦力地新疆副主席（後に主席）・呉敦夫中共新疆委員会宣伝部長・尹志良中国文化部主任・日本と北京の代表団・地元関係者ら約800人が参加して開催さ

れ、文化部「文化交流貢献賞」が授与された⁽⁵³⁾（「朝日新聞」2001.6.19、「新疆日報」・「新疆経済報」・「新疆都市報」・「ウルムチ晩報」・「亞洲中心時報」2001.6.21、「中日新聞」2001.7.6、「日本と中国」2001.7.15、2002.10.5）。阿不来提主席らの熱情あふれる挨拶につづき、杉本信行公使は「合わせると10年余中国で仕事しているが、こんなに対日感情が良いのは新疆だけだ。戦争がなかったのと小島氏の活動のおかげだ。」などと挨拶された。王楽泉中共新疆委員会書記との会見では、「貢献を高く評価し30周年40周年への活動も期待する。」との表明があった。阿南惟茂日本国大使夫妻の祝宴が大使公邸で催された。12月には王楽泉書記と阿不来提・阿不都熱西提主席に個別に会いし、人材育成について意見を交換した（「新疆日報」2001.12.20、2001.12.21）。

同月、関連事業として、新疆ウイグル自治区檔案局（館）と共同出版を開始し、その第一弾としてスタインや大谷探検隊などに関する『近代外国探検家新疆考古檔案史料』を刊行した⁽⁵⁴⁾。共同出版については後述する。同月、王兆国中国共産党統一戦線部部長と人民大会堂で会いし、ニヤ調査などを報告した。

収集した大量の遺物は新疆考古研にすべて保管している。手狭なうえに研究設備も十分でなかったが、この年、日本政府援助で建物などが拡充され、筆者援助で遺物運搬用エレベーターなど設備が充実し、研究環境が改善された。当然のことながら日本側は遺物を一点たりとも持ち出していない（記念として沙漠の砂を持ち帰った隊員はいる）。同月、中国側学術隊長である于志勇の「新疆ニヤ集落遺跡考古学研究」が国家文物局の「重点研究課題」に選ばれた（「中国文物報」2001.12.21）。

2002年1月には、「五星出東方利中国」錦が国家文物局により中国の膨大な全文物から「出国展覽禁止文物」64点のひとつに選出された、対外展示による劣化の可能性を防ぐため、いわば「国宝中の国宝」に選ばれたともいえる（「中国文物報」2002.1.30）。同年8月から12月にかけて、東京国立博物館と大阪歴史博物館で「シルクロード・絹と黄金の道展」（NHK・日中友好協会・新疆文物局ほか主催）が開催され、「王侯合昏千秋萬歳宜子孫」錦など本調査隊検出文物が多数出陳され、大きな反響を呼んだ⁽⁵⁵⁾。東博

での開会式には買買提明・扎克尔新疆副主席らが出席し、海部俊樹名誉会長と会見した。東京・札幌・小樽・奈良などの参観に同行した。長年なにかと尽力たまわった塩川正十郎財務大臣に大阪展を参観いただいた。

7月と8月連続して、文化参観団を伴い王楽泉中央政治局委員(2002年より兼務)・中共新疆委員会書記と阿不来提・阿不都熱西提新疆主席と会見し一層の協力を要請した(「新疆日報」2002.7.8、2002.8.23)。9月、東海テレビの新疆取材番組の撮影許可を仲介し、翌年撮影(旅人：吉岡秀隆)に一部同行した⁽⁵⁶⁾(「新疆日報」2002.9.19、2003.9.23)。

10月にはダングンウイリク遺跡を踏査した。同調査関連については後述する。11月には多くの方に調査研究を理解いただくために、水谷幸正・中井真孝・井ノ口泰淳・田辺昭三・真田康道・安田暎胤・安田順恵・浅岡俊夫・伊東隆夫・孫躍新・周培彦・吉崎伸・高橋照彦・蓮池利隆・切畑健・杉本和樹・俞偉超・劉宇生・盛春寿・林梅村・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇・趙豊らの尽力をえて写真を主とした『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』を出版した⁽⁵⁷⁾(「名古屋タイムズ」2002.11.18)。

2003年1月には中国歴史博物館でニヤ・ダングンウイリク両調査を講演し、呂家伝新疆文化庁書記・盛春寿局長・張玉忠新疆考古研副所長や筆者・孫躍新らが北京サイドと釣魚台で打ち合わせた。

2004年10月、各遺構の変化状況を観察するために、筆者・浅岡俊夫・安藤佳香・孫躍新・近藤謙・張玉忠・李軍らがニヤ遺跡へ入った。日本側にとって7年ぶりのことである。石油開発にともない沙漠公路からカパクスカンまで簡易舗装されていて、驚かされた。各遺構に大きな変化はなかったが、若干の盗掘跡が見受けられた。また部分崩壊した仏塔の修復が新疆文物局・新疆文物古跡保護中心・新疆考古研の『尼雅遺址仏塔保護加固方案』により進行中であつた。遺跡北部で未登録と思われる墓地3ヶ所を登録した。この踏査にはNHK「新シルクロード」取材班も同行した。

2005年1月、『絲綢之路・尼雅遺址之謎』(『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』の中国語版)を孫躍新・周培彦夫妻の尽力をえて出版した⁽⁵⁸⁾(「新疆日報」2005.1.30)。この年、ほぼ一年間にわたって、「新シルクロード」がNHK放送開始80周年記念事業番組として放送され、一部番組でニヤ遺跡やダン

ダンウェイリク遺跡が紹介された。また4月から10月にかけて江戸東京博物館・兵庫県立美術館・岡山デジタルミュージアムで「新シルクロード展」(NHK・産経新聞社ほか主催)が開催され、本調査隊検出の錦やダンダンウェイリク隊検出壁画が出陳された⁽⁵⁹⁾。東京展当時は「靖国問題」で日中関係が冷え込んでいたため、王毅駐日大使は厳戒態勢のなか開会式に出席した。12月から翌年3月まで、香港で「絲路珍宝－新疆文物大展」が開催され調査隊検出のカローシュティー木簡や錦などが出陳された⁽⁶⁰⁾。

2006年には報告書第二巻以降の研究成果を公開すべく、報告書第三巻の準備を中国側と開始した。調査資料収集の一環として、テント・GPS・生活用品など使用済み装備の返却を中国側からうけた。8月、筆者は塩川正十郎元財務大臣とともに官邸を訪れ、小泉純一郎総理に調査概要を報告し、「五星出東方利中国」錦の盾を贈呈した(「各新聞」2008.8.25)。

2007年10月には日中双方は第二巻以降の研究成果を、浅岡俊夫・安藤佳香・田中清美・吉崎伸・市川良文・切畑健・石田志朗・片山章雄・北野信彦・孫躍新・周培彦・盛春寿・于志勇・張鉄男・阮秋榮・呉勇・祁小山・賈応逸・林梅村・王晨・衛斯・尼加提・肉孜・林怡嫻・潜偉・催劍峰・和田博物館・民豊文物管理所らの尽力をえて『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三巻・日本語版)としてまとめ文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業(平成15年度～平成19年度)関連刊行物として刊行した⁽⁶¹⁾(「朝日新聞」2008.5.9)。

ニヤ遺跡学術調査に多大な貢献をされた田辺昭三先生・李遇春先生・俞偉超先生は本書の刊行を待たずに旅立たれた。3先生の遺徳を偲び、生前に先生方がニヤ遺跡について書かれた高論を掲載し、謹んでご霊前に捧げた。いつの間にか「隊歌」となった春のうららで始まる「花」を指揮されたのも田辺御大であり、その巨腹は懐かしい思い出である。

これ以降については、ダンダンウェイリクの項で記述する。

6. 調査の組織と成果

以上の調査の責任者(隊長)を日本側は筆者(88年～)が、中国側は韓翔(88～94年)・岳峰(95～01年)・盛春寿(01年～)がつとめ、学術隊長を井ノ口

泰淳(90～94年)・田辺昭三(95～06年)、王炳華(91～96年)・于志勇(97年～)が、日本側学術副隊長を真田康道(90年～)がつとめた。

研究領域が多岐にわたることもあり、後述のように多くの機関の研究者が参加した。専門分野は外事管理・文化財管理・国際協力・考古学・仏教学・西域文献学・東西交渉史・建築学・地理学・地質学・木質科学・仏教美術史・染織学・撮影・測量などである。これら多くの方々の努力により、次のような成果をあげることができた。

- 仏塔・寺院・墓地・住居・生産工房・土塁・家畜小屋・果樹園・貯水池・並木・建築部材や遺物散布地など約250ヶ所の遺構を発見し、GPSで経緯度を登録し、遺構分布図を作成した。
- 大型GPSを活用し、周辺地形図を作成、遺跡全容を明らかにした。
- 遺跡北方約40kmに更に古い遺構・遺物を発見し、生活拠点の南下を明らかにした。
- 関連都市の住居を測量調査し、遺跡住居構造を明らかにした。
- いくつかの住居を発掘し、生活状況を明らかにした。
- いくつかの住居群や生産工房を測量調査し、都市構造を明らかにした。
- 寺院を発掘調査し、壁画などを検出し、西域仏教解明の手がかりをえた。
- 王族の墓地を発見発掘し、国宝級遺物多数を検出し、精絶国が当時の中原王朝と政治経済文化面で密接な関係があったことを明らかにした。
- 各種の墓地を発掘し、埋葬方法に新しい知見をえた。
- 住居の柱材などをC14法により測定し、遺跡年代確定の大きな手がかりをえた。



図33 破壊につながる発掘は最小限にとどめた(93A35)

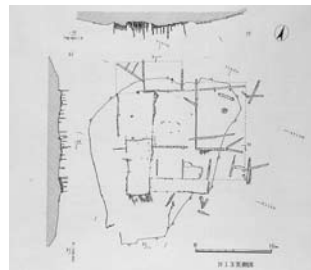


図34 測量図(93A10)

- カラーシュティーおよび漢文木簡をふくむ大量の貴重文物を検出し、新しい知見をえた。
- カラーシュティーおよび漢文文書を解読し、新しい知見をえた。
- 三趾馬とおもわれる化石を検出し、遺跡一帯の地質形成で新しい知見をえた。

7. 小括と今後

このように書いてくると調査は順調に推移したように思われるだろうが、実態は多くの困難がともなっている。

まず遺跡がタクラマカン沙漠へ約100kmも入った無人の地に所在し、そこに到達し物資を運び込むだけでも困難である。例えば、約60人が約3週間野営するのに必要な水約6トンなどの大量の食糧や調査器材を運び込まねばならない。しかも遺跡の規模が前述のように広大である。航空測量は制限されており、タマリックス堆や砂丘が連続するなかでの遺構の発見は困難である。夏には地表温度が70度を超え、冬はマイナス50度(スタインは第一次探検でマイナス41度と記録している。)となり、春には砂嵐が吹き、天候上現地調査期間が限られる。調査は天候の安定する10～11月に実施したが、それでも1日の温度差は40度近くになる。調査分野が多領域にわたるため、多くの機関の研究者が参加し、その調整が必要である。更に日中双方の社会体制・調査手法・生活習慣などの違いもある。そして大金を必要とする。これらはダンダンウイリク調査でも同様である。

ふりかえってみれば、このような困難な条件の下で、日中双方が一致協力し、よくぞここまでの成果をあげ得たものであると言える。諸外国とくに国家管理の厳しい中国での共同調査、さらには大沙漠での調査を体験された方であれば、その困難さを理解いただけるものと思う。

本調査は、日中間最大級かつ最も順調に進行している共同調査のひとつとなった。調査にあたっては過去の`西域探検、の教訓のうえに、ニヤ遺跡の主権は中国にあるという原点に立つのは当然として、`100年単位のニヤ調査、からみれば「日中共同ニヤ遺跡学術調査」は「基礎調査」であるべきであるとの基本方針のもと、分布調査・各遺構の撮影と測量・地表散

布遺物の収集を中心におこない、破壊につながるともいえる発掘は最小限にとどめた。更にたんに学術事業でなく、地域発展事業として、周辺の人々に測量発掘の補助作業などをしていただき、教育と現金収入の道も考慮し、ゴミの全て持ち帰りは当然実施し、現地の枯木は燃料として極力使用せず、プロパンガスや石炭を遠路運びこみ利用した。

ニヤ調査を歴史的に総括すれば、第一段階は20世紀初頭のスタイン隊などの外国隊による発見と文物持ち出しであり、第二段階は新疆ウイグル自治区成立直後の新疆博物館隊による食料もままならないなかでの決死の調査であり、第三段階が改革開放時代の日中共同隊による大規模調査である。日中共同調査は期間も規模も最大であり、顕著な成果を獲得した。しかもまだ報告書刊行などがつづいている。

およそ二千年前の住居の柱が林立して残るなど、これほどの価値と規模の遺跡は世界でも稀である。さらに遺跡南部には何万本もの枯れた胡楊が残り、古環境の復原にかけがえのない自然の一大遺産となっている。中国有数の文化遺産であり、人類共通の文化遺産ともいえるニヤ遺跡の保護は我々の共同責務であり、出来るかぎりの努力をしてゆきたい。出土遺物の保護と研究も充実させねばならない。それらの成果は今後も報告書や国際シンポジウムで公開してゆきたい。分布調査の補足(おそらく更に多くの遺構発見が期待できる)・北方遺跡の調査(沙漠化進展による生活拠点の南下を明確にできるとともに多くの遺構発見の可能性がある)・南部土塁の調査(役割・時代などが解明できる)など未完了の現地調査も機会があればと思っている。

残念なことは真田康道学術副隊長が病魔で離脱され、佛大教授も退任されたことである。ご快癒を祈る。筆者の能力不足により、真田教授よりの引継ぎもままならず、学術面のまとめも充分とはいえない。また記録や写真などが一部隊員に散逸しており、さらには佛大ニヤ機構が、研究会から正式機関への昇格が見送られ成果の次世代への継承に不安を感じる点も残念なことである。

4. 日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査とその概要

1. 調査の経緯

ダンダンウイリク(丹丹烏里克)遺跡は1896年1月にスウェーデンの探検家で地理学者のスウェン・ヘディンが発見した⁽⁶²⁾。その情報に触発されたスタインが1900年12月に大規模発掘を行い大量の壁画や「桑種西漸伝説」の板絵などを収集、『大唐西域記』記載の伝説がこうして確認された⁽⁶³⁾。彼はその足で東へとりニヤ遺跡を発見し大規模な発掘を行い大量の貴重遺物を収集した。ロンドンへ帰った彼は予備報告書などで概要を発表し、これがこの頃ロンドン遊学中であった大谷光瑞師による大谷探検隊実施のひとつの契機になったとも考えられる⁽⁶⁴⁾。

このようにダンダンウイリクは「シルクロード学」の原点ともなった著名な遺跡である。1905年に米国の地理学者ハンティントンが踏査し、1928年にはドイツのトリンクル隊隊員でスイスの植物学者ボスハートが踏査した⁽⁶⁵⁾。それ以来、その所在が定かでなくなったが1996・97年、石油探査隊に同行した新疆考古研隊が再発見し遺跡の位置が明確となった⁽⁶⁶⁾。その情報をもとに翌年にはスイスのバウマーが非正規調査をおこなった⁽⁶⁷⁾。このように世界中の探検家や考古学者の興味をひいてきたが、大沙漠の奥深く位置することと、未開放地域に位置することなどの理由から、本格的調査はおこなわれていなかった。

本遺跡は、北緯37度46分・東経81度04分一帯に寺院址・住居址など70ヶ所の遺構が東西約2km・南北約10km(周辺をふくむ)に分布し、スタインは収集遺物から8世紀に廃棄されたと推測している⁽⁶⁸⁾。なお、本遺跡の東方に位置するニヤ遺跡とは約145km隔てている。今後の調査で更に多くの遺構が発見されることだろう。海拔1,250m前後である。名称は「象牙の家」を意味するという。なぜ象牙なのかは今後の研究に期待したい。表記は中国語・日本語・英語ともそれぞれに数種類がある。唐代には「傑謝」と称されたようだ⁽⁶⁹⁾。

日中双方は1988年7月19日に交わしたニヤ遺跡やダンダンウイリク遺跡などをふくむ西域南道の遺跡群調査に関する覚書と同年11月14日調印の覚

書(ともに前述)をベースに、玄奘三蔵のインドからの帰路を研究テーマとしている安田順恵奈良女子大学大学院博士課程の踏査希望が「日中共同グンダンウイリク遺跡学術調査」(佛大ニヤ機構・新疆文物局・新疆考古研主催、佛大アジア宗教文化情報研究所助成)開始の縁となった。

2. 「西域のモナリザ」の発見

タクラマカン沙漠は日本国土の約9割に相当する面積。広大な沙漠での調査は困難を極める。100年前も今も殆ど変わらない。まさに「探検」である。現在の西域南道である国道315号線の小都市ユテン(于田・旧名克里雅・于闐から1959年改称)よりケリヤ河沿いに北上、四輪駆動車も悪路に度々スタグ。約120kmに約6時間を要した。バックカウエギリ(バスカウエギリとも・米薩来)と称される小集落でラクダに乗り換え。トラックなどの発達でラクダキャラバンもへり、荷物を運ぶのになれないラクダに大量の装備・食料を積むのは一仕事である。3時間かけてようやく出発。41頭のラクダ隊が水量ゆたかなケリヤ河を渡河するのは壮観であった。

GPSに入力した1997年新疆考古研隊測位の遺跡位置を目指していくつもの大砂丘を越えて進む。2日目も西へ西へと前進した。ラクダの歩行距離は砂丘を迂回するために、直線距離の1.5倍ほどになる。大沙漠の地平線に太陽がおちると急速に寒くなる。限られた日程のため暗くなっても進んだ。ラクダに乗りつづけると身体中が痛くなる。3日目の14時すぎにようやく遺跡東端に到達。一同から歓声があがった。到達の喜びとラクダに乘らなくてもよいという安堵感からだ。ラクダ歩行距離で約50km、2002年10



図35 月の沙漠をトとは大違いで長時間騎乗は苦行



図36 千数百年の悠久の時をへて(CD-1)

月30日、外国人としては初の公式到達だった⁽⁷⁰⁾。

目的であった到達が達成できた喜びにひたる間もなく、数隊に分かれて初歩的分布調査を開始。茫々とした大沙漠の砂丘の間に点々と遺構が残存している。ある遺構は大きく、ある遺構は小さく。建築構造を観察していると、前方で大きな叫び声。中国側隊員が露出した壁画を発見。風のいたずらか仏様のお顔を地表に。盛春寿局長と張玉忠新疆考古研副所長の指揮により保護のために緊急試掘を実施。寺院の東壁が外側へ倒れていた。慎重に砂を取り除くと次々と壁画が現れた。千数百年ぶりにお出ましになった御仏のご尊顔を拝し、おもわず合掌。

一同は不思議なご縁に驚いた。前年に予備調査を予定、実施直前にアフガニスタンで戦闘が始まり、隣接している新疆政府の勧告により延期した経緯があり、もし2001年に実施していたら、おそらくこの仏様にはお会いできなかったことであろう。日本側は略式法要を行い悠久の時をへて般若心経がこの地にひびき一同は感涙にむせんだ。この時は発掘の準備をしておらず、張玉忠率いる新疆考古研隊が急ぎ態勢を整え、翌月11日ウルムチを再出発し約2週間にわたって発掘し、12月5日帰着した。大沙漠奥深くで発掘し、ラクダと車で、大型の壁画を破損させぬよう約1,400km離れたウルムチの研究所まで運ぶことはたいへんなことである。そのうちのひとつ、如来が描かれた壁画を目にした私たちは、その眼差しと微笑みを拝し、思わず「西域のモナリザ」と叫んでいた。



図37 保護のため緊急試掘(CD-4)



図38 如来壁画(部分)

2002年調査(第1次調査・予備調査)

日程：10月25日～11月9日

参加者：(日本側8名) 小島康誉 安田順恵 岸田善三郎 岸田晃子 清田伶子 中造和夫 高田和行 高田洋子
(中国側7名) 盛春寿 張玉忠 李軍 佟文康 張鉄男 托呼提・吐拉洪 買提・卡斯木

サポート隊(ラクダ使い・運転手) 16名、総計31名。

行程：10月25～27日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴(「新疆日報」2002.10.26)。日中双方ウルムチで打合せ。コルラ経由沙漠公路を通りミンフン経由ユテン着、諸準備。ユテン文物部門へパソコンなど贈呈。28日＝トラックと四輪駆動車計6台でユテン出発。バックカエグリでラクダに乗り換えタクラマカン沙漠へ進入。30日＝午後ようやく遺跡東端に到達。遺跡概要把握。壁画発見、保護のため一部試掘。31日＝午後帰路に着く。11月2日＝ユテン着。4日＝往路の逆ルートでウルムチ帰着。中国側による壁画発掘の打合せ。日本側答礼宴。6日＝日本隊帰国。日本側隊長は杭州でのシンポジウムでニヤ調査概要を発表し、北京で阿不来提・阿不都熱西提全国政治協商会議副主席に壁画発見を報告し、入院中の龔偉超館長を見舞い、9日帰国(「新疆日報」2002.11.8)。

調査：遺跡概要把握。GPS登録。壁画発見・試掘。地表散布遺物収集。

12月には鉄木尔・達瓦買提全人代副主席に壁画発見を報告するとともに長年の支持への感謝を表した。

3. 壁画保護の開始と調査の本格化

2003年1月、佛大ニヤ機構会議で、壁画は内容(仏・菩薩・供養者・動物などと豊富)・量(約10㎡と広大なもの)・質(高度の洗練された表現力をもつ)とともに優れており、「西域仏教はもとよりアジア古代仏教絵画史の研究に欠かせない。」との判断から、この調査研究プロジェクトを「日中共同ニヤ遺跡学術調査」の関連事業として実施することが承認された。同月、

上記方針に対して新疆文物局より同意するとの回答をえた。

4月には、新疆考古研で張玉忠・李文瑛研究員らとともに壁画の予備研究を開始。井上正京都造形芸術大学教授(前佛大教授)は「内容は豊富、西域壁画の最高傑作のひとつ、文献にある『用筆緊勁にして屈鉄盤絲の如し』そのものを見ているようだ。」と最高水準の評価を与えた。司馬義・鉄力瓦尔地新疆主席へ保護研究について報告した(「新疆日報」2003.5.1)。調査後、井上正・安藤佳香・切畑健大手前大学教授はトルファンの石窟壁画も参観した。この時は中国で「サーズ」が流行中で、関空から北京への乗客は我々4人の日本人と帰国する中国人3人だけだった。北京空港は閑散としていた。

日程：4月25日～5月6日 参加者：小島 井上正 安藤佳香 切畑健

7月、王樂泉中央政治局委員・中共新疆委員会書記に一層の協力を要望した(「新疆日報」2003.7.14)。7月～8月、盛春寿局長一行が訪日し、打合せを行った。9月22日、保護研究協議書に筆者と艾尔肯・米吉提新疆文物局副局长が調印し、10月には国家文物局より正式許可を取得した。12月には艾尔肯・米吉提・張玉忠らと打合せ、中国側許可のもと壁画残片を持ち帰り、奈良国立文化財研究所の協力により分析をおこなった。同月、宋新潮国家文物局副司長へ壁画保護研究許可の感謝と今後の協力を要請した。またNHKの依頼で盛局長に、ニヤ・ダンドンウイリク両遺跡をふくむ「新シルクロード」撮影と「同文物展」への文物出陳の協力要請を行った。

2004年1月、「日中友好キジル千仏洞修復保存協力会」設立時からニヤ調査などでなにかとご指導いただいた塩川正十郎前財務大臣の政界勇退に際して「塩川先生ご苦労さま会」を安田咲嵐薬師寺管主夫妻ら多数の参加をえて開催し感謝を表した。

2月にはNHKの招聘で来日した中央テレビ「新シルクロード」関係者や林梅村と筆者・真田康道・井上正が打合せを行った。同月、ウルムチで「新シルクロード」撮影許可協議をNHK・中央テレビ・新疆政府外事弁公室・新疆文物局・筆者で行ったが、思惑が錯綜し難航、議事録のサインのみとなった。3月、日中双方は筆者・井上正・安藤佳香・切畑健・孫躍新に文化財保護技術の第一人者である岡岩太郎岡墨光堂社長・辻本与志一アートプリザベーションサービス代表を加え、馬世長北京大学教授・

鉄付徳中国国家博物館教授・佟文康新疆考古研研究員・劉勇亀茲石窟研究所員・何林同所員らと新疆考古研で保護研究原案を策定、双方は柔軟な考えと先進技術により保護を行うことで一致し、庫熱西・買合蘇提新疆副主席と会見した(「新疆日報」2004.3.12、2004.11.10、2005.4.5、「新疆經濟報」2004.3.12)。

同月、「新シルクロード」撮影交渉は難航したが筆者誕生日を理由に各方面に譲歩を求め合意に達し、後日調印の運びとなった(「新疆日報」・「新疆經濟報」・「新疆都市報」2004.6.14)。4月には「新シルクロード展」の交渉を促進した。5月、艾尔肯・米吉提・張玉忠・鉄付徳と筆者・井上正・沢田正昭国士舘大学教授(前奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長・筑波大学教授)・辻本与志一・孫躍新が北京科技大学での国家文物局専門家委員会の王丹華・潘路ら6委員との審議会合に出席し保護原案を説明した。これは国家文物局の規定により計画が適正か科学的かを審査するもので、承認された。これにもとづき材料・薬剤などの準備を開始した。一部については、岡岩太郎・辻本与志一より無償提供をうけた。

10月には、NHKと筆者の招きで来日した庫熱西・買合蘇提新疆副主席・盛春寿局長らがNHKと「新シルクロード展」の最終調印を行った。一行は水谷幸正・中井真孝学長・真田康道らと会談し、ダンダンウイリク遺跡調査・壁画保護を更に協力推進することで合意した。また奈良では、柿本善也奈良県知事・久米健次奈良女子大学学長・安田暎胤薬師寺管主とも会見した。同月、第2次調査を敢行し、スタインが貴重遺物を発掘した南部遺構群など26カ所の遺構をGPS登録し模式図を作成し、同遺跡が仏教聖地、と思われる古代仏教都市であることを確認した。ニヤ遺跡も再訪した。

2004年調査(第2次調査)

日 程：10月10日～10月27日

参加者：(日本側5名) 小島康誉 浅岡俊夫 安藤佳香 孫躍新 近藤謙
(中国側5名) 張玉忠 李軍 鉄付徳 佟文康 買提・卡斯木
サポート隊(ラクダ使い・運転手・コック)・取材班24名、総計34名。

行程：10月10～11日＝日本隊出発。新疆文物局歓迎宴。日中双方はウルムチで打合せ、庫熱西・買合蘇提副主席より協力挨拶。諸準備。ホータン着。12日＝ユテン着、中国先発隊と合流。13～15日＝四駆6台で出発。車オバーヒートで火災発生。水など失う。バッククエグリでラクダ37頭に乗り換えて沙漠へ。15日午後遺跡到着。遺跡東北端にBC設営。15～16日＝調査。17～19日＝帰路に着く。バッククエグリで四駆5台に乗換。車両故障続出し、順次ユテンへ。最終の日本側隊長は19日午前3時半ユテン帰着。各種整理後、ミンフウンへ。20日＝沙漠車4台でニヤ遺跡へ。カパクアスカン児童へ学用品贈呈。仏塔近くにBC。21～22日＝調査。23日＝帰路につきミンフウン経由ホータン着。24日＝サンπρα遺跡参観。装備など整理。ウルムチ帰着。25日＝日中双方打合せと壁画研究。日本側答礼宴。26～27日＝日本隊北京経由帰国。

調査：寺院址など建物遺構25カ所と果樹園1カ所を登録。遺構模式図作成。地表散布遺物収集。調査とは別に、NHKと中央テレビが「新シルクロード」制作のため同行した。

同年11月、各種準備がととのい、張玉忠・鉄付徳・佟文康・尼加提・肉孜・劉勇・何林らと双方の技術を活かし壁画保護処置を開始した。また富澤千砂子六法美術社長が模写も行った。岡岩太郎は「新疆側は充分な技術水準にある。汚れを完全に取り除くことなく、表面の凹凸も残し千数百年



図39 まずは試験、そして本番



図40 『源氏物語絵巻』も模写した専門家により

前の風格がしのばれるようにしよう。」と提案し、張玉忠・鉄付徳も同意した。

日程：11月6日～14日 参加者：小島 岡岩太郎 辻本与志一 富澤千砂子 孫躍新 亀井亮子

12月、「楼蘭展」以来、中国外展示が禁止されていたミイラの「新シルクロード展」への展示交渉でようやく基本的許可を取得した。筆者はこの年、調査保護研究に「新シルクロード」・「新シルクロード展」の交渉協力が重なり14回中国を訪問した。

2005年1月には双方は保護処置の進展確認と研究をおこなった。

日程：1月28日～2月6日 参加者：小島 井上正 安藤佳香

安藤佳香は、「新出壁画に見られる法隆寺金堂旧壁画の源流を思わせる鉄線描には、ホータンの王族に出自をもつ名画家尉遲乙僧の画風をしのげるものがある。精彩に富む瞳の動きは、拝者の眼と心に深く訴えかけてくる。世界的名画の出現であるといっても過言ではない。」とコメントしている。筆者は盛局長・李軍・孫躍新らとともにその足で小河墓遺跡を視察し発掘隊員を慰問した。新疆文物局許可のもと外国人として公式初到達とのことであった。

4. 成果の公開

壁画のうち保護処置をおえた「西域のモナリザ」を含む4点やニヤ隊検出の「花卉文綴織袋」などが2005年4月から12月まで、「新シルクロード展」の会場である東京・神戸・岡山で公開され、「楼蘭の美女」以来のミイラも展示された⁽⁷¹⁾（「産経新聞」2005.8.11）。4月と8月には展示準備中の上記会場で安藤佳香が研究をおこなった。同年1月から12月まで、NHK「新シルクロード」が各チャンネルで度々放送され、壁画や前年調査の一部が紹介された。

6月、筆者と安田順恵・岡田和雄らは劉曉慶新疆政府外事弁公室処長の案内で玄奘三蔵が越えたと仮説のベデル峠を踏査した⁽⁷²⁾。その後、加藤九祚国立民族学博物館名誉教授らをラワック遺跡へ案内した。8月、日中双方は佛大四条センターで「日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロ

ジェクト国際シンポジウム」を開催し、福原隆善佛大学長・中井真孝・杉本憲司・筆者・安藤佳香・浅岡俊夫・岡岩太郎・孫躍新・呂家伝・阿日甫・卓熱拜克新疆政府副秘書長・李軍・張玉忠・鉄付徳・榮新江らが挨拶や発表をおこない、約200人が参加した⁽⁷³⁾。同センターと佛大アジア宗教文化情報研究所でプロジェクト概要を紹介する写真展も開催した。同展はNHK神戸放送局・岡山市デジタルミュージアムへ巡回した。9月25日、日中双方は調査協議書(2005・06年分)に筆者と張玉忠が調印した。

10月には司馬義・鉄力瓦尔地新疆主席と会見し新疆ウイグル自治区成立50周年への祝賀を表明し保護研究への一層の協力をお願いし、文化参観団とともに成立50周年記念写真展などを参観した(「新疆日報」2005.10.2)。10～11月、第3次調査をおこなった。南北約12km・東西約5kmの範囲を調査、新たに円形遺構など約60カ所を登録するとともに、測量技師の参加をえて、7,487ポイントを測量し地形図を作成するなど大きな成果をえた。調査終了後にタマゴウ仏寺の塑像と壁画を参観し、資金提供から10年かかったホータン博物館の開館式に出席した。



図41 保護処置完了した壁画を共同研究



図42 情報早期公開の原則により壁画を展示

2005年調査(第3次調査)

日程：10月7日～11月1日

参加者：(日本側5名) 小島康誉 浅岡俊夫 乾哲也 奥山大石 村上智見
(中国側6名) 張玉忠 劉国瑞 佟文康 阿里甫江・尼牙孜 呂宗宜 李東

サポート隊(ラクダ使い・運転手・コック) 13名、総計24名。

行程：10月7～8日＝日本隊出発。日中双方はウルムチで打合せ、新疆文物局歓迎宴。諸準備。ホータン着。9～12日＝ユテンへ。バックカクエグリで沙漠車からラクダ40頭に乗り換え、遺跡到達。13～24日＝調査。25～28日＝帰路につきバックカクエグリとユテンで宿泊、タマゴウ仏寺を参観し、ホータン着。ホータン政府歓迎宴。29～30日＝ホータン博物館開館式参列後、ウルムチへ。新疆考古研で双方打合せ。新疆政府歓送宴。30～11月1日＝日本隊北京經由帰国。

調査：寺院仏堂など建物遺構15カ所や倒壊建物址・窯跡・果樹園・遺物散布地など計55カ所を登録。遺跡北方を探查し仏寺らしき建物址や遺物散布地を発見し登録。各遺構測量。地表散布遺物収集。小島と劉国瑞らは疲労度を確かめるため遺跡からバックカクエグリまで徒歩で帰った。

調査終了後、出田和久奈良女子大学教授・安田順恵らを新疆側とともに小河墓遺跡へ案内した。その後、王樂泉中央政治局委員・中共新疆委員会書記に調査報告をおこない遺跡の更なる保護について提案した(「新疆日報」2005.11.7)。12月にも安藤佳香・筆者が新疆考古研で壁画研究を行った。

2006年1月、新疆政府の幹部約100人へ文化財保護研究の重要性を講演した。このような広報活動については後述する。3月には司馬義・鉄力瓦尔地新疆主席一行がNHKと筆者の招きで訪日、東京・名古屋・奈良などを案内した。5月より佛大ニヤ機構の研究発表会を安藤佳香中心で開始した。6月、本調査隊の成果もあり、国家文物局により本遺跡は「全国重点文物保护单位」に昇格した(「光明日報」2006.6.10)。7月、全ての壁画の保護処置が完了したこととともない、筆者・岡岩太郎・沢田正昭と潘路・馬家郁(いずれも国家文物局専門家委員)・盛春寿局長・鉄付徳・張玉忠・劉国瑞らが参加し新疆考古研で保護完了審査会が開催され、保護処置は承認された。付帯意見として壁画周囲の色調統一が示され、承認報告書は国家文物局へ提出された(「中国文物報」2006.8.4)。司馬義・鉄力瓦尔地新疆主席と会見

し成果を報告した(「新疆日報」2006.7.24)。

10～11月、第4次調査を実施した。分布調査ではスタイン報告書に記載されている遺跡北方の「ラワク」と「D17」の探査を試みたが発見できず、「D17」所在推定地の約1km北に倒壊建物址や窯跡・遺物散布地を新たに発見し登録した。合わせて遺構・遺物散布地など約20ヶ所を新たに登録し、国家文物局の正式許可(2006年161号)をえて中国側が数ヶ所の遺構を発掘し、日本側はその補助を行った。寺院址も状況確認をおこない内容豊富な壁画を撮影し、保護のため埋め戻した。測量では砂丘の移動による変化地点を補足するとともに発掘遺構を測量し、これらの結果、西域における「仏教聖地」としての本遺跡の全容をほぼ把握することができた。



図43 デジカメによる記録

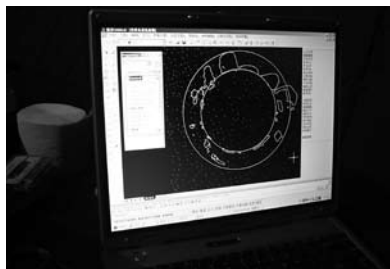


図44 夕食後に遺物実測やパソコン取り込み

2006年調査(第4次調査)

日 程：10月9日～11月8日

参加者：(日本側5名) 小島康誉 浅岡俊夫 乾哲也 奥山大石 竹下繭子

(中国側7名) 張玉忠 阮秋榮 佟文康 阿里甫江・尼牙孜 買提・卡斯木 呂宗宜 韓善鋒

サポート隊(ラクダ使い・運転手・コック) 7名、総計19名。

行 程：10月9～11日＝日本隊出発。新疆政府歓迎宴。日中双方ウルムチで打合せ後ホータン着。12日＝ユテン着。13日＝四駆で出発。途中で沙漠車2台に乗り換え、一気に遺跡到着、BC設営。14～11月1日＝分布調査班・発掘調査班・測量班に分かれて調査。

調査時はラクダも使用。2日＝帰路につき沙漠車でユテン着。3日＝チラ県書記に報告。ホータン着。4～5日＝各種整理、ホータン政府歓送宴。5日午前2時ウルムチ帰着。李屹中共新疆委員会宣伝部長歓送宴。6～8日＝日本隊北京經由帰国。

調査：北方をふくむ分布調査。数ヶ所の遺構を発掘調査。各遺構測量。地表散布遺物収集。

2007年3月、筆者・安藤佳香は新疆考古研で盛局長・于志勇・張玉忠らとニヤ報告書第三巻やダンドンウイリク報告書の打合せを行い、壁画研究後、チラ県ダマゴウ仏寺壁画を調査するとともに、ラワック遺跡も参観した。同月、新疆考古研で、ダンドンウイリク遺跡出土遺物約100点を実測した。

日程：3月13日～23日 参加者：浅岡俊夫 萩原美香

同月、盛春寿・于志勇一行が佛大ニヤ機構の招きで訪日し、福原隆善・筆者らと佛大でのシンポジウム11月開催に同意するとともに、08年に北京大学で開催しようと合意した。一行は筆者とユネスコ親善大使(文化財保護担当)でもある平山郁夫宅を表敬訪問し、「シルクロード」世界遺産申請について貴重な示唆を得た。本件関連については後述する。

4月、新疆での無許可測量で取り調べられ調査器材・資料没収と罰金刑を科せられた日本の某大学・研究所教授ら4人側代表者と訪問し、新疆政府外事弁公室・新疆測量局・新疆文物局へのお詫びの仲介を行った、新疆側から「許可取得して実行するのは当然のこと、不愉快なことは二度と起こさないように。」などとの発言があり関係法規が4人側代表者に手渡された。新聞には教授らの実名入りで報道された⁽⁷⁴⁾(「新疆日報」2007.4.28、「読売新聞」・「京都新聞」2007.5.10、「楊子晚報」2007.6.20)。6月、王樂泉中央政治局委員・中共新疆委員会書記と会見し活動への高い評価が表明された(「新疆日報」2007.6.20)。その後、浅岡俊夫とともに新疆側と報告書・シンポジウムについて打ち合わせた。8月にはダマゴウ仏寺博物館の開館式に文化参観団とともに参列し、建設資金を贈呈した。

11月、日中双方は前述の「日中共同シルクロード学術研究国際シンポジウム」を佛大四条センターで開催し、福原隆善・杉本憲司・八木透佛大教

授・筆者・安藤佳香・浅岡俊夫・片山章雄東海大学教授・孫躍新・艾尔肯・米吉提・張玉忠・于志勇・阮秋榮・榮新江・巫新華中国社会科学院考古研究所新疆隊隊長らが挨拶・発表を行った⁽⁷⁵⁾（「中外日報」2007.11.20）。同時に調査研究保護の成果を、浅岡俊夫・安藤佳香・岡岩太郎・沢田正昭・竹下繭子・安田順恵・孫躍新・周培彦・乾哲也・奥山大石・盛春寿・張玉忠・榮新江・佟文康・呂宗宜・劉国瑞・古麗比亞・阿里甫江・尼牙孜・屈涛・阮秋榮・巫新華らの尽力をえて『日中・中日共同ダンドウイリク遺跡調査学術報告書』（日本語版）としてまとめ文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業（平成15～19年度）関連刊行物として出版した⁽⁷⁶⁾（「朝日新聞」2008.5.9）。中国側代表団を九州国立博物館などへ案内した。12月、日中双方はウルムチでの協議、北京での北京大学との協議を経て、新疆側が北京大学へ「漢唐西域考古－ニヤ・ダンドウイリク国際シンポジウム」を申請した。

2008年4月、ウルムチ市長時代からなにかと支持いただいた努尔・白克力新疆主席と会見し主席就任を祝うとともに、ニヤ・ダンドウイリク調査を報告し、報告書を贈呈した。努尔・白克力主席から「貴方は新疆の改革開放30年の見証人だ。」と言われ、下記出版につながった（「新疆日報」2008.4.17、「新民晚报」日本版2009.1.12）。11月には新疆政府外事弁公室主催「改革開放30周年記念－新疆対外友好交流回顧展望大会」がウルムチで開催され、筆者は両調査を含む国際協力活動を発表するとともに、同時出版した『見証新疆変遷』写真集を日本国自治体国際化協会はじめ近隣諸国政府代表団をふくむ内外参加者約200人へ贈呈した⁽⁷⁷⁾（「新疆日報」2008.11.21、2008.12.2）。

この年、申請していた上記シンポジウムは、北京オリンピックなどの関係から許可されなかったが、双方は継続努力することで一致した。

12月から2009年3月にかけて、台北の国立歴史博物館で、日中共同隊が発掘した「王侯合昏千秋萬歳宜子孫」錦や「西域のモナリザ」など多数の貴重文物をふくむ「絲路伝奇・新疆文物大展」が開催された⁽⁷⁸⁾。

2009年6月、テレビ東京「封印された三蔵法師の謎」撮影許可取得を促進した新疆部分アスターナ古墳・新疆博物館・ベデル峠などの撮影（旅

人：役所広司)に立ち会った(「撮影協議書」2009.3.26)。ベデル峠はキルギスタンとの国境で軍事管理区のため、日本のテレビ撮影が認められたのは初めてのことであった⁽⁷⁹⁾。

6月、北京大学の許可をへて中国教育部(文科省相当)へ送られていた前述シンポジウムは政府許可を取得し、具体的準備を開始した。同月、楊剛新疆常務副主席と会見し長年の支持に感謝を表明し、前月刊行した『見証新疆变迁』(第二巻)を使用し、7月にかけて新疆政府外事弁公室の呉憲書記・孔多孜・玉素甫副主任(現駐大阪副総領事)・康秀英処長らと「新疆改革开放成就広報万里行」をウルムチ・トルファン・アルタイ・アクス・ホータンなど8都市で行った⁽⁸⁰⁾(「新疆日報」2009.6.12、2009.6.16)。15都市の予定であったが、諸事情で繰り上げ帰国した日にウルムチ騒乱が発生した。7月から翌年12月にかけて、北京とローマ(イタリア)で「秦漢－ローマ文明展」が開催され、ニヤ調査隊発掘の錦が出陳された⁽⁸¹⁾。

9月、騒乱後の状況視察のため訪問し、鉄力瓦尔迪・阿不都熱西提新疆副主席と会見し、死傷者へのお悔みと見舞いを表明し、副主席からその後は安定していると説明を受けるとともに、ウルムチ市内を視察した(「新疆日報」・「新疆経済報」2009.9.4)。当日から数日間にわたり大規模デモが発生し、厳戒態勢であった。その帰路、清華大学「ソフトパワーと政府コミュニケーション国際シンポジウム」レセプションで新疆の発展ぶりとニヤ・ダンダンウイリク両調査をはじめとする長年の国際協力を映像で発表した⁽⁸²⁾。騒乱につづく大規模デモ直後であったので、大きな反響があった。席上、「公共外交突出貢献賞」が授与された⁽⁸³⁾(「人民网」2009.11.3、「中国新闻网」2009.11.9、「騰訊新聞」2010.3.26)。同月、オックスフォード大学と大英博物館でスタイン資料(スタイン直筆日記・往復書簡など)を調査し、史料を入手した。

11月21日～22日、北京大学で「漢唐西域考古－ニヤ・ダンダンウイリク国際シンポジウム」(主催：北京大学考古文博学院・新疆文物局・北京大学中古史研究中心・佛大・中国社会科学院考古研究所)を開催した。日本側からは、山極伸之佛大学長・中原健二佛大文学部長・筆者・安藤佳香・浅岡俊夫・吉崎伸・岡岩太郎・伊東隆夫・吉田恵二・孫躍新・周培彦・田中

清美・市川良文・富澤千砂子・松村公栄ら18人、中国側からは、呉志攀北京大学副書記・童明康国家文物局副局長・孫華北京大学考古文博学院副院長・白雲翔中国社会科学院考古研究所副所長・盛春寿局長・林梅村・榮新江・王子今中国人民大学教授・李希光清華大学院長・巫新華・鉄付徳・朱泓吉林大学教授・魏堅中国人民大学教授・王衛東新疆考古研所長・于志勇・張玉忠・張鉄男・李軍・甘偉など多領域の研究者が両日とも約100人参加し、挨拶や発表・討議が熱心に行われ大成功であった⁽⁸⁴⁾。

開会式で呉志攀副書記・童明康副局長・盛春寿局長とともに挨拶した山極伸之学長は「国家文物局の許可のもと関係機関と行ってきたニヤ・ダンガンウイリク調査が大きな成果をあげたことに感謝する。佛大は2012年開学100周年を迎える。今後も世界の大学などと交流を深め、世界文化発展と人類福祉向上に尽力したい。」などと挨拶された。

閉会式で、盛局長の「新疆は内地に比べて厳しいところだ、現地調査の条件は厳しく、待遇面の問題もあり、人材の流失も多い。新疆の皆さんはがんばってほしい。内地の人は応援してほしい。」をうけて、筆者は「日中双方の一流専門家の幅広い発表はたいへん嬉しい。20年前に新疆で共同事業を始めるのは至難であった。20年余の調査研究保護事業の成果も大きい、多くの方に研究テーマを提供できたことも大きな成果であり、それは末長く提供し続けるだろう。今後も微力を尽くす。」と挨拶した。同時に『丹丹烏里克遺址－中日共同考察研究報告』が出版された、本書は2007年に刊行した日本語版の中国語版であるが、一部に欠落(筆者・竹下蘭子執筆部分)と追加があった⁽⁸⁵⁾。



図45 熱心に発表・討議された2日間



図46 シンポジウム日本側出席者(一部)

この模様は冒頭の中国文物報以外でも大きく報道された(「中国文物報」2009.11.25、「新疆日報」一頁特集2009.12.9)。日本側参加者はシンポジウムに先立ち、盛春寿同行のもとニヤ隊員でもある李季故宮博物院常務副院長の配慮で、同博物院非開放部分を参観した。12月、筆者と盛春寿・王衛東・于志勇・張玉忠・李軍・甘偉らはウルムチでシンポジウム総括を行い、成功確認とともに正式論文集発行と再び開催することで一致した。

2010年3月、浅岡俊夫・孫躍新・周培彦の協力をえて上記シンポジウム発表要旨を日訳し関係報道を含めた『漢唐西域考古－ニヤ・ダンダンウイリク国際学術シンポジウム発表要旨要約資料集』を刊行した⁽⁸⁶⁾。同月より12月にかけて、ボワーズとヒューストン(共にアメリカ)で、「SECRETS OF THE SILK ROAD」が開催され、「王侯合昏千秋萬歳宜子孫」錦などが出陳された⁽⁸⁷⁾。5月、これまでの文化遺産保護研究事業を含む国際貢献に対して中国人民対外友好協会から「人民友好使者」称号が与えられた⁽⁸⁸⁾(「中国人民対外友好協会」電子版・「天山网」2010.5.22、「中国网」・「中国新闻网」2010.5.24、『青年記者』2010.5月号、「人民网」日本版2010.7.5)。

6月にはこれまでの文化遺産保護研究への尽力が評価され、中国文物保護基金会第三回「薪火相伝－中国文化遺産保護年度傑出人物」に選ばれ、賞金も頂戴した⁽⁸⁹⁾(「中国文物保護基金会」電子版2010.6.13、「中国新闻网」2010.6.17、「人民网」日本語版2010.6.18、「世界新聞報」2010.6.22、2010.6.29、「新民晚報」日本版2010.6.28、「日本と中国」2010.7.5、「新疆日報」2010.9.6)。無錫で盛大に開かれた授与式で、担当者が準備した中国文化財関係指導者前列着席・受賞者後列立席での記念撮影のあと、單霽翔国家文物局局長が「受賞者前列でもう一枚撮ろう、報道機関はこちらを使って。」と発言、さすが膨大な中国文化遺産の総責任者で保護関係の著書や各国での講演も多い指導者と感激した⁽⁹⁰⁾。

8月、新疆トップの張春賢中共新疆委員会書記と会見した。張書記より「4月末就任以来、新疆党委員会外国人と会見するのは初めて、それほど評価している、今後も協力する、提案があれば遠慮なく。」との発言があり、「文化財保護は経済活動にも結びつので更に強化を。」と提言し、ニヤ・ダンダンウイリク調査の両報告書を贈呈した。また丹羽宇一郎駐中国大使の「機

会あれば新疆も訪問したい。」との言葉を伝えるとともに、「新新疆」を広報するための訪日を招聘した(「中国共産党新聞網」・「新疆日報」・「天山網」・「新疆電視台」2010.8.14、「新華網」2010.8.15、「中国政府網」2010.8.17)。

12月からソウル(韓国)の国立中央博物館で「シルクロードと敦煌展」が開催され、日中隊が発掘したニヤ遺跡出土のカローシュティー文書や壁画・弓矢、ダンダンウイリク遺跡出土の壁画など多数が出陳された(2011年4月まで開催予定)⁽⁹¹⁾。

5. 調査の組織と成果

以上の調査の責任者(隊長)を日本側は筆者(2002年～)が、中国側は盛春寿・張玉忠(02年～)がつとめ、日本側副隊長を浅岡俊夫(04年～)がつとめた。

研究領域が多岐にわたることもあり、後述のように多くの機関の研究者が参加した。専門分野は文化財管理・国際協力・考古学・建築学・仏教美術史・文化財保護・模写・測量などである。これら多くの方々の努力により、次のような成果をあげることができた。

- 寺院・住居・円形城壁・炉・窯・果樹園など70ヶ所の遺構と遺物散布地約30ヶ所を確認し、GPSなどで経緯度を登録し、遺跡分布図を作成した。
- 光波測量により、各遺構・周辺地形図を作成した。
- 大量の国宝級壁画を発見し保護のために緊急発掘し、保護と研究を行った。
- 銅貨など多くの遺物を収集し研究を開始した。
- 中国側は国家文物局の許可をえて数ヶ所の寺院址を試掘し状況確認をおこない内容豊富な壁画を撮影し、保護のため埋め戻した。

6. 小括と今後

以上のように、日中双方の努力により西域における^①仏教聖地、としての本遺跡の基礎調査を完了した。しかし、まだまだ取り組まねばならない事は多い。ニヤ・ダンダンウイリク両遺跡出土遺物などのさらなる研究を

日中双方で進めたいと考えている。中国側が主となり試掘し保護のために埋めもどした南部遺構群などの本格的な調査も機会があればと思う。そのような成果は報告書やシンポジウムなどで公開したい。本稿は文字による記録であるが、写真などの電子データ化もニヤ(真田康道学術副隊長らの尽力で作成されているが、より全面的なものを)を含めて浅岡俊夫や諸隊員の協力をえて稼働しつつある。

それ以外でも脳裏に浮かぶ項目は多いが、古稀が近づき研究者でもない筆者には荷が重い。例えば、タマゴウ仏寺・キジルヤクムトラなどクチャ周辺の千仏洞壁画群などの総合研究、仏教東漸と西漸、盛衰時期、沙漠形成、西域探検史、ダンダンウイリクを時代の異なる「扞弥国」と比定する説もあるが妥当なのか、ニヤやダンダンウイリクを結んで古代西域南道とする説もあるが妥当のかなどである。内外の多くの方が取り組まれることを期待したい。

2010年12月、新疆考古研で盛春寿局長・王衛東新疆考古研所長・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇・張玉忠らと打ち合わせを行い、中国側業務繁多で遅れている『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三卷)中国語版は2011年10月以前の出版を目指すとともに、ニヤ・ダンダンウイリク出土遺物研究をより進めることで合意した。その帰路、清華大学国際伝播研究センターで「公共外交29年－相互理解困難、相互理解重要」を講演、9月以来の「日中間波高し」のなか、微妙な質問が多く出された。体制や文化などの異なる外国間の相互理解は困難、だからこそ相互理解の努力が重要と訴えた。李希光院長より2011年4月の同大学創立100周年行事に合わせて「ガンダーラからニヤ」(仮題)写真展を開催したいと提案(ガンダーラ関係はパキスタン大使館が提供すると)があり、基本同意した。

5. 関連事業とその概要

以上のような文化遺産の直接的な調査・保護・研究面以外に、次のような活動を展開してきた。これらとの相乗効果もあり、調査保護研究が比較的スムーズに進んだともいえる。

1. 新疆文化文物優秀賞提供

文化遺産の調査・保護・研究・継承を実践するのは、最終的には人である。その育成こそ重要と考え、1999年より新疆政府外事弁公室・新疆文化庁・新疆文物局と「小島新疆文化文物優秀賞」を設立し、毎年20人・団体を表彰し、鼓舞している（「筆者と新疆文化庁との協議書」1999.7.3、「中国文物報」1999.8.1、2001.1.17、「新疆日報」1999.12.22、2000.12.20、2001.12.19、2002.12.25、2004.12.17、2005.12.20、2006.12.20、2007.12.19、2008.11.19、2009.12.6、2010.12.3、「ウルムチ晩報」1999.12.25、「新疆経済報」2002.12.24、「中国日報」電子版2010.12.2）。毎年の授与式は庫熱西・買合蘇提や鉄力瓦尔迪・阿不都熱西提など時の新疆副主席、呂家伝や韓子勇など時の文化庁書記、祖農・庫提魯克・阿不力孜・阿不都熱依木など時の新疆文化庁庁長、岳峰や盛春寿など時の新疆文物局局長、劉宇生や劉曉慶・康秀英など時の新疆政府幹部などが出席し盛大に開かれ、文化文物管理や研究者ばかりでなく歌舞継承者やニヤ遺跡の保護管理人といった第一線の人たちの受賞業績が映像で紹介され大きな励みになっている。本賞は張玉忠の示唆をうけて創設した。現時点の契約は2013年までである。これ以外にも中国文物保護基金会に1993年から5年間毎年研究者2名を日本に招き、専門機関での研修制度を設けた（「筆者と国家文物局との協議書」1993.6.18）。



図47 感涙する人も多い文化文物優秀賞授与式



図48 世界の未来を担う若人に幸あれ

2. 中国歴史文化遺産保護網運営

経済急発展の一方で、破壊もすすんでいる。文化遺産保護意識を啓蒙するため、2000年、孫躍新・周培彦らの尽力をえて「中国歴史文化遺産保

護网」www.wenbao.netを設立、運営している。まったくの公益性ネットであり、高い評価をえている（「CHINA DAILY」2004.3.12）。運営費は孫・周夫妻が拠出するとともに一部は友人の寄付。

3. 歴史档案史料刊行

閲覧しにくい史料を研究者に提供することを目的に、2001年より新疆ウイグル自治区档案局（館）と共同で、同館収蔵の史料を刊行している。これまでに出版したのは『近代外国探検家新疆考古档案史料』・『中瑞西北科学考察档案史料』・『スタイン第四次新疆探検档案史料』・『清代新疆建置档案史料』である（「新疆日報」2000.12.19、2006.1.23、2010.11.30、「中国档案報」2004.5.17、2004.5.31）。なお一部はほかの档案馆収蔵史料も含んでいる。以上3項目が文化財保護研究関連である。

4. 新疆大学奨学金提供

全ての基礎は人材にある。中国重点大学のひとつである新疆大学学生・院生育成のために、1986年より「小島新疆大学奨学金」を贈呈している（「筆者と新疆大学との協議書」1986.7.16、「新疆日報」1994.10.12、1999.1.7、2001.1.10、2002.12.25、2004.12.16、2005.12.21、2006.12.19、2007.12.19、2008.11.19、2009.12.6、2010.12.3、「新疆教育報」1996.3.16、「ウルムチ晩報」1999.1.12、2000.12.24、「新疆経済報」1999.1.21、2005.12.20、「天山网」2010.12.2）。毎年授与式には劉怡や庫熱西・買合蘇提など時の新疆副主席、阿克木・加帕尔や伊布拉音・哈力克・阿扎提・蘇里旦・安尼瓦尔・阿木提など時の学長、劉宇生や劉曉慶・康秀英など時の新疆政府幹部らが出席し、学生たちにとって栄えの日である。新疆で最も早く設立された奨学金で、当初は一年分の生活費に相当したほどで金額に意味があったが、生活が向上し奨学金制度も増えた最近ではその受賞名誉が意味を持っている。安尼瓦尔学長の「小島精神に学ぼう」挨拶には毎年拍手が鳴りやまず、授与式後にサインに殺到するほどである。累計3,900人余が受賞し、新疆各分野で指導者・幹部となっている人も多い。現時点での契約は2015年までである。一時期、企業の支援もうけた。なお、2011年12月末、東京理科大学工学博

士でもある塔西甫拉提・特依拝副学長が学長に就任した。

5. 希望小学校建設

学習条件改善のために、1998年より新疆政府外事弁公室・新疆青少年發展基金会と僻地に日中友好希望小学校5校舎を建設した(「バインゴル日報」2003.7.9、「新疆日報」2003.7.11、2003.7.22、2003.7.25、2005.10.2、2009.9.4、「亜洲中心時報」2003.8.7「新疆經濟報」2009.9.4)。多民族地区であるので、漢・ウイグル・モンゴル族など民族バランスも考慮している。一部は上岡長作・喜多野高行・涂善祥・遠藤さち子らの友人や安田暎胤師が資金拠出。

6. シルクロード児童就学育英金提供

急成長してはいるが貧困地区では学用品なども買えない家庭もまだまだ多く、学習条件改善のために、1999年よりウルムチ市政府と貧困児童に育英金を提供している(「筆者とウルムチ市政府との協議書」1999.7.1、「ウルムチ晩報」1999.12.23、2000.7.16、2001.12.21、2003.7.7、2008.4.16、2009.3.5、「新疆都市報」1999.12.23、「新疆日報」2003.7.7、「中国新聞網」・「網易」2010.7.22)。累計1,100人に達している。一部は友人からの募金。以上3項目が人材育成関連である。

7. 各種寄付

仏教寺院建設・学習機材・博物館建設・通信機材・文化財研究設備・福祉機材・図書・撮影機材・被災義捐金・パソコン設備・大学研究項目など多方面への寄付を1986年から行っている(「新疆文化庁感謝状」1991.8.12、「新疆日報」1996.4.11、2000.7.17、2000.7.25、2002.7.8、2003.3.4、2008.5.20、2008.6.27、2009.12.7、「新疆經濟報」2000.7.25、2008.5.16、「ウルムチ晩報」2008.5.16)。一部は友人・知人からの募金も含んでいる。

8. 各種代表団派遣

新疆を理解いただくために、政治・行政・文化・経済・メディア・観光など多方面にわたる多数の代表団派遣を1988年から行っている(「新

疆 日 報」1996.4.11、1996.8.27、1996.9.2、1997.6.9、2000.7.17、2000.7.25、2002.7.8、2003.3.4、2008.5.20、2008.6.27、2009.12.7、「ウルムチ晩報」1999.8.29、2008.5.16、「新疆経済報」2000.7.25、2008.5.16、2008.6.25）。ウルムチ対外交交易会(2011年より、国家レベルの「亜欧博覧会」に格上げ予定)には第1回から度々視察団を派遣し、人民劇場で日本側の中国琵琶・日本舞踊・三味線・民謡・ピアノなどと新疆交響楽団・歌舞団との日中音楽会も開催した。一部は各団体との共同である。

9. 各種講演・写真展・出版

相互理解促進のために、文化財保護研究活動や日本・新疆の紹介を日中両国で、1989年より行っている(「新疆日報」1989.8.4、1999.7.2、2000.7.23、2002.3.26、2002.3.27、2003.8.15、2006.1.23、「ウルムチ晩報」1989.8.4、1999.7.3、1999.12.22、「読売新聞」1995.10.3、「中国新聞網」・「搜狐」2010.7.19、「中華人民共和国文化部」電子版2010.7.23、「新華網」2010.8.9、「新民晩報」日本版2010.8.16)。中国では新疆政府・新疆生産建設兵団・新疆文化庁・新疆文物局・新疆博物館・新疆大学・新疆師範大学・新疆財經大学・ウルムチ市政府・北京大学・清華大学・南開大学・同済大学・天津美術大学・大連大学・北京工業大学・中国歴史博物館などにおいてである。中国の大学では「自分自身のために努力し、故郷のために中国のために、そして世界のために尽力できる人材に成長して欲しい。」と締めくくっている。日本でも浄土宗・臨済宗・佛大・京都大学・奈良女子大学などでの各種行事やNHK「新シルクロード展」会場・東京中国文化センター・南無の会・日本僑報社などでの講演、「李学亮」写真展開催、『王恩茂日記』(日本語版)、『鉄木ル・達瓦買提詩集』(日本語版)、『シルクロードの点と線』、『シルクロード新疆の旅』・「新疆紹介ハガキセット」などの出版といった形で数多く行っている。

10. 各種仲介

外国との交渉はなにかと煩雑であるため、1990年から経済・教育・メディアなど多方面からの依頼に応じて仲介を行っている。伊藤忠商事と新

疆政府との総合契約、野村證券と新疆政府との合作促進、奈良女子大学と新疆大学との学術交流協定、芝浦工業大学と新疆工学院との自然エネルギー活用実験・登山項目、守口東高校とウルムチ第一高级中学との姉妹提携、NHKや東海テレビ・テレビ東京と新疆政府外事弁公室・新疆文物局との撮影契約、NHKと新疆文物局との展示会契約、総合地球環境学研究所と新疆考古研との共同研究契約など多数である（「日本経済新聞」1993.7.27、1994.9.2、1995.4.24、「新疆日報」1994.9.2、1994.9.3、1995.12.26、1996.4.13、1997.7.28、2002.3.27、「ウルムチ晩報」1995.12.26、1997.7.27、「日刊工業新聞」1997.11.11、「朝日新聞」・「毎日新聞」・「奈良新聞」2002.4.2、「読売新聞」2002.4.4、「中国新闻网」2010.5.12、「中国网」2010.5.14）。

違法調査で拘束された邦人教授らのお詫びの仲介も行ったのは前述のとおりである。このような各種仲介でも国際運賃はじめ諸費用も自己負担し、謝礼なども一切辞退した。ビジネスでなくボランティアであるからである。

すべてが順調であったわけではない。新疆政府の北海道と姉妹地区提携したいとの要請をうけ、当時の佐藤観樹自治大臣・横路孝弘北海道知事らと大臣室で交渉したが、「遠い、特別な縁がない、道内でその気運がない。」などの理由で実現しなかった（『外国友人中国情』2001）。

11. 各種代表団招聘

なにかと理解されていない日本を知ってもらうには、「百聞は一見にしかず」と、1993年から新疆政府の三代にわたる主席代表団やウルムチ市書記・市長代表団など政治・行政・文化・経済・教育など各方面の代表団多数を招聘し、大きな効果をあげている（「奈良日日新聞」1995.4.23、「人民日報」日本電子版2008.8.4）。一部は関係団体と共同での招聘。以上5項目が相互理解促進関連である。

6. 国際協力とその意義

1. 国際協力の必要性

世界には約200の国家があり、それ以上の民族がいる。それぞれの歴史・

体制・制度・文化・言語などは異なる。国益は異なり主張はぶつかり合う。相互理解はたいへん困難であり、だからこそ相互理解の努力が必要である。さらに日本は世界トップレベルの国家として、筆者が微力を捧げてきた文化遺産調査保護研究・人材育成のほか貧困・医療・環境・人口・ジェンダー・文化・教育・研究・資源・科学・工業・農業・漁業・経済・政治・紛争など多分野で世界に貢献、リードする立場にある。相互理解促進と多分野貢献(資金のみでなく人的・技術面なども含めて)に国際協力の必要性がある。国家のみならず企業や個人レベルでも必要な「共生」・「共育」・「循環型」活動である。

21世紀は国際協力の世紀ともいえる。文明が急速に発展し、各国の相互依存が日に日に濃密になった結果である。いまや世界70億人は運命共同体になったのである。本稿最終校正中の2011年3月11日、「東日本大震災」が発生、大惨事は瞬時に世界各国で報道され、同盟国アメリカの大部隊や中国など130以上の国・地域・機関から支援の手がさしのべられた。日本のこれまでの国際貢献への「恩返し」と明言した国も多い。原発からの放射性物質は気流によって地球をまわり、各国の原発政策に大きな影響を与え、多くの外国人が帰国した。また日本製部品不足により各国で生産ラインが停止するなどの影響が出た。これらも世界が運命共同体であることを示している。ちなみに、筆者は大震災直後の訪中では、福島県産食品を土産として持参し、その安全性を訴えた。

国際協力は20世紀中葉から言われ始めた。筆者も1982年初めて新疆を訪れたころは、国際協力といった概念は乏しかったが、各種貢献を続けるうちに徐々に公共外交といった考えが形成されてきた。

国際貢献を続けていると、おのずと国力の影響を受けていると実感する。海洋大国として、先輩たちが世界に飛躍した時代が何度もあった。しかし、「江戸時代鎖国DNA」上の大戦後呪縛、この約20年の各種停滞などにより、日本人が内向きになりつつある。国家の存続と繁栄によって支えられている国民の生活向上のためにも外向きになり、世界で活躍する人がさらに増えることを望むひとりである。本稿で活動を淡々と長々と記録してきたのは、国際協力実践に少しでも参考になればと願うからでもある。日本では

貢献をかくすことが「美德」とされる風潮があるが、世界はそうではない。日本国・日本人が世界各国で実践しつづけている国際貢献は世界の人々にどれだけ知られているであろうか。いや日本人でさえ殆ど知らない。国も団体も個人も、もっと堂々と発信してこそ、世界から信頼をえることが出来るといえよう。

我が国は国際協力面でも先進的地位を占めている。税金からの政府開発援助(ODA)といった資金面ばかりでなく、国際協力機構(JICA)や国際協力銀行・青年海外協力隊・シニア海外ボランティアなど組織や制度も整っている。また多くのNGOや企業・個人が活動されていることは嬉しいかぎりだ。「国際協力学」も認知されつつあるようだ⁽⁹²⁾。

個人としても、概念や常識・前例・人の目といったものに囚われることなく、オリジナリティーあふれた生き方、自分の人生を自分色に染め上げることが幸せの源泉といえよう。

成熟期にはいった日本が「成熟成長」をつづけていくためにも、国際協力が求められている。国家や外交官だけでなく、政治家や公務員はもとより観光客・ビジネスパーソン・研究者・留学生・一般市民などすべての人が公共外交の一翼を担っていることを意識し自覚ある言動が必要とされるのが21世紀であろう。

国際協力は日本力を高め、国益に直結する活動であり、平和を維持し戦争を抑止し、人類の安寧に寄与する活動である。明治維新、戦後復興で一大発展をとげた我が国が、昨今の混濁を脱し、さらに飛躍するためのひとつのキーワードが国際協力ではないだろうか。国力は地政力・面積力(海洋をふくむ)・歴史力・人口力・人材力・資源力・政治力・外交力・経済力・軍事力・文化力・広報力などの総合力であるが、「公共外交力」・「国際協助力」といった概念も提起したい。ODAが減りつづけていることは残念でならない。増額を期待したい。当然ながら、時代の変化におうじて、戦略的対応が必要なことは言をまたない。

2. 民族・体制・文化・思想・言語などの壁を乗り越えて

日中間では言語が異なる。その壁を乗り越えて、国際貢献を続けてきた

が、考えてみれば日中双方は言語だけでなく、民族・体制・文化・思想などの壁を乗り越えてきたといえる。第一ステップは立場の違いを認めあったことであり、第二ステップは敬いあい感謝しあったことである。

この部分は2010年10月中国大連大学で同大学主催第四回「中日韓日本語文化研究国際フォーラム」の間をぬって記述しているが、前月の尖閣諸島沖での中国漁船と海上保安庁巡視船の衝突事件後に発生した種々の問題、例えば反日デモなどで「日中間波高し」である。筆者が英領香港(当時)と中国を隔てる鉄橋を歩いて渡り、着剣した人民解放軍兵士に監視されながら中国を初訪問した1972年以来、度々反日デモがあった。そのたび毎に日中関係は冷え込んだ。そのような両国関係のなか、国際協力を長年にわたり継続できたのは、日中双方が活動の意義・目的・目標を明確化したからであり、基本理念を明確化したからであり、困難をどうにか克服したからであり、外交力と人間力をそれなりに持ちえたからであろう。

3. 意義・目的・目標の明確化

生態系や環境・文化遺産の調査保護研究は、人類そのものの保護につながる重要項目でもあり、当然の責務である。特に保護は研究に優先する。研究は後世ほど進むが、消失した文化財は二度と戻らない⁽⁹³⁾。

日中間でいえば、「日中友好」というスローガンが度々登場すること自体が、日中関係が成熟していないことを示していよう。世界中の国々が友好的であるのは当然のことであり、あえて日中友好をうたわねばならないのはある意味では悲しいことといえよう。また日中友好を冠した団体が各地に多数存在することも同様だ。「日中友好」を基礎として、第二段階「日中相互理解」へ、そして第三段階「日中共同」への進化を双方が努力する時期であろう。

筆者が行ってきた活動において、日中双方はその意義・目的・目標を覚書や協議書に明記するなどの方法を通じて明確化してきた。

4. 基本理念の明確化－友好・共同・安全・高質・節約－

国際活動に衝突はつきもの、その時にもどる原点が必要である。それが

基本理念。日中政府間でも「戦略的互惠関係」が掲げられている。新疆での国際協力の主事業である沙漠での考古活動において、日中双方は「友好・共同・安全・高質・節約」の五大精神を掲げた。友好と共同は説明を要しない。沙漠活動は危険がともなう、死に至った例も記録されている。我々もルート開発不能による緊急露営、砂嵐に遭遇、ラクダからの落下による脳震盪や骨折、病人発生、車輛火災といった突発事故を度々経験している。普段は各自の判断で行動していても緊急時はリーダーの指揮に従う命令系統の一本化が安全確保の要点である。

世界的文化遺産に相応しい高水準の保護研究が必要であり、日中双方の各分野の第一線専門家を組織した。筆者自身が研究者でなく調査保護研究事業の推進者であるので、この点には特に心がけた。

日本側でいえば、井ノ口泰淳・田辺昭三・真田康道・長澤和俊・堀尾宝・米田文孝・古川雅英・貝柄徹・伊東隆夫・浅岡俊夫・田中清美・吉崎伸・近藤知子・孫躍新・高妻洋成・米川仁一・中島皆夫・吉田恵二・加藤里美・高橋照彦・小野田豪介・市川良文・蓮池利隆・中島皆夫・坂本和子・杉本和樹・佐藤右文・石田志朗・内田賢二・井上正・安藤佳香・切畑健・沢田正昭・岡岩太郎・辻本与志一・富澤千砂子をはじめとする方々である。

中国側も同様で、韓翔・岳峰・盛春寿・李軍・王炳華・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇・張玉忠・劉国瑞・張鉄男・沙比提・阿合買提・阿合買提・熱西提・劉玉生・佟文康・李肖・劉文鎖・劉宇生・伊力・吳勇・阮秋榮・王經奎・李季・王軍・楊林・徐萃芳・林梅村・王邦維・任式楠・孟凡人・王亜蓉・巫新華・齊東方・楊晶・楊逸疇・王守春・王邦維・景愛・劉樹人・鉄付徳・馬世長・呂宗宜をはじめとする方々である。感謝しきれない。

費用的にも環境的にも節約を心がけた。ただし意思疎通のための潤滑油的部分は削らなかつた。大小様々な衝突があつた。そのたびごとに日中双方は基本理念にもどり解決してきた。



図49 毎夕、日中双方で打合せ



図50 疲れをいやす夕食も立ったまま

5. 困難の克服

日中双方の民族・歴史・体制・制度・文化・言語などの違いの乗り越えがまずあった。沙漠という無人地帯での大規模調査であり、食糧や調査機材などを沙漠車やラクダで運び込まねばならない。天候上調査時期が限られ、10～11月の一ヵ月ほどしか適しておらず、長年を必要とした。生活面でいえば、陽が昇るころ起き(時に零下15度にも)前夜の残りの羊井やお粥を掻き込み、班ごとに徒歩やラクダで現場へ向かい、分布調査や測量・発掘・研究、炎天下(時に30数度にも)で硬いナンとソーセージ・リングをわずかな水で流しこみ、一休みして夕方まで活動継続、夕食はまた羊井か羊ラーメン(後半には余裕ができてビールやサッカーボール・トランプ・ラジオも持ち込んだ)、その後に打合せと実測・資料整理といった日々。狭いテントでの雑魚寝、風呂もシャワーもない約3週間…。満天の星をながめつつ、テントに入らず寝るといった楽しいこともあるが、強靱な精神力・体力と協調力がないと耐えられない。

多領域の優れた英知の組織化は一大学で不可能であり、多くの大学・研究機関・専門企業からの参加をえた。その調整にも労力を要した。調査や保護・研究・報告書・シンポジウムなどのために多額資金が必要であり、日本側費用については文部科学省助成と佛大から援助もいただいたが、殆どは私財と借入金でやりくりした。

6. 外交力と人間力

研究者やメディア関係者などが許可も得ず、調査研究や撮影している例

を度々見聞きする。あるいは楼蘭やニヤ・ダンダンウイリクなどへ無断進入する研究者や観光客もいると聞く。その一部は本文と注に記載したが、彼らの多くは「相手側中国人が許可を取得しているものと思っていた。」などと釈明する。しかし結果的に当人や所属機関そして日本の評判を落とすことになる。また研究成果や撮影資料を持ち出すだけの一方的行為では、20世紀初頭の文化財持ち出しと大差ない。

我々日中双方はそれぞれの主権・法規・文化を相互尊重した。前述のように、全ての段階で文書による正式許可を取得し覚書や協議書を交わし実施してきた。中でも「中華人民共和国考古涉外工作管理弁法」(通称：国家文物局令第1号、1990年12月31日国务院批准・1991年2月22日施行)は度々熟読し遵守した。

外交とは「握手しながら主張する」ことであり、実践した。本稿に調査とは一見関係ないと思われる指導者たちとの会見が多く登場するのは、中国は共産党の支持と指示のもとすべてが動いており、指導者とのコミュニケーションは不可欠であり、これも重要と取り組んできたからである(江沢民・胡錦濤両国家主席や習近平国家副主席らの訪日時にはレセプションにも参加)。会見は十分な準備とイメージトレーニングをへて臨み、胸を張り笑顔を心がけ、メモを見るようなことはしなかった。細かい交渉以外は未熟ながら中国語で対応した。会食も外交の重要舞台のひとつであるので、積極的に取り組んだ。

全ての活動は表面的・一時的・資金的な付き合いではなく、人と人との付き合いを重視し、至誠・感謝・縁・義理・人情といった琴線にふれる交流が続けてきた。このような実践が実績を生み出し、継続が信頼へとつながった。口や頭だけでなく、心の交流こそ重要である。新疆での29年の間に、相手方は幾代にわたって交代した。トップの中共新疆委員会書記は王恩茂・宋漢良・王樂泉・張春賢へ四代、新疆政府主席は鉄木尔・達瓦買提・阿不来提・阿不都熱西提・司馬義・鉄力瓦尔地・努尔・白克力へ四代、外事弁公室や文化庁・文物局・考古研・档案局・新疆大学・ウルムチ市政府なども同様である。

このように人が交代しても友情に近いかたちで交流が続けてこられたの

は、決してその場限りの「裏交渉」をしなかったからであり、「特殊な」関係にならなかったからである。もしそうになっていたら人事異動したのち、その機関との関係は断絶していたことであろう。

交渉は厳しい時がある、そんな場合も笑いを忘れなかった。一例をあげると、前述したダンダンウイリク壁画保護計画審議会では中国側が主として計画を説明したが、初対面の人も多く午前中は厳しい雰囲気。午後、筆者が「中華人民共和国の丹丹烏里克(ダンダンウイリク)の女王である王丹華委員長から審査を受けることは光栄である。」と発言し流れが変わった。

おわりに — 使命として

キジル千仏洞修復からニヤ遺跡調査へ、そしてダンダンウイリク遺跡プロジェクトへ。関連事業を含めて豊富な成果をあげることができた。この機会に永年にわたりご指導ご協力いただいた関係機関と関係各位に心からの感謝を改めて表わすものである。なかでも沙漠での過酷な現地調査、そしてウルムチでの保護研究に参加いただいた隊員諸氏とその所属機関には深謝している。参加者氏名は調査年度ごとに記載したので、ここでは機関名を記し感謝としたい。

日本側：佛大・龍谷大学・京都造形芸術大学・国立歴史民俗博物館・奈良国立文化財研究所・科学技術庁・早稲田大学・京都大学・国学院大学・関西大学・関西外国語大学・京都市埋蔵文化財研究所・大阪市文化財協会・長岡京市埋蔵文化財センター・橿原考古学研究所・古代オリエント博物館・六甲山麓遺跡調査会・大手前大学・寺尾商会・ツルカメコーポレーション・飯田市美術博物館・国士舘大学・奈良女子大学・岡墨光堂・アートブリザヴェーションサービス・六法美術・奈良大学など(順不同)。

中国側：新疆政府・新疆文化庁・新疆文物局・新疆考古研・新疆博物館・和田地区文物管理所・国家文物局・北京大学・華東師範大学・中国科学院・中国社会科学院・中国文物研究所・中国国家博物館・亀茲石窟研究所・中国石油東方公司等(順不同)。

また佛大の水谷幸正・伊藤唯真・高橋弘次・中井真孝・福原隆善・山極

伸之・真田康道・杉本憲司・小野田俊蔵・八木透・門田誠一・安藤佳香・仁科昌瑞・大北裕生・本庄良英・梅田巧・館憲雄・高井喜成・小原洋子・樹下降興・本多廣賢・久米良慶・松村公榮・小幡俊成・津原重久諸氏には格別の尽力をいただき、本稿では斉藤利彦ポストドクターに教示いただいた。日本に長く留学された孫躍新・周培彦夫妻には各種交渉時に貴重な役割を果たしていただいた。微力ながら物心両面を国際貢献に投じた筆者を全面的に支持し支援してくれた同志小島聡子。合わせて感謝したい。

前述の調査保護研究事業には、このように多くの方々の膨大な熱意・時間・英知・資金が投入された。これらの文化遺産はやがて「世界遺産」に登録されることであろう。新疆文物局は既に各種活動を開始している。

2006年8月、国家文物局と世界遺産センターは、トルファンで「シルクロード」申請予備会議を開催した。中国のほかにカザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・ウズベキスタンなども参加し、行動計画を決議し、国をまたぐ共同申請活動が開始された。

2007年には国家文物局が6省区48カ所の申請を決定。新疆ではキジル千仏洞・ニヤ遺跡をはじめとして、樓蘭遺跡・交河故城・高昌故城とアスターナ墓地・スバシ故城・クムトラ千仏洞・シムセム千仏洞・ベゼクリク千仏洞など12カ所である⁽⁹⁴⁾。現在、中国各地で保護処置や環境整備・人材育成などの準備活動が順調に進められているが、国によっては遅れもあるようだ。国家文物局の計画では、2012年夏に開催予定の第36回世界遺産委員会での承認を目指している。筆者が、その保護研究に全力投入してきたキジル・ニヤが世界遺産に登録されれば、まさに至福の時である。

2010年7月、丹羽宇一郎駐中国大使は、東京での新旧大使歓送レセプションで「『愛国親中』、『愛国親日』の立場で新しい日中関係構築に身命を賭したい。」と挨拶され満場の拍手を呼んだ。伊藤忠商事社長・会長と功なり名を遂げられた方が新たに歩みだされる使命観に胸をうたれた。筆者後継の松本孝作社長社葬では弔辞を奉読いただくなど各段の厚情を賜った方でもある。内定時の首相や外相がはやくも代わる不安定な日本政治、赴任直後の尖閣諸島沖での漁船衝突などでご苦労されている。ご健闘を祈るばかりである。

筆者も親中派と目されているようであるが、日本人として当然ながらそのベースは愛国である。



図51 多くの方々が力を出し合って



図52 測量技師・ラクダ使い・コックさんも



図53 沙漠でもたくましく生き抜く胡楊



図54 進入をはばむ大沙漠が遺跡を守っている

不思議なご縁に心から感謝している。後半生の殆どを物心両面にわたって投じたが、悔いはない。今後も「使命」として新疆ウイグル自治区を中心に、文化遺産保護研究、日中間相互理解促進と人材育成に老残微力をささげる決意である。和田茂樹共同通信次長から「活動の幅がひろくどう表現したらよいのか。」と問われて、「国際貢献手弁当長期実践家とでも。」と答えた⁽⁹⁵⁾。関係各位の更なるご指導ご協力をお願いするしだいである。

2011年は筆者にとって今や第二の故郷となった新疆訪問30周年の年にあたる。この間、提供しつづけてきたのは「至誠」である。新疆各族の皆さんにはささやかな喜びを提供したにすぎないが、筆者は大きな幸せを頂戴した。輝かしい成果をともにあげてきた日中双方の方々を誇りに思う。

陽はのほり陽はしずみ花がさき花がちり夏がきて冬がきて
嗚呼新疆30年迷い迷いときに悟りすべてのすべてありがとう
骨はタクラマカン沙漠に埋める。合掌

(人名の初出については必要に応じて当時の役職を記した。どのような立場の人が関わったかを記録として残すためである。敬称は略した。中国人名表記については便宜的に類似する日本漢字を用いた。ウイグル族名表記は中国での表記にしがたい、名と姓(父名)の間に半角中グロいりで記した。地名の日本語表記については一般的なものを記し、必要に応じて中国語でも記した。写真の大半は筆者撮影、ほかの撮影者名は図版一覧に記入した。写真などは必ずしも当該年度に掲載していない。本稿執筆にあたって浅岡俊夫・田中清美・南本権治郎・盛春寿・李軍・于志勇・甘偉・焦健・楊雯・楊新才・趙新利各氏に一部の情報を提供いただいたことを記し感謝としたい。本稿は2010年12月末時点の記録である。スペースの関係から一部は割愛している。資料もれや筆者の記憶ちがいなどにより誤りもあると思われる、日中双方隊員・関係者の叱正をお願いしたい。)

注：

1. 拙稿「調査の契機と経過」『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻)法蔵館1996、「調査の経緯」『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二巻)中村印刷1999、「日中共同ニヤ遺跡学術調査の概要」『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』東方出版2002、「田辺御大と日中共同ニヤ遺跡学術調査」『田辺昭三先生・古稀記念論文集』真陽社2002、「ダンダンウイリク遺跡出土仏教壁画保護研究についてーその1～5ー」『アジア宗教文化情報研究所報』(創刊号～第5号)佛大アジア宗教文化情報研究所2004～2006、「シルクロードに魅せられて」『新シルクロード展・幻の都楼蘭から永遠の都西安へ』NHK・産経新聞社はか2005、「キジル千仏洞からニヤ・ダンダンウイリク遺跡へ」『新シルクロード』(3)日本放送出版協会2005、「日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロジェクト概要」『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロジェクト国際シンポジウム発表要旨』佛大ニヤ機構2005、「調査の経緯」『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三巻)真陽社2007、「日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロジェクト概要」『日中・中日共同ダンダン

『ウイリク遺跡学術調査報告書』真陽社2007、「以保護研究世界性文化遺産為使命」『漢唐西域考古：尼雅－丹丹烏里克國際學術研討會會議論文提要』新疆考古研2009などである。

2. 当時は清末期から中華民国建国期にあたり新疆一帯は政治的混乱をていしていた。旧ロシアは不凍港をもとめて南下戦略をとり、当時インドを支配していたイギリスは北上戦略をとり、その接点が新疆であり、カシュ（当時カシュガル）には両国の領事館がおかれた。南京政府湖南の軍署在職中に中央財政部の命により新疆を調査した第87師長・謝彬の『新疆事情』外務省調査部1934には、1917年当時の状況として、「庫車（クチャ）…英商40余戸、露商60余戸、英露ハ各々商官アリ、相互間ノ交渉ニハ時々困難ヲ来スコトアリ。英使…清廷ニ喀什噶爾（カシュガル）ヲ割キ立テテ藩封ト為サンコトヲ請フ…。和闐（ホータン）…全県ニテ英国籍人400余人露国籍人300人、英露ハ各々商官アリテ常に困難ナル交渉多シ。」、ウルムチでの宴会では「同席ニ日本人佐田繁治アリ、国際探偵ナリ…。」との記述（pp.395・496・506・630）もある。日本からも1905～07年にかけて林出賢次郎や波多野養作が外務省から一帯の視察に派遣されている。また日野強陸軍少佐が「その筋より新疆視察の内命を受け」、1906年9月7日東京を出発し翌年12月25日「帰京復命」するまで、調査している。日野は大谷光瑞師一行と一部行程を共にし、大谷師より駐カシュガル英国領事のジョージ・マカートニなどへの紹介状を得るとともにカメラ・時計を貸与されている。それらに対して、「帰京復命」する前日、京都の西本願寺に大谷師を訪ねて謝意を述べている。（日野強『伊犁紀行』復刻版、芙蓉書房 1973, pp.35・58-59・279）。金子民雄『西域探検の世紀』岩波書店2002, p.iiiに「この微妙な時期がまた西域探検の最盛期にも当たっていたのである。一般に情報・外交戦と探検調査とはまったく無関係に見えるが、実はお互い密接な関わりを持っていた。探検は純粋な学問的研究であった半面、高度な情報収集作戦でもあったのである。だからこそ各国は莫大な探検資金を惜しみなく出したのだった。」と記されているように、各国の探検隊と「領土争奪諜報戦」とは、複雑な関係を有していたともいえよう。
3. 1996年、中国・ロシア・カザフスタン・キルギスタン・タジキスタンの五カ国で始められた上海ファイブが発展したもので、現在ではウズベキスタンが加わり、オブザーバーとしてモンゴル・インド・パキスタン・イランも参加するほか、対話パートナーなどとして数カ国が名を連ねている。共同

軍事演習も実施されている。

4. 筆者は、これまでの人脈を活かし、「新シルクロード」とその関連番組や「新シルクロード展」の新疆の党・政府・文物局などとの各種折衝を全面的に支援した。「新シルクロード」およびその集約番組は2005年以降もNHKおよび他局で度々放送され、2011年にも放送予定があると聞いている。
5. 1978年、鄧小平中国共産党中央委員会副主席の日本視察をひとつの契機として開始された改革開放政策は、文化大革命などで疲弊していた中国を大発展へと導いた。「中国青年報」2008.12.23などが「日本がなかったら改革開放は違ったものに。」と報じた。
6. ウルムチ騒乱直後より新疆と外部の通信は制限され、電話・FAXやインターネットなども遮断されたが、徐々に緩和され、2010年5月中旬には全面的に回復した。ちなみにその翌日が注89のネット投票開始日であった。不思議な縁である。
7. 2010年4月24日、ウルムチの新疆人民会堂で新疆全区幹部大会が開催された。李源潮中央政治局委員・中央組織部長が王楽泉中共新疆委員会書記の中央政法委員会副書記への転任と張春賢(前湖南省書記)の中共新疆委員会書記就任を発表し、習近平国家副主席が王楽泉の功績をたたえ、張春賢の略歴と能力を紹介した。王楽泉は決定受け入れと長年の協力へ感謝の挨拶を行った。張春賢書記は王楽泉の実績を肯定し、中央新疆工作会議により全面的な新疆支援策がとられ、新疆はまさに大建設・大開放・大発展の歴史的機会を迎える、と挨拶した。会議には新疆の主要責任者すべてが出席した(「新疆日報」・「新疆経済報」・「天山网」2010.5.25)。なお、中国は実質一党体制であり、主要機関には中国共産党委員会がおかれ、そのトップである書記がその機関を掌握している。少数民族地区である新疆では、中共新疆委員会の書記は漢族、ウイグル族の新疆政府主席は副書記といった体制がとられている。他の組織においても同様である。
8. 玄奘・弁機『玄奘三蔵の旅・大唐西域記』(1・水谷真成訳)平凡社1983,pp.15-16
9. 拙稿「西域亀茲における仏教滅亡についての一考察」『佛大通信教育学部卒業論文集』(第24号) 佛大通信教育学部1990,pp.76-85
10. 友好商社は日中国交回復前から中国側が設けた日本側貿易窓口、当時すべての取引はここを通す必要があった。
11. 麦積山をふくめて五大石窟と称されることもある。また四大石窟にキジル

を含めない例もある。キジル千仏洞は行政区域としては阿克蘇地区拜城県克孜尔郷に属している。

12. 平凡社・中国文物出版社編『中国石窟キジル石窟』(第1巻)平凡社1983p.162では236窟としている。新疆政府により2010年3月キジル千仏洞に建立された石碑には中国語で「谷西区・谷内区・谷東区・後山区に分かれ、編號されている窟は269(保存活動中に発見されたりした窟を含めて)であり、3世紀から造営され始め8~9世紀には衰退に向かった、中国四大石窟である。」(拙訳)などと刻まれている。徐永明新疆亀茲研究院第二副院長によれば石窟総数は2010年8月時点で336という。
13. 王恩茂(1913~2001): 江西省生まれ、王震(後に国務院副総理・国家副主席)らとともに長征に参加し、新疆を解放した人民解放軍中將。その後も新疆にとどまり、王震中共中央新疆分局書記後任の中共新疆委員会書記として新疆発展の基礎を築いた。新疆軍区司令員・中共新疆委員会書記(1952~文革・1981~85)・吉林省第一書記・全国政治協商会議副主席などを歴任。王恩茂『王恩茂日記』(全5巻)中央文献出版社1995は長征を具体的に記録している。筆者は同日記日本語版(全5巻・約185万字)を共同刊行し、各研究機関などへ寄贈した。王副主席とは10回ほど会見するとともに書簡も度々いただいた。キジル修復工事用車両の輸入関税(180%)も氏の力で無税としていただいた。天安門事件の厳戒令が解除される前夜の宴席で、そのことを短波放送で知った筆者が「今日は良い日だ、明日解除される。」と挨拶すると、他の新疆側出席者は「エッ!」という顔であったが、氏だけは「ウン」とうなずかれた。病床にあった氏を北京の自宅や解放軍301病院に見舞い、逆に暖かい言葉をかけて頂いたことが昨日のように思い出される。4月18日北京での告別式には、江沢民・李鵬・朱鎔基・李瑞環・胡錦涛らの供花が捧げられ、李鵬・胡錦涛・温家宝・曾慶紅・王樂泉・鉄木尔・達瓦買提・阿不来提・阿不都熱西提ら中国中央・新疆の要人多数が参列し、同月25日にはウルムチで新疆の党・軍・政の指導者・市民多数が参列して追悼式が行われた(『新疆日報』2001.4.19、2001.4.26)。外国人の参列は認められず、自宅へ弔問した。ご冥福を祈る。氏が外国からの初協力受け入れを決断されなかったら、筆者の活動は実現していなかったと思われる。感謝するばかりである。
14. 大谷探検隊は1902年から1914年の間に3次にわたりキジルをふくむ広範囲で活動し、文化財を持出している。それらは龍谷大学・東京国立博物館・平山郁夫シルクロード美術館・中国北京図書館・旅順博物館・韓国国立中央

博物館や個人などに収蔵されている。一部は競売や販売されたという(藤枝晃「大谷コレクションの現状」『佛教東漸・祇園精舎から飛鳥まで』思文閣出版1991,p.230)。なお、平山郁夫シルクロード美術館にはダンダンウイリク遺跡出土壁画も収蔵されている。

15. 諸外国探検隊が現地人から購入したりしたものも含めて、中国側は外国探検隊の文化財持ち出しを「盗掘」と厳しく言及している。その論調は年月をへて穏やかになりつつあるが基本的には変わっていない。時代の変化により各国から外国隊により持出された文化財返還が世界的話題となりつつあり、2010年4月にはそれら文化財の返還を求める国際会議がカイロで開催され、中国・エジプト・ギリシャ・イタリアなど約20カ国が参加した(「読売新聞」2010.4.8)。
16. 協議書には経過・目的・方法・目標・期限・資料・記念碑・贈呈方法などが詳細に記されている。
17. 本文記載以外の役員は、副会長として五百木茂(三菱商事副社長)・大岡昇(大林組副社長)・奥住正道(奥住マネジメント研究所所長)・川崎元雄(甲南大学元学長)・木村英一(大阪市立大学前学長)・栗原徹(日本信販専務)・小山勇(中日新聞常務)・須賀武(野村證券副社長)・鈴木充(東海テレビ放送会長)・中島茂清(全国中小企業団体中央会前副会長)・西川俊男(ユニー社長)・野崎辰男(安田火災海上保険副社長)・林寛子(扇千景・参議院議員)・松原哲明(臨濟宗妙心寺派龍源寺住職)・安田暎胤(薬師寺執事長)・横瀬昌夫(住友金属鉱山専務)・渡辺信淳(京都大学名誉教授)・顧問として神田延祐(三和銀行副頭取)・奈良久彌(三菱銀行副頭取)・森田武(三井銀行副頭取)、理事として遠藤さち子(監事・日本火災総務課)・杉浦実郎(総務・プラス社長)・高木康成(会計・新日本法規出版副部長)・堀尾宝(中国渉外・寺尾商会部長)・村上斌(新東通信部長)の方々であった(社名・役職は当時、日中友好キジル千仏洞修復保存協力会『日中友好キジル千仏洞修復保存協賛金のお願い』1987、拙著『シルクロードの点と線』プラス1988,pp.262-263)。記して感謝を表したい。すでに故人となられた方も多い。ご冥福を祈る。
18. 前掲17『日中友好キジル千仏洞修復保存協賛金のお願い』。募金パンフレットには、中山太郎名誉顧問・上村晃史会長の「ご喜捨のお願い」、王恩茂副主席の「歓迎のことば」、役員一覧、シルクロード概念図、キジル千仏洞の紹介、修復保存計画の概要、募金計画(目標：1億円・一口：1万円・期間：1989年4月まで・振り込み口座・連絡先)などと多くのカラー写真が掲載さ

れている。また前掲17『シルクロードの点と線』pp.259-274でも同様に記載し募金を呼びかけた。

19. 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」1988.5.31。中間報告には、中山太郎名誉顧問の「新しい日中友好の歴史」、上村晃史会長の「真の意味での国際化を!」、贈呈団団長の松原哲明協力会副会長の「助け合いの心を持って」、黄宝璋新疆副主席の「中日両国人民の深く厚い友誼に乾杯!」、阿不列孜・達吾提新疆文化庁庁長の「心より感謝しております」と日中双方の挨拶、工事用車両8台(この購入・輸出は伊藤忠商事と三菱商事にお世話いただいた)と現金合わせて6,201万円を贈呈した様子、贈呈式などの写真、贈呈団参加の皆様の感動の声、工事第一工程まもなく開始情報、多くの新聞報道、中間報告記者発表の模様、引き続きご協力をと募金呼びかけなどが記載されている。
20. 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」1989.5.26。最終報告には、中山太郎名誉顧問の「ご挨拶」、上村晃史会長の「文化史へ刻む新たな1ページ」、鉄木尔・達瓦買提新疆主席の「文化遺産を後世に」、買買提祖農・買買提艾力新疆文化庁庁長の「多くの資金援助ありがとうございます」と日中双方の挨拶、第2次贈呈として4,343万円を5月19日に送金、贈呈式を8月下旬に行う、参加希望者は申込を、第1次贈呈で工事は順調進展中、募金いただいた方からのお便り、協会活動記録、募金いただいた3,000を超える個人と企業名およびそれぞれの金額、会計報告、協力会一同からの感謝、役員一覧などが記載されている。
21. 贈呈金額105,441,173円は、募金額と利息の合計120,914,899円から募金経費(募金パンフレット・礼状・郵送料・印鑑・募金者へのテレホンカード・記念碑芳名板・報告書)15,473,726円を差し引いた全額である。当時の日中関係の中、一端刷りあがった中山太郎会長名入りの募金パンフレットを上村晃史会長名に印刷しなおしたためにパンフレット印刷費は二重になっている(前掲20「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」)。
22. 筆者への王恩茂副主席よりの書簡1989.11.4
23. 筆者自身も参観団を組織して贈呈式後や2000年7月・02年7月・03年7月などに新疆政府外事弁公室の劉宇生・劉曉慶や新疆文物局の李軍・甘偉ら各氏の案内で度々訪れている。その都度、同所所長・副所長(院長・副院長)の陳世良・呉宝琛・王建林・王衛東・張国領・趙莉・徐永明やガイドなど所員に温かい配慮をいただいた。徐永明第二副院長の2010年8月時点での説明

- によると観光客が最も多かったのは2007年で60,000人近く、09年は10,000人を上回る程度(ウルムチ騒乱の影響と思われる)、10年は20,000人ほどの見込みとのことであった。
24. 記念碑は建立後すでに20余年経過し、かなり痛んでおり新疆側が移築改修を計画している。
 25. 1986年キジルを盛春寿氏らと初参観し修復保護協力を開始した。その後、ニヤ調査やダンダンウイリク調査の開始時も二人は一緒であり、いずれも大きな成果をあげた。「二人は不思議な縁に結ばれているが、盛局長は益々忙しくなり、小島は益々歳をとり一緒にキジルを訪問するのはこれが最後であろう。」と話し合って、職員用通勤バス寄付を決定した。
 26. MAUREL STEIN『SERINDIA』(Vol. I) OXFORD 1921, p.242、韓翔・王炳華ほか編『尼雅考古資料』新疆社会科学院知青印刷厂 1988, p.前言、林梅村『絲綢之路散記』人民美術出版社 2004, p.66、林梅村『シルクロードと中国古代文明・流沙の記憶をさぐる』日本放送出版協会 2005, p.174-175ほか。ニヤ遺跡は行政区画としては和田地区民丰县に属している。
 27. 南北25kmとは、東京でいえば羽田空港南端から千住新橋までほどに、京都でいえば京都競馬場から貴船神社までほどに相当する。広大な範囲であり、航空測量などが制限されているなか、大小の砂丘やタマリックス堆の間に残る遺構の分布調査や測量・発掘は困難を極める。オーレル・スタイン『中央アジア踏査記』(澤崎順之助訳)白水社1984, p.98にも「その後の調査で判明したところでは、ここに散らばる遺物は南北22キロ以上、東西幅は約7キロの範囲に広がっていたのである。」と記されている。
 28. 覚書にはニヤ・ダンダンウイリク・ラワック・トムシュク・ローチェン各遺跡の共同調査を行う、調査終了後に日本で出土文物展を開催するなど記されている。
 29. ニヤ・ダンダンウイリク・ラワックなどの遺跡を結んで、古代の西域南道ルートとする仮説が定説のように一人歩きしているが、いまだ確証は得られていないと思う。筆者ら隊員は沙漠での調査を通じて、その仮説に対して疑問を抱いている。
 30. MAUREL STEIN『ANCIENT KHOTAN』(Vol.1~2) OXFORD 1907, pp.314-416。ニヤ遺跡を発見したのはスタインと記したが、「発見」とは「まだ知られていなかった物事をはじめて見つけ出す」ことを指すが、ニヤ遺跡は地元の一部では廢墟として知られていた所で、スタインが広く外部に知らせたと

いう意味で、彼が「発見」したとされている。スタイン自身も「木簡の最初の発見者がイブラヒムという人物であることをつきとめた。…《古都の家》を捜し回ったときに掘り出したのだ。…わたしは即刻イブラヒムを一行の案内者に雇うことにした。」と記している(前掲27『中央アジア踏査記』pp.75-76)。イブラヒム(ウイグル族・スタインは「Ibrahim」と『ANCIENT KHOTAN』p.312などで表記)は中国語では「伊不拉辛」などと表記されている。中国側記述では「イブラヒム先導のもとスタインが発見」とか「イブラヒムとスタインが発見」などと記されていることも多い。同様に楼蘭の発見はヘディンであるが、新疆考古研の穆舜英所長は「人々は楼蘭発見の功績はすべてヘディンにあるとしているが、これは公正ではない。なぜなら最初に楼蘭故城を発見したのはロプ地区で雇ったガイドのウイグル族エルデック(艾尔得克)であるからだ。」(中国語・拙訳)と記している(『神秘的古城・楼蘭』新疆人民出版社1987, pp.29・32)。古来より、「宝探し屋」は伝統的商売ともいえ、偽造品を含めて売買されていた。前掲2『新疆事情』pp.538-539には、「先年土人ノ其ノ地ニ於テ金條、銀器及ヒ其ノ他ノ古物ヲ発掘セルモノ甚タ多ク、其ノ多クハ英国人司徳訥(スタイン)ノ買ヒ取りテ持チ去ル所トナレリ。」とある。筆者へも中国や日本で売込みがあったが、一切取り合わなかった。分散を防ぐためとか研究のためとかと理由をつけて購入している人や機関を見かけるが、盗掘の一端を担ぐ行為と考えるからである。スタインは各種著で、この遺跡を「NIYA SITE」(ニヤ遺跡)と呼称し、遺構番号を「NI・NV・NX」(ダングンウイリクも同様で「DXⅢ」など)などとしている(本稿ではN1・N5・N10などとした)。当時のニヤオアシスからニヤ河沿いに北上したことから、ニヤ遺跡としたと思われる。このことが、現在に至るまでニヤオアシス(現民豊)とニヤ遺跡を混同させる一因になったようだ。また、『大唐西域記』記載の「尼壤城」(泥壤城と記載本も)をニヤ遺跡とする説もあるようだが、これもスタインが類似する「ニヤ遺跡」と命名したことにも影響を受けているように思われる。敬虔な仏教徒である玄奘三蔵の旅行記『大唐西域記』に「ニヤ遺跡」の中心に位置する仏塔の記述がないことや現地調査などから、筆者ら日中調査隊員の多くは「尼壤城」は現在の民豊オアシス周辺ではないかと考えている。水谷真成本には「ニヤ城」と訳出されている。

31. 前掲30『ANCIENT KHOTAN』、前掲26『SERINDIA』、M. AUREL STEIN『INNERMOST ASIA』OXFORD 1928ほかで、スタインの新疆探検は従来3回と言われていた

- が、張力・于江「斯坦因第四次入新簡述」『新疆文物』(1992年第二期)新疆考古研1992、新疆ウイグル自治区档案馆・佛大ニヤ機構編『近代外国探検家新疆考古档案史料』新疆美術攝影出版社 2001、同編『スタイン第四次新疆探検档案史料』同出版社 2007などにより、4回おこなわれたことが明らかになっている。第4回は追放に近いかたちで失敗におわったため、スタインは報告書を出版しなかった。4回目もニヤ遺跡で調査し多くの遺物を収集している。前掲26『絲綢之路散記』pp.65-66に、第四回探検で持ち帰った遺物のなかに「精絶」の文字入り漢簡があることを、林梅村が1995年大英図書館での研究時に見つけ出したとの記載がある。『スタイン第四次新疆探検档案史料』p.105には南京政府より「遊歴護照」(観光ビザ)を取り消され即日出境を命じられ、文化財持ち出しを禁止されたスタインがタイプした遺物一覧表(英文)が掲載されているが、この林梅村の記述と合わせると、スタインは重要と考えた遺物は持出したものと思われる。
32. 片山章雄「大谷探検隊第2次隊員橋瑞超の西域南道踏査」『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三卷)真陽社 2007,pp.226-228。大谷探検隊の緻密な研究で知られる片山氏はこの論考で、橋瑞超・野村栄三郎両隊員の記録・日記や前掲31『近代外国探検家新疆考古档案史料』、1910.2.3づけ「The Times」などから「イマーム・ジャッファール・サディク・マザールは確かに訪れているが、ニヤ遺跡往復は日程的に不可能のようでもあり、また絶対に不可能とも言い切れないという問題がなお残ることとなる。」としている。
 33. 新疆博物館「新疆民豊県北大沙漠中古遺址墓葬区東漢合葬墓清理簡報」『尼雅考古資料』新疆社会科学院知青印刷厂1988,pp.6-9
 34. 1980年、日中共同取材班の事前踏査で入った新疆考古研・新疆博物館・和田地区文物管理所隊が若干の調査を行った。井上靖・長澤和俊・NHK取材班『流砂の道・西域南道を行く』(シルクロード絲綢之路第4卷)日本放送出版協会1980,pp.99-132・227-243、日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三卷)真陽社2007,pp.65-100
 35. 長澤和俊『シルク・ロード史研究』国書刊行会1979,pp.157-227
 36. 覚書には、名称・意義・目的・目標・調査内容・期間・費用負担・文化財保護費負担・継続時は再度協議・組織・将来の文物展・将来のダンダウイリクやラワックなどの遺跡調査・遺物は新疆側所有・成果は双方共有・国家文物局批准後に正式協議書・日中両文で作成し同一内容同等効力などと

詳細に記されている。以降の覚書・協議書も同様である。

37. 許可書(92・文物字第288号)は、国家文物局用箋に新疆文化庁あて中国語で「申請(1992年21号)の日本学者とのニヤ遺跡調査に関する再報告を受け取った。研究の結果、貴庁と日本学者のニヤ遺跡共同調査に同意する。調査過程では『中華人民共和国考古涉外工作管理弁法』と規定を厳格に遵守すること。」「(拙訳)と記され公印が押印されている。
38. この報道中の「朝日」・「産経」・「京都」・「毎日」には、「龍谷大学が日中共同で取り組むと発表」・「今秋から龍谷大学を中心とした日中共同調査隊により初めて行われる」・「調査するのは龍谷大学仏教文化研究所と新疆文化庁」などと記載されている。本稿にあるように龍谷大学からの参加者もあるが、本調査の日本側主催・交渉・契約などは佛大サイドである。多くの機関・研究者の協力をえて行われているものである。
39. 助成は、国際学術研究・研究代表者・真田康道04041095(1992・93年度)、07041027・09041027(95・96・97年度)、09041035(98・99年度)でいただいた。
40. 沙漠車は、軟らかく起伏の激しい砂丘が連続する沙漠地帯や荒地を走行するために開発された大型特殊トラックで、大型タイヤの空気圧を運転席から調整でき、急傾斜の砂丘乗り越えでも横転しにくいなどの性能を有している。沙漠走破には運転技術の差が顕著にでる。新疆では石油開発にともない導入が進んだ。調査隊は期間中ドライバーつきで借用した。台数に限りあるためなどにより借用料は高額であった。殆どがベンツ社製。
41. 許可書は、国家文物局用箋に筆者あて中国語で「貴方がニヤ遺跡調査をいよいよ完成されるに際して、私は喜んで貴方に通知する、貴方が提出した新疆文物考古部門と合作を継続しニヤ遺跡の調査・発掘についての申請はすでに中国政府関係部門が批准した。新疆文化庁代表と合作の原則協議を調印し各専門機関と具体的計画を定め、調査・発掘方法・対象・経費・保護・安全などをつめ、中日共同発掘・調査隊を組織し、毎年活動協議を調印し手続きの申請・報告を行い活動が順調に進行することを保証してください。ニヤなどの新疆地区は我が国文物考古の重点区域のひとつであるが、沙漠に位置するため自然条件は大変困難である。貴方は長年にわたり新疆考古学研究と文物保護活動で大変大きな貢献をした、私は謹んで国家文物局を代表し、貴方と同僚たちに敬意を表し、中日共同考古調査発掘活動が継続してさらに大きな成績を取得することを祈る。」「(拙訳)などと記され、張徳勤局長の赤色印が押印されている。なお、本許可書は、前掲31『近

代外国探検家新疆考古档案史料』p.036にも掲載されている。

42. 林永健・李希光・孫躍新・真田康道・筆者『夢幻尼雅』(編集名誉主任: 田紀雲全人代副委員長、主任: 曲格平全人代環境資源保護委员会主任、題字: 趙撲初中国仏教協会主席、一部は日本語・英語)民族出版社 1995。ニヤ調査の紹介や1988年隊が悪路で苦闘する様子、1990年隊や94年隊の記念撮影、井ノ口・田辺・長澤各先生らの調査模様とともに多くの遺構・遺物の写真が収められている。筆者が張徳勤国家文物局局長一行7人と温泉(日光)にはいった、そこで中国文物保護基金会奨学金(前述)が誕生したと、本稿執筆時に再読し驚いた。
43. 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻・日中両文)法蔵館 1996。報告書には日中双方の挨拶や序に続き、本文記載の各氏の調査記録・研究論文とともに、豊富な遺構・遺物写真が収められ、1993年調査参加の米田文孝氏(関西大学考古学研究室)による92B4 (N2)とその一帯の測量図が添付されている。
44. 佛大日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム開催実行委員会編『日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨』、『日中共同ニヤ遺跡出土文物展』1997。『佛大学内報』1997.11.1, pp.2-3には真田康道日本側学術副隊長による詳細な報告が記されている。本行事は佛大新図書館開館記念として開催されたので、経費は佛大負担で行われた。
45. 中国文物精華編輯委員会編『中国文物精華』文物出版社1997
46. 新疆文物局・新疆博物館・新疆考古研・上海博物館編『新疆维吾尔自治区・絲路考古珍品』上海訳文出版社1998
47. 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二巻・日中両文)中村印刷 1999。報告書には日中双方の挨拶や序に続き、本文記載の各氏の調査記録・研究論文とともに、豊富な遺構・遺物写真が収められ、真田康道学術副隊長と内田賢二氏ら分布調査班・測量班が心血をそそいだニヤ遺跡全体の遺構分布図と周辺一帯の測量図や分布調査一覧表・CD-Rが添付されている。なお第一巻は一冊で日中両文であったが、第二巻では読みやすくするため、日本語・中国語・図版の三冊セットとした。
48. 「21世紀絲綢之路城市国際会議建議草案」。本件は2006年8月に「第7回アジア太平洋都市サミット」を招聘し開催するきっかけになったと聞いている。会議にはウルムチのほか福岡・北九州・佐賀・大分・宮崎・鹿児島や上海・大連・プサン・バンコクなど6ヶ国14都市が参加した(「新疆日報」・「新

疆経済報」2006.8.9)。

49. 新疆文物局・新疆考古研・佛大ニヤ機構ほか編『中日尼雅遺址學術研討会
發言提要・日中共同ニヤ遺跡學術研究シンポジウム發表要旨』2000
50. 趙豊・于志勇編『沙漠王子遺寶』芸紗堂/服飾工作隊(香港) 2000
51. 劉宇生・楊新才編『外国友人中国情・小島康誉与新疆』新疆人民出版社
2001には「星雲大師および他の指導者と会見」(中国語・拙訳)と記載され、
呉伯雄副主席名は記されていない、当時の兩岸関係を考慮したものと考え
られる。北京サイドの兩岸文化交流により深い目的があることは、台湾側
も筆者そして本書編者も承知していた。筆者と大陸側の汪道涵海峡兩岸関
係協会会長との会見も計画されたが、氏の健康状態などで中止となった。
52. 考古雑誌社編『二十世紀中国百項考古大発見』中国社会科学出版社2002
53. このような外国人顕彰の大会開催は中国ではきわめて稀とのことであった。
記念行事は、前掲51『外国友人中国情・小島康誉与新疆』出版のほか写真展・
植樹・公演・大型宴会が催された。「文化交流貢献賞」は11人目との説明で
あった。筆者は「小島新疆訪問20周年記念答礼宴」を開催し新疆各方面歴
代の指導者と幹部・友人へ感謝を表した。
54. 前掲31『近代外国探検家新疆考古档案史料』。スタイン・ルコック・大谷光
瑞・橘瑞超・ハンティントン・ヘディン・ペリオ・マンネルヘイムなどの
新疆探検の公文書多数と写真が収められている。
55. 東京国立博物館・NHKほか編『シルクロード・絹と黄金の道』NHK・NHK
プロモーション2002
56. 本番組「シルクロード浪漫－渴いた3,000kmの果てに…」は東海テレビ開局
45周年記念番組として2004年1月にフジテレビ系列で全国放送された。
57. 佛大ニヤ機構編『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』東方出版2002
58. 佛大尼雅機構編『絲綢之路・尼雅遺址之謎』(中国歴史文化遺産保護网訳)天
津人民美術出版社2005。本書刊行のきっかけは、兪偉超中国歴史博物館(現
中国国家博物館)館長との縁である。氏と水中考古学を通じて交流のあった
田辺昭三日本側學術隊長の紹介である。以来、ニヤ調査を北京より支持い
ただいた。その後、入院され孫躍新と見舞いに行き、氏の「二代の精絶国王」
も掲載されている本書日本語版を贈呈すると、「写真も多く良い本だが、残
念ながら自分は日本語が読めない。中国語版があれば更に良い。」と。この
一言が中国語版出版へとつながった。次に見舞うと病状重く、出版を急い
だが間に合わず、自宅弔問時に遺影へ捧げた。この経過は本書「前言」に

記載されている。

59. NHK・NHKプロモーション・産経新聞社編『新シルクロード展・幻の都楼蘭から永遠の都西安へ』NHK・NHKプロモーション・産経新聞社2005
60. 香港文化博物館編輯委員会編『絲路珍宝－新疆文物大展』香港康樂及文化事務署2005
61. 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』（第三卷）真陽社2007。報告書には日中双方の序に続き、本文記載の各氏の調査記録・研究論文とともに遺物多数が収録されている。ホータン博物館・ミンフン資料館収蔵のニヤ出土遺物はこれまで部分的にしか発表されていなかったが、今回その全容を記載した。第一巻・第二巻は日中両文であったが、第三巻は日本文のみとし、中国語版は別途出版されることとなった。
62. スウェン・ヘディン『アジアの砂漠を越えて』（下・ヘディン中央アジア探検紀行全集2・横川文雄訳）白水社1964, pp.60-69。注30同様に、地元の一部では知られていて、ヘディンは本著p.60に「コートンで聞いていた古い町の廃墟を訪ねてみる…」と記している。
63. 前掲30『ANCIENT KHOTAN』（Vol.1）, pp.236-303、玄奘・弁機『玄奘三蔵の旅・大唐西域記』（2・水谷真成訳）平凡社1984, pp.214-215
64. 前掲14「大谷コレクションの現状」p.218に「光瑞師はロンドン滞在中にスタイン、ヘディンが輝かしい成果を挙げて帰国したとの報道、とくに仏教遺蹟の発見に強く刺激を受けた模様で、この両探検家との面接を図り、1902年の帰国に際して、五人の従者を伴って…その後十余年に及ぶ探検事業のはじまりで…」とある。
65. 2002年の発掘の際、1928年にこの遺跡を踏査したボスハートの英文メモ「To the poor fellow who believed to find something here we leave this papers with our kindest regards.E.Trinkler,W.Bosshart.25-3-28.」（私たちがこの新聞を残したここで、何かを発見できると信じる可哀想な人たちに良いことを祈る。トリンクル、ボスハート、1928.3.25）が記された漢字の名刺（博斯喀・瑞士国植物学）や当時の新聞「Neue Zürcher Zeitung」・固形燃料の外箱などが発見された。筆者自身も新疆考古研で実見し歴史の面白さを感じた。榮新江「ダンダンウイリクの考古学的調査と研究（1896～2002年）」『日中・中日共同ダンダンウイリク遺蹟学術調査報告書』真陽社2007, pp.51-52に数点の写真とともに詳細に記述されている。
66. 張鉄男が1996年に撮影した遺構写真は『新疆文物古迹大観』新疆美術攝影

- 出版社 1999, pp.74-75に掲載されている。肖小勇「探索沙漠遺址丹丹烏里克」『新疆文物』(1997年第4期)新疆考古研1998, pp.13-19
67. Christoph Baumer 『Southern Silk Road: In the Footsteps of Sir Aurel Stein and Sven Hedin』Orchid Press 2000、『Die Südliche SeidenstraBe』Mainz am Rhein : von Zabern 2002。パウマーは正規許可を取得せず進入・発掘し遺物を持ち帰った。`調査、で当局と各種トラブルがあったと聞いている。`Sino-Swiss Expedition 1988、と自称する調査隊はスイス側4名とウイグル族ラクダ使い・漢族旅行社員5名の計9名により構成され、当人は許可をえて発掘をおこなったとの認識でか報告書もこのように出版している。新疆側の抗議で一部は返却したと聞く。榮新江は前掲65「ダングアンウイリクの考古学的調査と研究(1896~2002年)」pp.50-51で「我々は、このような勝手に発掘することは違法な行為であり、シルクロードに位置する重要な埋蔵文化財の保護からも深刻な問題をもたらした事を指摘しなければならない。」などと状況を詳細に記述している。
68. 前掲27『中央アジア踏査記』pp.71-72。ダングアンウイリク遺跡は行政区域としては和田地区策勒県に属している。
69. 前掲27『中央アジア踏査記』p.72、榮新江「傑謝(ダングアンウイリク)・唐代于闐国境の町」『日中共同ダングアンウイリク遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨』佛大ニヤ機構2005, p.45
70. 新疆政府許可のもと外国人として公式初到達である(「筆者あて盛春寿局長名のダングアンウイリク遺跡保護費感謝状」2002.11.3)。前述のようにスタイン後、数隊が踏査しているが、新疆文物局の許可を取得せずに2001年に入った邦人研究者・旅行者がいるようで、「スタイン以後初めてここを訪れたのは、2001年に踏査したわれわれのグループである。」との記述がある(長澤和俊編『シルクロードを知る事典』東京堂出版2002, pp.180-181)。なにかの勘違いと思われる。
71. 前掲59『新シルクロード展・幻の都楼蘭から永遠の都西安へ』
72. 新疆政府の特別許可をえて、劉曉慶処長や地元政府職員同行のもと、外国人として公式初到達であった。地元政府の人にとっても得難い機会が多くの人が同行した。高山病(峠は海拔4,284m ?)により岸田善三郎・梶子夫妻は峠目前で中止された。一帯は1999年にキルギスタンと国境が確定し、中国・キルギスタン両国の国境標識が別々に立てられている。軍事管理区である。道路を通し国境貿易の計画もあると聞く。ベデル峠のほかにムザル

ト峠との仮説もある。

73. 佛大ニヤ機構編『日中共同ダングンウイリク遺跡学術研究プロジェクト国際シンポジウム発表要旨』2005
74. このような無許可調査を度々見聞きしてきた筆者は、「共生と文化財保護のネットワーク構築を目指す」を掲げて、研究者にかなり知られているミニコミ季刊誌『トンボの眼』9号(2007年7・8・9月), pp.14-15に「注意喚起」を目的として「外国法規とも共生を」を寄稿した。新聞は実名で報道したが、寄稿では伏せた。本事件は本文記載のように中国でも報道され、その書き込みは約1,000件あり、その約9割は「日本人は悪い」と日中関係に絡めての批判、約1割は「同行中国人も悪い」と冷静な意見とのことであった。以前にホータンでも同様の事例があり、文部科学省は研究機関へ注意喚起の連絡をしたようである。
75. 佛大アジア宗教文化情報研究所・佛大ニヤ機構編「日中共同シルクロード学術研究国際シンポジウム」2007
76. 日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査隊編『日中・中日共同ダングンウイリク遺跡調査学術報告書』(日本語版)真陽社2007。報告書には日中双方の序につづき、本文記載の諸氏の調査記録・研究論文とともに遺構一覧表や遺構・遺物写真が多く収められて、遺構分布図と中心部分の地形図が添付されている。
77. 拙編『見証新疆変遷』新疆美術摄影出版社 2008。李屹中共新疆委員会常務委員・宣伝部長の新疆発展を概観した序につづき、筆者が体験してきた新疆の変化・発展ぶりを序でのべ、新疆各地の同一地点の新旧写真や改革開放30年の発展を示すグラフなどを収められている。友人のカメラマン提供の古い写真は今では貴重な記録である。
78. 国立歴史博物館編輯委員会編『絲路伝奇・新疆文物大展』国立歴史博物館 2008
79. 2010年9月、テレビ東京開局45周年記念番組「封印された三蔵法師の謎～シルクロード3,000キロに挑んだ男～」として全国放送された。番組では玄奘三蔵関係と推定されている文書・越えたと仮説のベデル峠がテレビ初公開された。なかでもベデル峠は軍事管理区のため撮影には軍も同行した。テレビ局・制作会社側に各種問題があり、筆者は2010年12月撮影協議書契約者の新疆側への経過説明と遺憾表明に立ち会った。
80. 拙編『記念改革開放30周年・見証新疆変遷』(第二巻)新疆美術摄影出版社

2009. 穆扎帕尔・米吉提新疆政府外事弁公室主任の新疆の国際交流面での発展を紹介した序につづき、筆者が体験した変化を序でのべ、ウルムチ・クラマイやアクス・カシュ・アルタイ・ホータンなど行政区域ごとの発展ぶりが文と写真で示され、筆者活動の関係先である外事弁公室・文化庁・新疆大学・新疆日報・文物局・档案局の発展ぶりも文と写真で紹介されている。この種の出版物としては、異例の初版10,000冊で、売り切れ間近と聞く。友人カメラマンら提供の古い写真は貴重な記録で人気を呼んでいるようだ。

81. 新疆文物局2010.12.24、FAXによる連絡。図録未到着。
82. 清華大学国際伝播研究中心編『軟實力与政府伝播国際研討会論文集』2009
83. 筆者のほか、趙啓正國務院新聞弁公室前主任・熊光楷人民解放軍前副総参謀長・マスードハーンパキスタン駐中国大使らが受賞した。国際交流面で顕著な成果をあげたとそれぞれの業績が紹介された。
84. 新疆考古研ほか編『漢唐西域考古－尼雅・丹丹烏里克国際学術研討会會議論文提要』2009。注6のように、ウルムチ騒乱以降新疆と外部との通信は遮断されていたため、シンポジウム事務局である新疆側から欧米の研究者への連絡は困難で、欧米よりの参加者は1名のみであった。
85. 新疆考古研・佛大ニヤ機構編『丹丹烏里克遺址－中日共同考察研究報告』文物出版社2009。2007年刊行の日本語版より発掘状況など多くの写真が掲載されている。
86. 佛大宗教文化ミュージアム・佛大ニヤ機構編『漢唐西域考古－ニヤ・ダンウンウイリク国際学術シンポジウム発表要旨要約資料集』2010
87. 新疆文物局2010.12.24、FAXによる連絡。Victor Mair・Elizabeth Wayland Barberほか『SECRETS OF THE SILK ROAD』BOWERS MUSEUM 2009
88. 先方より、日本人では西園寺公一・井上靖・団伊玖磨・江上波夫・松下正治氏ら10数人が受賞しているとの紹介があった。北京での授与式には康秀英新疆政府外事弁公室処長・孫躍新・周培彦両氏と参加した。本表彰前の筆者の国際貢献活動紹介報道は数多く一部を記しておく。「ウルムチ晩報」1993.11.10、1997.5.28、1997.6.11、1998.12.24、1999.7.2、2002.12.25、「人民日報」1994.8.23、「人民日報」(海外版) 1995.5.27、「新疆日報」1995.10.11、1997.2.18、1998.9.5、2000.3.3、2002.7.3、2003.6.5、2003.7.7、2009.12.2、「中国文物報」1996.1.21、「文匯報」1996.5.15、「新疆經濟報」2000.3.20、2009.6.29「華西都市報」2000.10.24、「中国環境報」2000.12.6、「毎日新報」2003.6.2、「京都新聞」2003.9.29、「産経新聞」2006.11.16、「読売新聞」2007.6.5、「新民晩報」(日本版)

2009.1.12、2009.12.28。

89. 本賞は各地文化財関係機関などからの推薦をへてネット投票と文化財関係有識者による専門家委員会投票で選ばれたもので、筆者はネット投票では12位であったが、委員11名全員からの票を得て、十傑のひとりとなった。ネット投票順位1・3～6・8・10位者は選出されなかった。授与式には孫躍新・周培彦両氏と参加した。本表彰前の筆者の文化遺産保護研究活動紹介報道は数多く一部を記しておく。「日本経済新聞」1993.5.4、「新疆日報」1993.11.27、2004.11.10、2005.4.5、2009.12.4、2010.5.8、「中日新聞」2003.8.17、「人民网」2009.9.9、「新民晩報」(日本版)2010.3.29、2010.5.31、「新疆都市报」2010.5.6、「新浪」・「搜狐」・「鳳凰網」・「21CN」・「网易」・「新民網」2010.5.10、「中日新報」2010.5.15、「新華時報」2010.5.22、「世界新聞報」2010.6.8。なお文化遺産保護研究・公共外交面の実績に対して、前述以外に日本から「文化庁長官表彰」(2001)・「外務大臣表彰」(2002)、中国からは「ウルムチ市名誉市民賞」(1997)・「新疆政府少数民族教育事業貢献賞」(2003)を受賞している。恥じいるが、国際貢献や文化財保護研究が認められた意味においてありがたい。
90. 單霽翔著『留住城市文化的“根”与“魂”——中国文化遗产保护的探索与实践』科学出版社 2010年には、中国各地はじめアメリカ・イギリスなどでの文化遺産保護と都市建設との調和についての講演24回分が収録されている。講演はパワーポイントで行われ、平城京遺跡や広島原爆ドームなど世界各地の文化遺産や保護現場などがカラーで豊富に掲載されている。授与式後に中国語で「尊敬する小島康誉さんへ：“薪火相传——中国文化遗产保护年度杰出人物”受賞を祝し、貴方の長年の中国文化遗产保護への支持と貢献に感謝する。單霽翔 2010.06.13 無錫」(拙訳)とサインされた同書を頂いた。記して感謝としたい。
91. 新疆文物局2010.12.24、FAXによる連絡。筆者は本稿校正時の2011年3月初め、新疆文物局李軍・甘偉両氏の連絡により、同展(中国語表記は「絲綢之路大文明展」)を早稲田大学博士でもあるミン・ヴィヨン・フン韓国国立中央博物館アジア部部長の案内で参観し、図録『シルクロードと敦煌』などを頂いた。記して感謝としたい。
92. 東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻はじめ筑波・拓殖・桜美林・杏林・文教・神戸・広島など各大学に国際協力研究科などが設置され始めている。今後、設置校は急速に増えるものと予測される。

93. 文化財の消失には各種原因があげられる。例えば、長年の自然劣化、道路や都市建設などによる無意識あるいは意識的破壊、盗掘、火災、探検や発掘(研究目的であっても結果的に劣化消失につながった例も多い)、思想的破壊(文革による大量破壊やターリバーンによるバーミヤン遺跡爆破)、戦争などであり、無形文化財でいえば継承者不在などがあげられよう。消失の一方で新しい文化財も世界各地で生まれている。新聞社の上場記念企画で安田暎胤薬師寺執事長・対談した際、「(薬師寺は建物ばかり作っているという人もいるが)千年後の国宝をつくる覚悟で、金堂や西塔を復興、さらに中門・僧堂・玄奘三蔵院とすすみ、回廊を建設中、今後は大講堂・鐘楼・経蔵なども復興したい。」と述べられた。「千年後の国宝をつくる。」という壮大な構想に感動した(「中部経済新聞」1993.5.21)。これも一例であろう。
94. ダンダンウイリク遺跡は規模と調査報告書がその時点で刊行されていないなどの理由で選ばれなかったと聞いた。
95. この配信記事は、「京都新聞」2010.7.28、「東京新聞」2010.8.11、はじめ秋田・岩手・山形・福井・新潟・日本海・中日・岐阜・山陰中央・徳島・愛媛・佐賀・琉球新聞などに前後して掲載された。

図：(撮影者名記載以外は筆者撮影)

1. ユーラシア大陸での中国新疆の地理的概念図、筆者作図
2. キジル千仏洞・ニヤ遺跡・ダンダンウイリク遺跡略位置図、『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』より(一部改変)
3. キジル千仏洞谷西区外観、1986
4. キジル千仏洞第38窟、2010
5. 外国人旅行証(1884)、拙著『シルクロードの点と線』プラスより
6. キジル千仏洞修復保存資金贈呈協議書調印式(新疆迎賓館)、1987、新疆文化庁撮影
7. キジル千仏洞修復保存募金パンフレット、1987、日中友好キジル千仏洞修復保存協定会提供
8. キジル千仏洞修復保存募金パブリシティなどの数々、1987～88
9. キジル千仏洞修復保存工事状況(配水塔建設)、1987
10. キジル千仏洞修復保存工事状況(下水管設置)、1988
11. キジル千仏洞修復保存工事状況(断崖補強材料実験)、1988

12. キジル千仏洞修復保存工事状況(断崖補強・回廊設置)、1989
13. キジル千仏洞修復保存工事状況(壁画修復・第8窟)、1989
14. 修復後のキジル千仏洞谷西区外観と鳩摩羅什三蔵像、2003
15. 「新疆亀茲研究院成立25周年記念大会」会場(キジル千仏洞)、2010、楊新才
撮影
16. ミンフウンからカパクアスカンへの行程、1988、堀尾宝撮影
17. カパクアスカンからニヤ遺跡へのラクダでの行程、1988
18. ニヤ遺跡仏塔とぬかずく筆者、1990、堀尾宝撮影
19. ニヤ遺跡遺構(92B9=スタイン番号N3)、2004
20. タクラマカン沙漠の軟らかい砂にスタッグする沙漠車、1996
21. ニヤ遺跡調査BC(仏塔西)、1994
22. 国家文物局ニヤ遺跡調査発掘許可証、1994
23. ニヤ遺跡調査出土品(壺・木簡・珊瑚・壁画、一部遺跡で・一部新疆考古研
で)、1995、杉本和樹・筆者撮影、佛大ニヤ機構提供
24. ニヤ遺跡調査遺構測量状況(92B4=N2)、1994
25. ニヤ遺跡調査遺構撮影状況(92B4=N2)、1995
26. ニヤ遺跡調査大型GPSでの測量状況(仏塔東方)、1996
27. ニヤ遺跡調査王侯男女合葬棺開棺調査状況(新疆考古研)、1995
28. ニヤ遺跡調査出土品「五星出東方利中国」錦、1995、劉玉生撮影、佛大ニ
ヤ機構提供
29. ニヤ遺跡調査遺構発掘状況(93A35=N5)、1996
30. ニヤ・ダンダンウイリク両遺跡調査報告書・シンポジウム発表要旨など、
1995～2010
31. 佛大新図書館開館記念国際シンポジウム(佛大図書館)、1997
32. 同文物展を参観する海部俊樹元首相ら(佛大図書館)、1997、周培彦撮影
33. ニヤ遺跡調査発掘後の遺構(93A35=N5)、1995、真田康道撮影、佛大ニヤ
機構提供
34. ニヤ遺跡調査遺構測量図(93A10=N13)、1996、佛大ニヤ機構提供
35. バッカクエギリからダンダンウイリク遺跡へのラクダでの行程、2002
36. ダンダンウイリク遺跡遺構(CD-1=スタイン番号D15)、2002
37. ダンダンウイリク遺跡調査壁画試掘状況(CD-4=D1)、2002
38. ダンダンウイリク遺跡調査出土品「如来図」(新疆考古研)、2003
39. ダンダンウイリク遺跡調査壁画保護処置状況(新疆考古研)、2004

40. ダンダンウイリク遺跡調査壁画模写状況(新疆考古研)、2004
41. ダンダンウイリク遺跡調査壁画研究状況(新疆考古研)、2005
42. ダンダンウイリク遺跡出土壁画展示状況(江戸東京博物館)、2005
43. ダンダンウイリク遺跡調査遺構撮影状況(CD-1=D15)、2005
44. ダンダンウイリク遺跡調査研究状況(BC・PC上はCD-30)、2005
45. 「漢唐西域－ニヤ・ダンダンウイリク国際学術シンポジウム」会場(北京大学)、2009
46. 同上、日本側参加者(一部)、2009
47. 小島新疆文化文物優秀賞授与式での受賞者(一部・新疆芸術劇場)、2010、楊新才撮影
48. 小島新疆大学奨学金授与式後の記念撮影(一部・新疆大学)、2009、楊新才撮影
49. 遺跡での日中双方打合せ風景(ニヤ遺跡BC)、1996
50. 沙漠での食事風景(ニヤ遺跡BC)、1996
51. 日中双方協力しあって、記念撮影(一部・ニヤ遺跡BC)、1995、杉本和樹撮影、佛大ニヤ機構提供
52. 日中双方協力しあって、記念撮影(一部・ダンダンウイリク遺跡BC)、2004、中国中央テレビ撮影、佛大ニヤ機構提供
53. 地下水で生き残る胡楊(ダンダンウイリク遺跡西方)、2006
54. 広大なタクラマカン沙漠(バッククエグリとダンダンウイリク遺跡のほぼ中間)、2005

参考文献：(文末に※付したものは中国語文献)

全般

謝彬『新疆事情』(序：孫文・調第14号・外務省調査部訳)外務省調査部1934(原著『新疆遊記』)

護雅夫編『漢とローマ』(東西文明の交流1)平凡社1970

山田信夫編『ベルシャと唐』(東西文明の交流2)平凡社1971

日野強『伊犁紀行』(復刻版)芙蓉書房1973

中村元ほか編『シルクロードの宗教－幻の寺院をたずねて』(アジア仏教史中国編Ⅴ)佼正出版社1975

松田壽雄博士古稀記念出版委員会編『東西文化交流史』雄山閣1975

前嶋信次・加藤九祚編『シルクロード事典』芙蓉書房1975
 岡崎敬『増補・東西交渉の考古学』平凡社1980
 新疆社会科学院民族研究所編『新疆簡史』(第一卷)新疆人民出版社1980※
 小笠原宣秀・小田義久『要説西域仏教史』百華苑1980
 大島直政『イスラムからの発想』講談社1981
 塩英哲編訳『精選・中国地名辞典』凌雲出版1983
 長澤和俊『シルクロード文化史』(Ⅰ～Ⅲ)白水社1983
 玄奘・弁機『玄奘三蔵の旅－大唐西域記』(全2巻・水谷真成訳)平凡社1983・84
 前嶋信次『シルクロードの謎』大和書房1985
 季羨林ほか校注『大唐西域記校注』中華書局1985※
 新疆维吾尔自治区地方誌編纂委員会編『新疆年鑑』(1986)新疆人民出版社1986※
 安倍治夫『イスラム教』現代書館1986
 前嶋信次『イスラムの宗教と歴史』世界聖典刊行協会1987
 江上波夫編『中央アジア史』(世界各国史16)山川出版社1987
 長澤和俊『新考・玄奘三蔵の旅』佼正出版社1987
 拙著『シルクロードの点と線』プラス1988
 拙稿「西域亀茲における仏教滅亡についての一考察」『佛大通信教育部卒業論文集』(第24号)佛大通信教育部1990
 譚其驤編『簡明中国歴史地図集』中国地図出版社1991※
 拙著『シルクロード新疆の旅』プラス1991
 シルクロード学研究センター編『シルクロード学の提唱』小学館1994
 劉宇生・楊新才編『外国友人中国情・小島康誉与新疆』新疆人民出版社2001※
 金子民雄『西域探検の世紀』岩波書店2002
 劉宇生・張濱・劉曉慶編『シルクロードの十字路・新疆概覧』(山口昭ほか訳)文芸社2003
 新疆測繪局編『新疆维吾尔自治区地図冊』山東省地図出版社2007※
キジル千仏洞修復保存関係
 平凡社・中国文物出版社編『中国石窟キジル石窟』(第1～3巻)平凡社1983～85
 堀賢雄『大谷探検隊・西域旅行日記』白水社1987
 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会『日中友好キジル千仏洞修復保存協賛金
 のお願い』1987
 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」
 1988

日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」
1989

中国美術全集編輯委員会編『中国美術全集－絵画編16新疆石窟壁画』文物出版社1989※

韓翔・朱英栄『亀茲石窟』新疆大学出版社1990※

東京国立博物館ほか編『ドイツ・トゥルフアン探検隊・西域美術展』朝日新聞社1991

龍谷大学350周年記念学術企画出版編集委員会編『佛教東漸・祇園精舎から飛鳥まで』思文閣出版1991

門崎敬一『太陽』(特集・大谷探検隊) 1991.6月号No.360平凡社1991

馮斐編『亀茲仏窟人体芸術』新疆美術攝影出版社1992※

朱英栄『亀茲石窟研究』新疆美術攝影出版社1993※

新疆亀茲石窟研究所編『亀茲仏教文化論集』新疆美術攝影出版社1993※

新疆亀茲石窟研究所編『亀茲芸術研究』新疆人民出版社1994※

霍旭初・祁小山編『絲綢之路・新疆仏教芸術』新疆大学出版社2006※

馬秦編『亀茲造像』新疆科学技術出版社2008※(一部日本語)

中国新疆壁画芸術編輯委員会編『中国新疆壁画芸術』(1～3巻)新疆美術攝影出版社2009※

東京芸術大学亀茲石窟研究プロジェクト編『張愛紅シルクロード亀茲石窟壁画模写展覧会』東京芸術大学美術研究科油画技法材料研究室2010

ニヤ調査関係

大谷探検隊・長澤和俊編『シルクロード探検』(西域探検紀行全集・第9巻)白水社1966

榎一雄『シルクロードの歴史から』研文出版1979

長澤和俊『シルク・ロード史研究』国書刊行会1979

前掲『増補・東西交渉の考古学』1980

井上靖・長澤和俊・NHK取材班『流砂の道・西域南道を行く』(シルクロード絲綢之路・第四巻)日本放送出版協会1980

MAUREL STEIN『SERINDIA』(復刻版) MOTILAL BANARSIDASS 1980 (初版 OXFORD UNIVERSITY 1921)

MAUREL STEIN『ANCIENT KHOTAN』(復刻版) COSMO PUBLICATIONS 1981 (初版 OXFORD UNIVERSITY 1907)

MAUREL STEIN『INNERMOST ASIA』(復刻版) COSMO PUBLICATIONS 1981 (初版

OXFORD UNIVERSITY 1928)

蘆燕『絲路文物被盜記』新華出版社1984※

オーレル・スタイン『中央アジア踏査記』(澤崎順之助訳)白水社 1984 (原著『ON ANCIENT CENTRAL-ASIAN TRACKS』Macmillan 1933)

穆舜英『神秘的古城・樓蘭』新疆人民出版社1987※

韓翔・王炳華ほか編『尼雅考古資料』新疆社会科学院知青印刷厂1988※

日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一卷・日中両文)法蔵館 1996

佛大日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム開催実行委員会編『日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨』、『日中共同ニヤ遺跡出土文物展』同開催実行委員会1997

新疆考古研・新疆博物館編『新疆文物考古新収獲』(続)新疆美術摄影出版社1997※

中国文物精華編集委員会編『中国文物精華』文物出版社1997※

芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考・二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館1999

日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二卷・日中両文)中村印刷 1999

オーレル・スタイン『砂に埋もれたホータンの廢墟』(山口静一・五代徹訳)白水社 1999 (原著『Sand-Buried Ruins of Khotan Personal Narrative of a Journey of Archelological and Geographical Exploration in Chinese Turkestan』Hurst and Blackett 1904)

新疆文物局・新疆考古研・新疆博物館ほか編『新疆文物古迹大観』新疆美術摄影出版社1999※

加藤九祚『シルクロードの大旅行家たち』岩波書店1999

趙豊・于志勇編『沙漠王子蹟寶』芸紗堂/服飾工作隊2000※

富谷至編『流沙出土の文字資料－樓蘭・尼雅文書を中心に』京都大学学術出版会2001
新疆ウイグル自治区档案馆・佛大ニヤ機構編『近代外国探検家新疆考古档案史料』新疆美術摄影出版社2001※(一部日本語・英語)

東映編『シルクロード西域文物展』東映2001

佛大ニヤ機構編『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』東方出版2002

白須淨眞『大谷探検隊とその時代』勉誠出版2002

林梅村『絲綢之路散記』人民美術出版社2004※

片山章雄編『予會々英国倫敦に在り』大谷記念館2004

- 林梅村『シルクロードと中国古代文明・流沙の記憶をさぐる』(川上陽介・申英蘭訳)日本放送出版協会 2005 (原著『漢唐西域与中国文明』文物出版社1998)
- 新疆ウイグル自治区档案馆・佛大ニヤ機構編『スタイン第四次新疆探検档案史料』新疆美術攝影出版社2007※(一部日本語・英語)
- マカートニ夫人『カシュガル滞在記』(金子民雄訳)連合出版2007 (原著『An English Lady in Chinese Turkestan』Ernest Benn 1931)
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中・中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三卷)真陽社2007
- 国立歴史博物館編輯委員会編『絲路伝奇・新疆文物大展』国立歴史博物館2008※
- 新疆文物漢文編集部編『新疆文物・漢唐西域考古－尼雅・丹丹烏里克国際学術討論会専刊』(2009第3・4期・第95・96期)新疆考古研2009※(一部日本語)
- 佛大宗教文化ミュージアム・佛大ニヤ機構編『漢唐西域考古－ニヤ・ダンダンウイリク国際学術シンポジウム発表要旨要約資料集』2010
- ダンダンウイリク調査関係
- スウェン・ヘディン『アジアの砂漠を越えて』(下・ヘディン中央アジア探検紀行全集2・横川文雄訳)白水社1964 (原著『Durch Asiens Wüsten』Leipzig / F. A. Brockhaus 1910)
- 前掲『ANCIENT KHOTAN』1981
- 前掲『中央アジア踏査記』1984
- 新疆考古研編『新疆文物』(1997年第4期)新疆考古研1998※
- 前掲『砂に埋もれたホータンの廃墟』1999
- 前掲『新疆文物古迹大観』1999※
- 前掲『流沙出土の文字資料－樓蘭・尼雅文書を中心に』2001
- 長澤和俊編『シルクロードを知る事典』東京堂出版2002
- 佛大ニヤ機構編『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロジェクト国際シンポジウム発表要旨』2005
- 日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査隊編『日中・中日共同ダンダンウイリク遺跡調査学術報告書』真陽社2007
- 前掲『絲路伝奇・新疆文物大展』2008※
- 新疆考古研・佛大ニヤ機構編『丹丹烏里克遺址－中日共同考察研究報告』文物出版社2009※
- 前掲『新疆文物・漢唐西域考古－尼雅・丹丹烏里克国際学術討論会専刊』2009
- 前掲『漢唐西域考古－ニヤ・ダンダンウイリク国際学術シンポジウム発表要旨

要約資料集』2010

浅岡俊夫「ダンダンウイリクーそれは仏教の道場だったー」『立命館大学考古学論集』(V)立命館大学考古学論集刊行会2010

国際協力関係

アマルティア・セン『貧困の克服－アジア発展の鍵は何か』(大石りら訳)集英社2002

高木保興編『国際協力学』東京大学出版会2004

内海成治編『国際協力論を学ぶ人のために』世界思想社2005

国際協力機構編『国際協力機構年報』(2005)国際協力出版会2005

下村恭民・辻一人ほか『国際協力－その新しい潮流』(新版)有斐閣2009